

# 新潟市文化財センター年報

## 第3号

—平成26（2014）年度版—

2016

新潟市文化財センター

# 新潟市文化財センター年報

## 第3号

—平成26（2014）年度版—



秋葉区 原遺跡出土縄文土器（第8次・SK3出土）

2016

新潟市文化財センター

## 新潟市文化財センター

### 【設 置】

新潟市文化財センター（以下「文化財センター」）は、埋蔵文化財及び有形民俗文化財を保存し、活用を図ることにより、これらに対する市民の関心及び理解を深め、もって市民文化の向上に資するため、「地方教育行政の組織及び運営に関する法律」第30条の規定に基づき設置された教育機関です。

### 【事 業】

- ① 埋蔵文化財の調査及び研究に関すること。
- ② 発掘調査等により出土した考古資料の収集及び保存並びに公開その他の活用に関すること。
- ③ 有形民俗文化財の保存及び活用に関すること。

新潟市内には旧石器時代から江戸時代に至る700か所以上の遺跡が知られています。平成17（2005）年の14市町村による広域合併後の各種開発事業等の増加に伴い、発掘調査も増加の一途をたどり、新たに発見される遺跡も年々増加しています。また、それらに伴う出土遺物や記録類も増えています。

文化財センターは各種開発事業や史跡整備等に伴う発掘調査を行い、埋蔵文化財の調査研究・収蔵保管・展示活用を進めていくために平成23（2011）年7月にオープンしました。

文化財センターには、民俗資料収蔵庫も併設されており、併せて市指定文化財の旧武田家住宅を移築復元しています。



新潟市文化財センター外観

## 例 言

- ・本書は、文化財センター及び文化スポーツ部歴史文化課埋蔵文化財担当（以下「埋蔵文化財担当」）の主に埋蔵文化財に係わる平成26年度の業務年報である。Ⅰに新潟市の埋蔵文化財行政の概要、Ⅱに各種開発事業に伴う埋蔵文化財に係る事前審査、Ⅲに文化財センター業務、Ⅳに史跡古津八幡山遺跡歴史の広場業務、Ⅴに資料紹介や研究ノート等の研究活動について収録している。
- ・『新潟市文化財センター年報』（以下「年報」）は平成26年から刊行され、本書は第3号にあたる。文化財センター開館までの新潟市の埋蔵文化財行政の概要及び経緯、文化財センターの概要については、第1号（新潟市文化財センター2014）に記載されている。
- ・本書は文化財センター・埋蔵文化財担当職員が中心になり、分担執筆した。執筆者の氏名は各文章の末尾に記載した。また、V3は澤田純明氏・佐伯史子氏・奈良貴史氏（新潟医療福祉大学）より玉稿を賜った。なお、全体の統一をはかるために内容が変わらない範囲で編集者が若干の字句の修正を行った。
- ・本書に記載されている施設名及び所属等については、本書刊行当時のものである。
- ・Ⅱ2、Ⅲ2の試掘・確認調査、本発掘調査、工事立会の各概要は主要なもののみを掲載した。
- ・Ⅱ2、Ⅲ2の各概要の図1「調査地点の位置」は、国土基本図（2,500分の1）を使用しており、縮尺は10,000分の1または15,000分の1（Ⅱ2（10））で掲載した。また、地図の上位が北である。
- ・図・表番号は、各章ごとに1から付けている。しかし、Ⅱ2、Ⅲ2は項（概要）ごとに、Ⅴは節ごとに番号を付けている。
- ・掲載遺物の実測・トレース等は文化財センターで行った。
- ・本書の編集は金田拓也・八藤後智人が行った。

## 目 次

Ⅰ 新潟市の埋蔵文化財保護行政について	1
Ⅱ 開発事前審査	2
1 事前審査内容	2
2 平成26年度事前審査に係る試掘・確認調査の概要	7
Ⅲ 文化財センターの事業	39
1 本発掘調査の概要	39
2 平成26年度の本発掘調査	40
3 整理作業の概要	46
4 資料の収蔵・保管	47
5 資料の公開・活用	48
6 教育普及活動	59
7 保存処理	64
8 新潟市文化財センター運営協議会	65
9 決算額	65
Ⅳ 史跡古津八幡山遺跡歴史の広場	66
1 史跡古津八幡山遺跡整備事業の概要	66
2 教育普及活動	66
3 古津八幡山古墳復元整備の概要	69
Ⅴ 研究活動－資料報告・研究ノート等－	70
1 西蒲区御井戸B遺跡出土の石製模造品について	70
2 沖ノ羽遺跡から出土した古墳時代後期の「瓶」について	72
3 仲歩切遺跡から出土した骨様物質の組織形態学的分析結果	74
引用・参考文献	78





## II 開発事前審査

### 1 事前審査内容

#### (1) 開発事前審査

**概要** 貴重な国民的財産である遺跡（埋蔵文化財包蔵地）を将来にわたって良好な状態で保存していくためには、開発事業その他に伴う掘削で破壊されないよう、十分な措置を講じなければならない。そのため、「法」第93条及び第94条によって、こうした掘削等については事前の届出・通知が事業者者に義務づけられているところだが、実際の運用としては事業の計画段階から試掘・確認調査の実施や、その結果に伴う事業内容の調整まで長期間を要することが多いため、できる限り事前協議を早くから実施することが肝要である。

新潟県内では、取決めでより公共事業のうち国土交通省直轄道路事業、高速道路事業、新幹線事業については新潟県教育委員会が、その他の公共事業及び民間事業については市町村教育委員会が協議調整を担当する役割分担としている。従って、本市では市内で行われる多数の土木工事などの事業について、公共・民間の別を問わず、全て事前審査を行い、必要なものについて事前協議の対象とすることを原則としている。

実際にはさまざまな形態の事業があるため、具体的な審査等の進め方は以下の通りである。

**公共事業** 国・県機関の実施する土木事業については、年に1度、新潟県教育庁文化行政課が一括して関係機関に照会し、得られたデータを県下の市町村に提供して、審査及び事業者との協議を依頼している。

国・県機関が実施する事業のうち、平成26年度の新潟市関連分は平成25年度の50件とほぼ同数の49件である（表1）。内訳は①すでに取扱い中で方針が決まっているものが8件、②協議不要と判断されたものが34件（河川の工事など）、③協議中で取扱い方針未定のものが2件、④新規事業で今後協議を必要と判断したものが5件であった。その後、③及び④の7件について、関係部署との協議を行い、取扱いを決定している。

市が実施する事業については、年度ごとに市内に一斉照会をかけ、その回答をもとに協議している。規模を問わず、原則すべての市事業を対象とするため、回答件数が千件単位と膨大になり、短期間での審査・協議が困難となっている。今後、事業主体からも自発的に歴史文化課へ協議するよう、折に触れ呼びかけを行っている。

国・県・市事業のいずれも、年1度の照会で把握しているため、年度途中で発生する小規模事業を拾いきれない場合があり、こうした事業をどのようにして事前協議に乗せていくかが今後の課題である。

**民間事業** 民間事業中最多の建築事業については、建築確認申請書を提出する際、本市独自の施策として「建築確認申請事前調査報告書」の添付を義務付けている（担当は建築部建築行政課）。その事前調査項目に「埋蔵文化財の有無」があることから、建築主は全ての案件について歴史文化課窓口へ照会して確認番号を取得するため、その時点で遺跡に該当するかどうか把握できる仕組みとなっている（なお、公共の建築事業についても「計画通知」段階で同様の措置を取っている）。開発行為については、各区の「開発審査協議会設置要領」に規定されている通り、「都市計画法」第32条による事前協議書が各区役所建設課に提出された後、歴史文化課を含む庁内関係各課に意見照会されるため、全ての案件について取扱い方針の審査と協議を行っている。また、本市では多くの土木事業が農地内で行われるため、事前に「農地法」に係る転用申請・届出が提出されることから、市内に6つ（北区・中央・秋葉区・南区・西区・西蒲区）存在する農業委員会事務局に歴史文化課への情報提供を依頼し、全件について審査のうえ、取扱い方針を決定し、必要なものについて事業者と協議を行っている。

このように、民間事業者の行う各種開発等については、許可事務を担当する庁内各課等と緊密に連携し、事前把握を行っている。その他、不動産鑑定評価や土地売買検討時の事前調査に伴う照会も相当数には行っている。しかし、試掘・確認調査結果を踏まえて協議を行うには日数が不足しがちであるため、今後は各事業者が事前照会をより早い段階で自発的に行うよう、各種の機会をとらえて周知するなどの措置が必要である。

また、開発行為事前協議時の事前相談が開始された段階で、各区役所建設課から事業者に対し歴史文化課へも連絡を取るよう指導する対策が取られている。さらに、事前照会にあたっては窓口対応の他FAXを活用するなど、遠隔地の事業者の負担を少なくし、気軽に連絡が取れる工夫もしている。

**平成26年度** 平成26年度の協議実績の概要は以下の通りである。

国・県機関が実施する事業の件数については先に触れ

た通りである。関係では取扱いが必要となったものはなかった。関係では圃場整備及び農道関係事業がほとんどであった。特に、秋葉区の両新地区圃場整備事業が大きな割合を占めている。他には、西園区内で複数の圃場整備事業が採択段階に上がってきており、今後試掘・確認調査が大幅に増加する見込みである。市が実施する事業の審査件数については、平成25年度の691件から434件と前年比の約40%減となっている(表1)。平成26年度に合併建設計画関連事業が終了することによるものであろう。内訳としては、水道関係151件(34.8%)、道路関係114件(26.2%)、下水道関係68件(15.7%)、建設関係40件(9.2%)が主なものである。

民間事業に係る事前審査については表2に示した。平成25年度とほぼ同傾向であるが、案件ごとの重複を除いた実数は7,591件(平成25年度6,686件に比して13.5%増)と大きく増加している。このところの景気回復傾向を反映したものであろうか。内訳は、開発行為が増加(平成25年度の62件から72件)、農地転用は30%の大幅増(同じく511件から668件)、建築確認申請に係る審査件数は微減(同じく4,742件から4,261件)であった。

## (2) 試掘・確認調査

### 概要

事前審査・協議において、遺跡の有無を事前に把握する必要があると判断した箇所には試掘調査、すでに周知遺跡となっているが、その詳細な内容が不明な場合には確認調査を実施している。経費は市の事業「市内遺跡範囲等確認調査事業」として公費から支出し、原則として事業者は一切の負担を要求していない。なお、事業費は国の補助対象(文化庁 補助割合50%)となっている。

試掘調査については、公共事業はもちろん、民間事業の場合もほとんどは事業者の理解と協力を得て実施している。以前は、まれに試掘調査の実施を拒否される場合があったが、近年はほぼ全ての案件で承諾が得られている。試掘調査の意義と効果に対する理解が事業者に浸透してきていると思われる。

平成26年度 表3・4の通り、47件の試掘調査、30件の確認調査の計77件を実施した。平成25年度の件数と比較すると試掘調査が15件の減、確認調査が7件減となっている。確認調査が減少した原因としては、平成25年度から続く建築関係事業の減少が影響していると推測される。地域別では、市街地内の亀田砂丘に多くの遺跡が存在する江南区、同じく新津丘陵や多くの埋没自然堤防が存在し、開発対象となることが多い秋葉区、そして遺跡密度が相対的に高い西園区の調査件数が例年通り多くなる傾向が出ている。

表1 平成26年度公共事業事前審査事業主体別内訳

事業主体	件数	遺跡に該当	試掘調査の協議をしたもの	9割通知
国	12	0	0	0
道	25	10	11	30
市	434	27	59	11
合計	483	37	70	31

表2 平成26年度民間事業事前審査内訳

区名	審査種別				審査・照会 件数	9割 通知
	開発行為	農地転用	建築確認	文書報告		
北区	0	0	378	580	0	944
東区	9	114	696	1,134	0	1,953
中央区	13	47	978	1,717	0	2,755
江南区	8	100	405	654	0	1,167
秋葉区	11	6	414	667	0	1,098
南区	4	82	288	461	0	835
西区	19	307	868	1,495	0	2,539
西園区	2	52	254	487	0	795
合計	72	688	4,261	7,883	0	12,960
重複に該当	2	27	105	126	0	360
試掘調査の協議をしたもの	16	25	8	530	0	581

※建築確認のみの案件(個人住宅等)については周知遺跡の範囲に含まれるものも協議の対象としているため、重複して試掘調査は行っていない。

表3 平成26年度試掘・確認調査、工事立合件数

区名	調査内容	事業者	件数	確認文化財	
				検出件数	割合(%)
北区	試掘調査	公共	5	0	0
		民間	0	0	0
	確認調査	公共	0	0	0
		民間	0	0	0
工事立合	-	2	0	0	
東区	試掘調査	公共	0	4	0
		民間	0	2	0
	確認調査	公共	0	2	0
		民間	2	1	50
工事立合	-	1	0	0	
中央区	試掘調査	公共	4	8	1.25
		民間	4	8	2.50
	確認調査	公共	0	7	0
		民間	1	1	100
工事立合	-	1	0	0	
江南区	試掘調査	公共	1	11	1.100
		民間	10	2	20
	確認調査	公共	1	1	0
		民間	7	8	43
工事立合	-	15	3	20	
秋葉区	試掘調査	公共	1	8	0
		民間	7	1	50
	確認調査	公共	2	11	50
		民間	9	11	67
工事立合	-	20	5	25	
南区	試掘調査	公共	0	4	0
		民間	4	4	0
	確認調査	公共	0	1	0
		民間	1	1	0
工事立合	-	2	0	0	
西区	試掘調査	公共	2	1	50
		民間	1	3	0
	確認調査	公共	1	2	0
		民間	1	2	100
工事立合	-	1	1	100	
西園区	試掘調査	公共	0	4	0
		民間	4	4	50
	確認調査	公共	3	5	67
		民間	2	5	50
工事立合	-	10	4	40	
合計	試掘調査	公共	8	47	3.28
		民間	39	47	8.21
	確認調査	公共	7	30	3.43
		民間	25	51	13.57
工事立合	-	35	128	11.25	

平成26年度経費(単位:千円)

調査等内訳	金額
試掘調査	13,665
確認調査	3,225
管内除雪(工事立合)	1,661





表5 平成26年度工事立会(管内踏査)一覧(調査番号順)

調査番号	遺跡名	所在区	工事原因	調査担当	調査期間	発掘 遺物	出土 遺物
2014106	下郷南遺跡	江湾区	個人住宅	満山よりか	4/8	×	×
2014108	森山遺跡	秋葉区	個人住宅	満山よりか	4/1	×	×
2014115	山ノ家遺跡	江湾区	個人住宅	満山よりか	5/8	×	×
2014116	浦江遺跡	西浜区	水道	飯野野高	5/26-27	×	×
2014117	巻坂跡	西浜区	水道	飯野野高	5/12-13	×	○
2014118	原遺跡	秋葉区	神社	飯野野高	5/13	×	×
2014124	高木川遺跡	秋葉区	放棄	朝明政康	5/23	×	×
2014125	前山遺跡	江湾区	集合住宅	飯野野高	4/22	×	×
2014127	六地山遺跡	西区	放棄	満山よりか	6/16-19	○	○
2014128	沢津遺跡	秋葉区	宅地造成	満山よりか	6/16	×	×
2014129	下郷南遺跡	江湾区	個人住宅	満山よりか	6/9	×	×
2014135	下大川遺跡	北区	水道	飯野野高	6/24	×	×
2014136	前山遺跡	江湾区	アス	飯野野高	6/23	×	×
2014142	結七島遺跡	秋葉区	個人住宅	満山よりか	7/4-18	×	×
2014143	熊倉今道土遺跡	秋葉区	電力	満山よりか	7/4	×	×
2014146	内野遺跡	秋葉区	個人住宅	満山よりか	7/14	×	○
2014148	若原遺跡	北区	個人住宅	満山よりか	7/15	×	×
2014149	沢津遺跡	秋葉区	宅地造成	満山よりか	7/15-10/1	○	○
2014165	庄瀬跡	南区	個人住宅	満山よりか	10/9-10	×	×
2014168	子代北之邊跡	江湾区	道路	満山よりか	9/30	×	×
2014176	龜田四ツ舞野 付付遺跡	江湾区	宅地造成	朝明政康	10/23	×	○
2014177	三王山遺跡	江湾区	個人住宅	朝明政康	10/8	×	×
2014178	砂中切遺跡	西浜区	調整池	満山よりか	1/5-2/20	○	○
2014180	中谷川遺跡	秋葉区	調整池	満山よりか	10/11-12/1	×	○
2014181	内野遺跡	秋葉区	調整池	満山よりか	10/11	×	×
2014182	神ノ沼遺跡	秋葉区	調整池	満山よりか	10/11-12/1	×	×
2014188	熊倉今道土遺跡	秋葉区	道路	満山よりか	11/5-12/10	×	×
2014191	家形遺跡	西浜区	調整池	満山よりか	12/22-2/15	×	○
2014192	西江浦遺跡	秋葉区	調整池	飯野野高	2/3-2/18	×	×
2014193	熊倉今道土遺跡	秋葉区	調整池	満山よりか	12/9	×	×
2014194	熊倉今道土遺跡	秋葉区	調整池	満山よりか	11/17-2/26	×	○
2014204	丸山遺跡	江湾区	宅地造成	飯野野高	2/30	×	×
2014206	下新田遺跡	西浜区	放棄	飯野野高	3/11	×	×
2014207	舟江遺跡	秋葉区	宅地造成	飯野野高 金田拓也	3/16-17	×	×
2014212	中新田入保遺跡	秋葉区	浄水場	飯野野高	3/5	×	×
2014213	丸山遺跡	江湾区	倉庫	満山よりか	12/1	×	○
2014214	金塚山遺跡	江湾区	個人住宅	満山よりか	3/16	×	×
2014217	竹尾遺跡	栗区	集合住宅	満山よりか	3/27	×	×
2014218	下新田遺跡	西浜区	調整池	満山よりか	11/4	×	○
2014219	砂中切遺跡	江湾区	アス	満山よりか	5/26	×	×
2014220	下田東遺跡	西浜区	店舗	満山よりか	10/22	×	×
2014221	荒木遺跡	江湾区	排水路	朝明政康	12/4-1/24	×	×
2014222	長島跡	西浜区	個人住宅	満山よりか	6/3	×	×
2014223	上町遺跡	西浜区	個人住宅	満山よりか	7/22	×	×
2014224	大湖遺跡	江湾区	個人住宅	満山よりか	12/19	×	×
2014225	平遺跡	秋葉区	個人住宅	満山よりか	3/27	×	○
2014227	三王山遺跡	江湾区	個人住宅	満山よりか	11/1	×	×
2014228	下田東遺跡	西浜区	店舗	満山よりか	11/5	×	×
2014229	熊倉今道土遺跡	秋葉区	下水道	満山よりか	10/24-11/18	×	×
2014230	大川谷内遺跡	秋葉区	倉庫	朝明政康	11/1-11/18	×	×
2014234	近藤新田町跡 (水町)跡(青野 172番地地点)	中央区	集合住宅	満山よりか	6/9	×	×

## (3) 工事立会

概要 工事立会は、遺跡の範囲内で行われる各種土木工事等に対し、原則として事前の試掘・確認調査で遺跡の内容を十分把握したうえで、文化庁次長通知(平成10年9月29日付庁保第75号)及び「新潟県基準」(平成11年9月10日付教文第578号)に従って実施している。具体的には、

- ・土木工事等により、明らかに遺跡の一部が破壊されるが、掘削範囲がきわめて狭小(「新潟県基準」によれば原則として掘削幅1m以下)であり、記録保存を目的とした本発掘調査の実施が困難であるもの
  - ・掘削が遺物包含層等に及ばず、保護層も確保できる見込みであるが、施工が設計通りであるか立会によって確認する必要がある場合 などである
- 工事立会にあたっては、「法」第93条の届出・同94条の通知に対する取扱い指示文を返送する際、工事日程が決定次第連絡を求め、事業者の工程に従って本市の埋蔵文化財担当専門職員が現地に行くこととしている。

ただし、直前の連絡だけでは工事日程との調整が難しいため、特に長期間にわたる大規模な工事の場合、事業者と協力を含め、あらかじめ施工者代理人を交えた打合せを綿密に行うようにしている。これにより、工事立会による工程の一部変更など、施工者側の柔軟な対応について理解を得られやすくなった。

工事立会により遺物や遺構が発見された場合は、その場で最大限の記録化を行い、出土遺物や記録類は、試掘・確認調査に準じた取扱いとしている。ただし、対象となる遺跡によっては相当量の遺物・記録類が生じることがある。加えて工事立会件数も年々増加傾向にあるため、資料も増加しているが、その整理体制や方法が確立されていない。貴重な遺跡情報としての立会結果を十分に生かすため、本書を含む「年報」の活用なども含め、大きな課題として今後の検討が必要である。

また、大規模開発や圃場整備などに関わる長期間にわたる工事立会では、限られた人数の職員での対応に困難をきたすことがある。現在は、委託作業員の活用などで維持している状態だが、土壌や遺物を見極めることのできる熟練作業員は十分な人数が確保できないことが多く、早急な解決が必要である。

平成26年度 表5の通り、51件の工事立会を行った。平成25年度の72件から約30%の減少である。秋葉区及び西浜区内での圃場整備関係や、昨年度に引き続き個人住宅関係の案件が多い。

事前審査に係る主要な試掘・確認調査の概要を次節に示した。(廣野耕造)

## 2 平成26年度の事前審査に係る試掘・確認調査の概要

### (1) 原遺跡 第7・8次調査 (2013188・2014111)

所在地 新潟市秋葉区程島字原244番  
調査の原因 神社(両皇大神宮)建替(民間事業)  
調査期間 平成25年11月25・27日(2日間・2013188)、  
平成26年4月21日～25日(5日間・2014111)  
調査面積 23.25㎡(2013188)・67.44㎡(2014111)  
(調査対象面積1736.01㎡)

調査担当 朝岡政康  
処置 工事立会

**調査に至る経緯** 原遺跡北東部に位置する両皇神社社殿の建替えにあたり、遺跡の残存状況把握を目的とした確認調査(第7次・2013188)を行った。その結果、切土が行われる社殿区域に遺物包含層が遺存することが明らかになった。そこで、平成26年度に遺物包含層残存区域での遺構記録及び深層部における遺跡の有無を確認するためのトレンチによる確認調査(第8次・2014111)を実施した。その結果、遺構確認面のⅢ層内に遺物は存在しておらず、工事立会によって対応すべきと判断した。

**位置と環境** 新津丘陵の西北部に位置する(図1・3)。遺跡は北西に向かって張り出す海拔20m台のなだらかな尾根に立地する(図4)。遺跡の南に形成された解析谷を経由する時越えは新津丘陵東麓への往来が最も容易なルートであり、本遺跡に備わる立地的な特性を表わしている。調査地は遺跡の西端付近に位置し、尾根先端部の緩傾斜地にあたる。調査地内の堆積土はⅠ～Ⅳ層に大別できる(図5)。図5に示す等高線は遺構確認面にあたるⅢ層上面地形である。

**検出遺構** 土器埋設土坑2・土坑4・ビット9基を確認した。確認面は土器埋設土坑のSK3・11がⅡ層内、これ以外がⅢ層上面である。このうちⅢ層上面を確認面とするSK9で後期後葉と晩期前葉土器が混在し(図5-7-14)、Ⅱ層内で確認されたSK3で晩期初頭土器が含まれることから(図5-1)、他の遺構についても後期後葉～晩期前葉に属す可能性が高い。2基の埋設土器における口縁部遺存率は、SK3が36%、SK11が57%である。

**出土遺物** すべてが縄文時代に属す。表面採集資料を合わせた遺物量は、コンテナケースで土器類6箱・石器類1箱・搬入罐1箱である。

土器類は口縁部遺存資料で72個体、底面遺存資料で50個体を数える。他に焼成粘土塊が7点ある。これらは中期前葉・中期中葉・後期前葉・後期中葉・後期後葉・晩期前葉・晩期中葉に大別でき、主要資料を図5～7に示



図1 調査位置図 (1/10,000)

す。18・19・23・25・36・43は表面採集品である。各資料の番号末尾に胎土区分を示した。Ⅰ類は磨耗粒子を含むグループで、石英・長石・岩石からなるⅠA類と岩石に限定されるⅠB類に細分する。Ⅱ類は磨耗粒子が欠落するグループで、雲母を含むⅡA類と石英・長石・岩石からなるⅡB類に細分する。算用数字は破砕状態にある石英・長石の含有量で、多量に含むものを1、概して少ないものを2とする。末尾に示すドットはガラス質粒子(黒曜石類似粒子を含む)を含有する資料で、多量に含むものを黒で表わす。

16～27は中期前葉から後期中葉土器。本次調査では客体的な存在にとどまる。16～18は竹管工具によって平行沈線を描く中期前葉土器。17は交互突刺と隆帯、18は隆帯を複合する。19は隆帯・沈線によって口縁部文様を描く中期中葉土器である。20・21は後期前葉前半の三十桶場式土器。差形土器の体部土器の細片で、20は刺突文、21は結節を伴う無節縄文を施す。22は後期前葉後半の南三十桶場式土器。いずれも深鉢で、22は緑帯文をもつ口縁部、26は刺突と列点を施す体部上部の資料である。27は横位平行沈線に区切文を加えた後期中葉の深鉢土器。内面全体に被熱したアスファルトが付着する(写真)。

SK11出土の7～11と遺構外出土の28～42は、後期後葉の有文土器。後述の晩期初頭土器とともに本次調査の主体をなす資料である。10・28～31は波状口縁深鉢。口縁区画を行う10・29・30欠落する28・31に分かれ、28には頂部が窪んだ貼瘤を付す。7・8・33は平口縁深鉢で、33には双頭をなした小突起を配す。7は口縁に縄文を施したのち、横位および斜行格子目沈線を加える。深鉢の体部には入組文などの磨消縄文や沈線文(39)を施す。34は鍵状をなした入組文の上位に十字沈線を加えた貼瘤を付す。40～42は注口土器の体部資料。40・41は磨消縄文、42は縦位凹線を加えた貼瘤と微隆起線をもつ。本時期土器群の胎土は分散傾向にある。

SK 3出土の1、SK 9出土の12~14、遺構外資料の図6-43~58・59~64は晩期前葉の有文土器である。1・12・43~48は深鉢。いずれも山形突起をもち、三叉文と磨消縄文を施す。このうち47は、外面の突起付近に被熱したアスファルトが付着する(写真)。49~51は鉢もしくは浅鉢。49・50は口縁部の区画内に三叉文、体部資料の48は入組文を施す。52~54・56は壺の体部破片で、三叉文・入組文や列点文をもつ。13・60~62は注口土器。下半部にあたる無文の5・59もこの段階に属する可能性が高い。60は口縁部から体部上半の資料で、破損面に注口部の痕跡が残る。13・60の体部には三叉文が描かれる。61・62は注口部で、前者の基部に三叉文を配す。63・64は香形土器の下部資料。体部下端に文様帯をもち、前者は三叉文、後者は半歯状文を施す。本時期の資料は前半の大洞B式段階と後半の同B式段階に二分できるが、後者の確実な資料は64に限定され、大半が晩期初頭に位置づけられる。本段階の有文土器の胎土も多様である。

65・66は晩期中葉の有文土器。磨消縄文によって雲形文を描く浅鉢または鉢。形が浅い扁平な施文に特徴があり、大洞C2式段階に位置づけられる。

3・6(副絵写真掲載)、67~75・77・78は、縄文以外の文様を欠く深鉢。非結束羽状縄文(67)・結節付斜行縄文(68・69)・斜行縄文(3・6・70~75)・網目状燃余文(77)・燃余文(78)の5種に大別できる。75と壺形土器76で使用される縄は、「直前段反燃」原体による。本グループの胎土はIA類に集中する傾向があり、ガラス質粒子の含有率が高い点も特徴である。体部破片の4と79では、内面に被熱したアスファルトが付着する(写真)。80~86は底部資料。底面形態は平底(6・15・80~82)と揚底(83~86)に大別でき、後者の割合が40%ほどに達する。前者の底面には、15個体で網代圧痕(15・81・82)、1個体で笹の葉圧痕(80)がみられる。

石器類は数量的に少なく、石礫未成品1点・磨石3点・石皿・砥石1点・磨耗礫3点・微細剥離片をもつ剥

片2点・剥片6点・石核1点の出土にとどまる。89はSK 8、これ以外は遺構外から出土した。89は珪質頁岩を使用する平基無蓋石礫の未成品。長さ21cm・幅1.4cm・重さ1.4gたらずの小形品である。87は玉髄、88は流紋岩、90は黒曜石製の剥片。87・88の矢印範囲に微細剥離を認める。90は山形景月山産黒曜石とみられる。91は花崗岩、92は安山岩を石材とする磨石で、ともに被熱する。網点は前者が磨耗面、後者が黒化範囲を表す。93は砂岩を石材とする石皿・砥石で、被熱によって赤化する。磨耗によって片面が窪み、裏面を中心に線条痕が残る。以上のほかに搬入礫が28点(2.224g)出土した。

まとめ 原遺跡は新潟市内の中で最も早く報告された遺跡であり(大塚1896)、長年に渡る踏査を通じ、縄文時代中期前葉から後期前葉までの間を中心とした新津丘陵最大規模の集落跡として知られていた(川上1989a)。さらに近年では、「耳形土製品」の数少ない出土地としても注目されている[石原・木村1996]。こうしたなかで行われた今回の調査では、本遺跡のあり方を考える上で重要な以下のような知見が得られた。

第一点は遺跡の形成過程についてである。遺物の主体を占める後期後葉~晩期初頭土器群は、新津丘陵で従来皆無に等しかった資料にあたり、この時期の遺跡空白域を埋める有益な情報をもたらした。少量ながら出土した晩期中葉土器は、現時点において本遺跡の下限資料となる。図3のように新津丘陵北部には本遺跡を含め5か所の晩期遺跡が分布するが、南西約5kmに位置する大沢谷内遺跡の成立時期と本遺跡の下限が並行関係にあることが明らかになった点は重要である。第二点はアスファルト付着土器の出土である。確認された4点は後期中葉から晩期前葉に属する資料である。いずれも加熱された状態にあり、本遺跡内でアスファルトの加工が行われたことを物語る。大沢谷内遺跡では成立段階にあたる晩期中葉地区からアスファルトが付着した土器や石器と共にアスファルト塊が多数出土し、流通起点となった原産地遺跡として注目されている。本遺跡のアスファルト付着土器はこれに先行する時期の資料であり、大沢谷内遺跡の成立にあたり本遺跡居住集団がこれに深く関与した可能性を示唆する。第三点は後期後葉~晩期前葉のいわゆる粗製土器において磨耗石英の含有を指標とするIA類やガラス質粒子を含む資料が卓越する現象である。こうした含有物の内容は、本遺跡の南に流れる東島川の沢砂組成に類似することから、本遺跡で製作された土器を特徴づける混和材とみなされる。今後は大沢谷内遺跡晩期中葉地区から出土した土器との比較を通じ、両遺跡の関連性を具体的に検討していく必要がある。(前山精明)

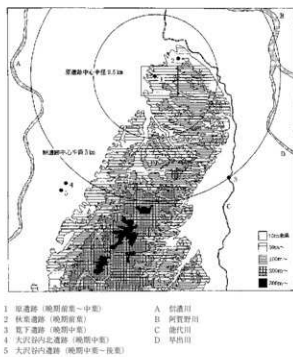


アスファルト付着土器





図2 トレンチ位置図 (1/800)



- |                     |        |
|---------------------|--------|
| 1 原遺跡 (晩期前期-中期)     | A 稲遺跡  |
| 2 林東遺跡 (晩期前期)       | B 阿賀野川 |
| 3 葛下遺跡 (晩期中期)       | C 徳代川  |
| 4 大沢谷内北遺跡 (晩期中期)    | D 早田川  |
| 5 大沢谷内南遺跡 (晩期中期-後葉) |        |

図3 新津丘陵北部周辺の縄文時代晩期遺跡 (1/150,000)

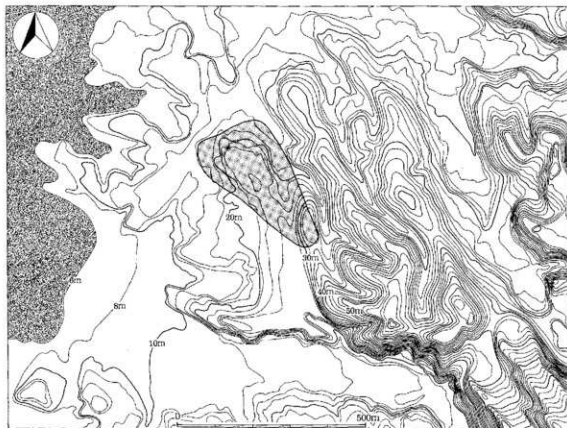


図4 原遺跡の範囲と周辺の地形 (ドットは調査地点、1/10,000)



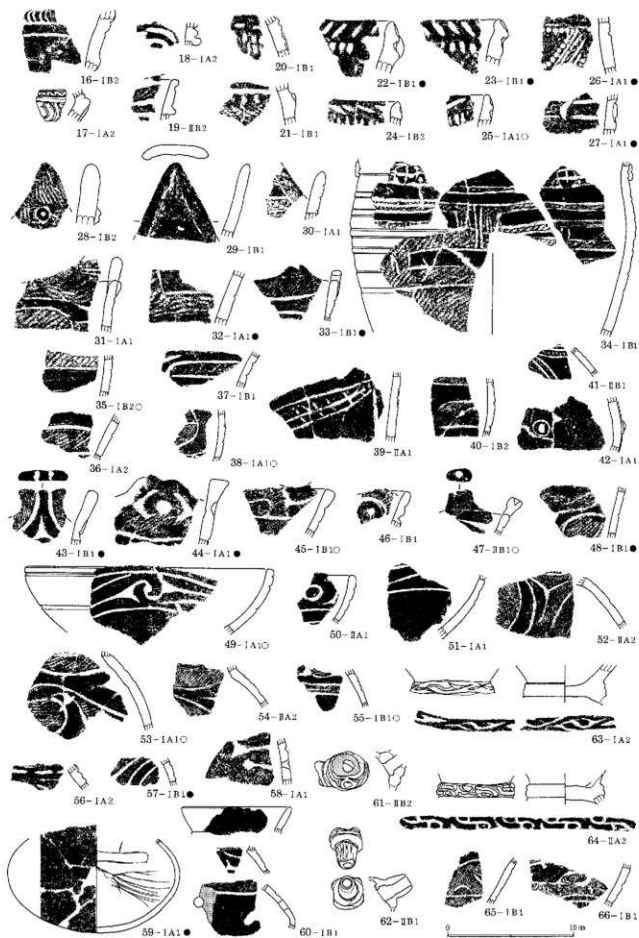


図6 遺物実測図 (1/3)

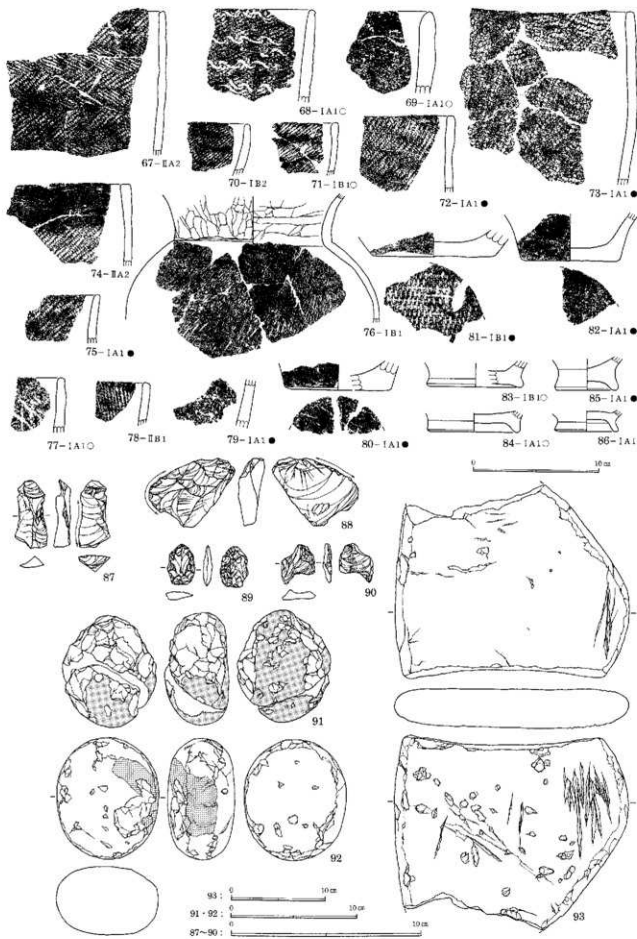


図7 遺物実測図 (1/2・1/3・1/4)

(2) 沢海遺跡 第1・2次調査(2013190・2014112)及び工事立会(2014149)

所在地 新潟市秋葉区中村字沢海387番外

調査の原因 宅地造成(民間事業)

調査期間 平成25年6月13・14日(2日間・2013190)、平成26年4月15～17日(3日間・2014112)

調査面積 30㎡(調査対象面積約4,614.40㎡・2013190)、27㎡(調査対象面積約1,500㎡・2014112)

調査担当 諫山えりか

発 掘 工事立会(2014149)

**調査に至る経緯** 事業者から宅地造成に伴う照会を受けた。当該地は周知の遺跡範囲ではないが、周囲に縄文時代の山崎遺跡や原遺跡が所在していることから、遺跡が存在する可能性があった。そこで、埋蔵文化財の有無を確認するため、着手報告を提出し(平成25年6月10日付新歴B第34号の2)、試掘調査(第1次・2013190)を実施した。遺物包含層及び遺構は確認されなかったが、包含層の再堆積土より縄文土器と磨製石斧が出土した。

第1次調査では建物があったためトレンチを設定できなかった範囲について、遺物包含層の有無を確認するための追加調査が必要と判断し、着手報告を提出し(平成26年4月15日付新歴F第29号の4)、試掘調査(第2次・2014112)を実施した。

その後、工事立会(2014149)を実施しており、ここでは、工事立会の成果も合わせて記載する。

**位置と環境** 新津丘陵の北端裾部に位置する。現地標高は5.58m～12.2mで東側の新津丘陵に向かって高くなっている。現況は削平や盛土によって階段状に整地された宅地である。

**概要と層序** 1.5×2.0mのトレンチを第1次調査では10か所(1～10T)、第2次調査では9か所(11～19T)設定した(図2)。基本層序(図3)はI層:盛土、II層:再堆積層、III層:暗褐色粘土、IV層:暗褐色～褐色土、V層:黄褐色土、VI層:灰色粘土、VII層:青灰色粘土である。III層が遺物包含層であり、現地表から1.22m下である。V層が遺構確認面となる。遺物包含層は整地による掘削などにより第2次調査1T以外では残存せず、部分的に再堆積層として確認できる。再堆積層には近世以降の陶磁器と縄文土器が混在する。

**検出遺構** 第1次調査では遺構は検出されなかった。第2次調査では6Tでピットを1基検出した。工事立会では第2次調査1T周辺でピットを7基検出した。

**出土遺物** 第1次調査は縄文土器1点、磨製石斧1点、近世以降陶磁器21点が出土した。第2次調査は縄文土器19点、剥片1点、近世以降陶磁器15点、時代不明土器1



図1 調査位置図(1/10,000)



第2次調査11T東壁土層断面(西から)



工事立会11T周辺遺構出土状況(南から)

点が出土した。工事立会は縄文土器5点、剥片5点、礫1点、須恵器1点、近世以降陶磁器4点が出土した。他にアスファルトイトが5点出土している。うち9点を図化した(図4)。1は砂岩製磨製石斧、2・3は縄文晩期の深鉢、4・6は18世紀後半の肥前磁器碗、5は須恵器大甕、7は鉄石英(黄玉)・8は頁岩・9は屋ヶ塔産黒曜石の剥片である。縄文土器の胎土には角閃石が多く混入し、隣接する原遺跡の縄文土器の胎土に類似する。

まとめ 第2次調査の結果、1Tで遺物包含層及び遺構が確認されたことから新遺跡であると判断し、「沢海遺跡」として周知化した。取扱いは、遺跡の遺存状況が希薄なため工事立会(2014149)とし、その後の工事は慎重工事とした。(相澤裕子)

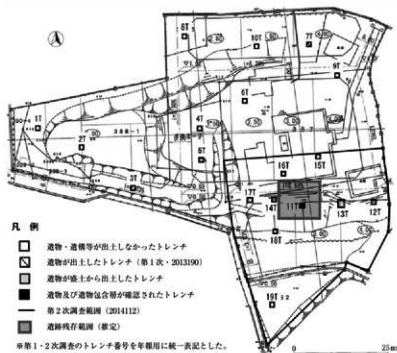


図2 トレンチ位置図 (1/1,000)

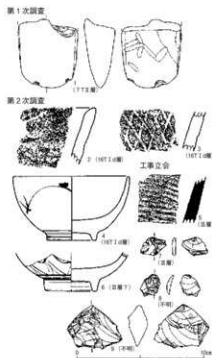


図4 遺物実測図 (1/3)

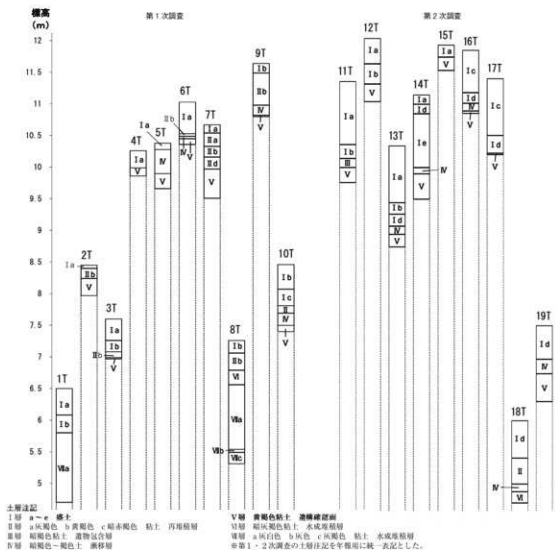


図3 土層柱状図 (1/60)

### (3) 中新田久保遺跡 第3・4次調査 (2014113・2014226)

所在地 新潟市秋葉区満願寺字久保410番1 外

調査の原因 天日乾燥施設建設（公共事業）

調査期間 平成26年5月8・9・12～14日・

8月18日（6日間・2014113）、

平成27年2月3日（1日間・2014226）

調査面積 240.0㎡（1～31T・2014113）、

12.0㎡（32～35T・2014226）、

（調査対象面積19,500㎡）

調査担当 諫山えりか（2014113）、

遠藤恭雄（2014226）

処置 工事立会

調査に至る経緯 遺跡は、平成8年の県営満日地区圃場整備に先立つ分布調査で発見された。平成25年度に新潟市水道局より満願寺浄水場天日乾燥施設（以下施設）建設計画が知らされ、平成26年5月8日付新歴F第54号で報告して、確認調査（第3次・2014113）を実施した（1～31T）。その後、施設計画決定を受けて、追加確認調査（第4次・2014226）を実施した（32～35T）。

位置と環境 阿賀野川左岸の自然堤防上に立地する。現況は水田で、標高は5.9～6.1mである。遺跡北西側には内野遺跡・沖ノ羽遺跡など古代から中世の遺跡が多数存在する。

概要と層序 トレンチを合計35か所設定した（図2）。

基本層序は（図3）、I a・b層：水田耕作土、II層：水田床土、III a・b層：黒褐色シルト質粘土、IV a～g層：暗灰褐色～灰白色シルト質粘土、V a・b層：灰色～青灰色シルト質粘土である。III層が遺物包含層であり、IV b層上面が主な遺構確認面である。

検出遺構 地表面から約0.3mの深さで溝1条（14T）、性格不明遺構4基（12・19・30T）が検出された。

出土遺物 出土遺物の総量は、コンテナケースに2箱である。14・19TのIII b層を中心に平安時代の土師器・須恵器が134点出土した。内訳は土師器130点、黒色土器1点、須恵器3点で、このうち8点を図化した（図4）。土師器煮炊具（2・4・8）の口縁部形状から概ね9世紀代に収まると考えられる。このほか、20・21TのI・II層では近世陶磁器も混じる。

まとめ 調査対象範囲中央から南寄りの12・14～19・30Tで平安時代と推定される遺構・遺物が確認された。取扱いについては、遺構・遺物の確認された範囲が今回の施設建設計画に含まれず、遺跡への影響が軽微であることから工事立会とした。今後施設の拡張が行われる際には、本発掘調査が必要である。（遠藤恭雄）



図1 調査位置図（1/10,000）

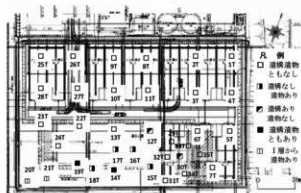
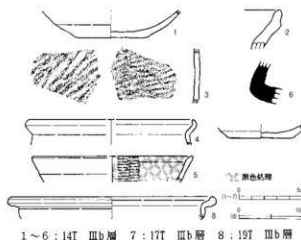


図2 トレンチ位置図（1/3,000）



図3 土層柱状図（1/40）



1～6：14T III b層 7：17T III b層 8：19T III b層

図4 遺物実測図（1/3・1/6）

#### (4) 内畑遺跡 第1次調査 (2014119)

所在地 新潟市秋葉区結字内畑184番4 外  
 調査の原因 宅地造成 (民間事業)  
 調査期間 平成26年5月15・16日、7月8・11日  
 (4日間)  
 調査面積 82.7㎡ (調査対象面積3843.29㎡)  
 調査担当 朝岡政康  
 処置 慎重工事

調査に至る経緯 宅地造成に伴い、埋蔵文化財の有無を確認するため、平成26年5月14日付で着手報告を提出し、試掘調査(第1次・2014119)を実施した。5月15・16日に行った試掘調査の結果、新たな遺跡の存在が明らかとなった。これを受けて7月8・11日に追加調査を実施し、遺跡の範囲を確定した。その後、平成27年2月17日付で「法」第93条の届出が提出された。

位置と環境 内畑遺跡は能代川左岸の自然堤防上に立地する。現地標高は4.7m前後で、現在は畑地となっている。約100m西には古墳時代と古代の集落跡である結七島遺跡が位置している。

概要と層序 13か所のトレンチを設定した(図2)。基本層序はI層:畑耕作土、II層:ぶい黄褐色シルト、III層:灰黄褐色シルト、IV層:ぶい黄褐色シルト、V層:灰黄褐色シルト、VI層:灰黄褐色シルト、VII層:褐灰色シルト、VIII層:黒色粘土、IX層:黄灰色粘土、X層:青灰色粘土、XI層:暗褐色粘土(ガツゴ層)である。柱状図は遺物が出土したトレンチ周辺を抜粋して、図3に示した。6TのVIII層で遺物が出土した他、9TではVII層を部分した最下層であるVIIc層で遺物が出土している。いずれも現地表面から1.8~1.9m下で確認された。

検出遺構 遺構は検出されなかった。

出土遺物 6Tで須恵器1点、9Tで土師器31点が出土し、うち4点図化した(図4)。1~3は土師器の差である。土師器は調査

当初、古墳時代としたが、3の形態をみると7・8世紀代の土器と推定される。土師器はすべて9Tの同一層から出土していることから、1・2や他の土師器も3と同時期である可能性を持つ。4は須恵器無台杯で、体部は丸みを持って立ち上がる。新津丘陵産で、時

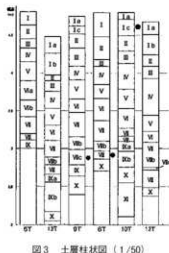


図3 土層柱状図 (1/50)



図1 調査位置図 (1/10,000)

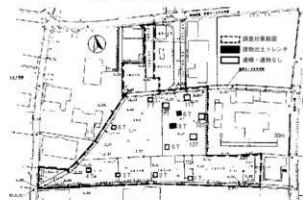


図2 トレンチ位置図 (1/2,000)

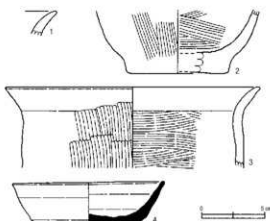


図4 遺物実測図 (1/3)

期は8世紀後半から9世紀前半と推定される。

まとめ 調査結果を受け、「内畑遺跡」として新たに周知化された。本遺跡では遺物の出土範囲が狭小で生活痕跡も希薄であった。これは、「水田の大畦畔上に遺物が集中し、この範囲外では出土数が極端に減少する」という西部遺跡(土本ほか2008)の様相と類似するため、内畑遺跡は水田域中の遺物集中地点にあつた可能性があるという所見がなされている。取扱いには遺跡への影響が少なくなるよう設計変更されたため、慎重工事とした。(澤野慶子)



### (5) 六地山遺跡 第11次調査 (2014122) 及び工事立会 (2014127)

所在地 新潟市西区曾和字沢田381番1 外  
調査の原因 農業用倉庫建設 (民間事業)  
調査期間 平成26年5月21日 (1日間)  
調査面積 19.5㎡ (対象面積696.26㎡)  
調査担当 諫山えりか  
処置 工事立会 (2014127)

**調査に至る経緯** 周知の遺跡範囲内で農業用倉庫建設 (建築面積243㎡) と敷地境界のプロック土留め新設計画の届出が出された (平成26年5月16日付)。これを受けて、取扱いを判断するために確認調査 (第11次・2014122) を実施した (新歴B第35号の3)。調査の結果、遺跡は良好な状態で遺存していないと判断されたため、工事立会の指示を行い、6月16~20日 (5日間) に工事立会を実施した (2014127)。ここでは、確認調査及び工事立会の成果を記載する。

**位置と環境** 遺跡は低湿地に囲まれた残丘状の砂丘列 (新砂丘II-a) に立地し、南西から北東方向に長さ約950mに分布する。遺跡が立地する砂丘列は、北東側で標高が高く幅も160m程と広いが、南に行くにつれて低く幅も10m程と狭くなる。昭和31 (1956) 年に中村孝三郎氏等によって発掘調査が行われて [寺村1960] からこれまで10回以上の確認調査が行われている。なお、砂丘列は削平等により旧地形を保っていないが、周辺の水田下からは埋没した砂丘列と弥生時代後期の遺物包含層が良好な状態で遺存していることが判明している (1982102・2007123) [甘粕ほか1986, 新潟市史編さん原始古代中世部会1994]。今回の開発予定地は遺跡の北東端付近の砂丘上にあり、1956年の発掘調査地点の南側に隣接する場所と推測される。現在の標高は約2.8mである。

**第11次調査の概要** 5か所のトレンチを設定した。基本層序は以下のとおりである。I層: 砂石等の盛土、II層: 黒褐色砂層 (遺物包含層)、III層: 褐色泥じり黄褐色砂層 (漸移層)、IV a層: 暗黄褐色砂層 (砂丘基盤層)、IV b層: 暗黄褐色砂層 (砂丘基盤層)。

砂丘上の遺跡のために全体に攪乱が著しく、遺構は検出されなかった。遺物もII層の遺物包含層から出土したのは4 Tのみで、1 T・3 Tは盛土出土である (1~5)。

**工事立会の概要** 倉庫の布基礎を掘削する際に工事立会を行い、北側部分で遺物包含層や遺構が検出された。検出された土坑・溝・性格不明遺構8基の調査を行い、図面や写真等の最低限の記録を取った。なお、遺構出土遺物は小破片が多く所属時期を特定するに至っていない。

**出土遺物** 確認調査・工事立会で出土した遺物は表1



図1 調査位置図 (1/10,000)

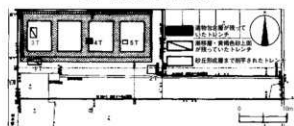


図2 第11次調査トレンチ位置図 (1/800)

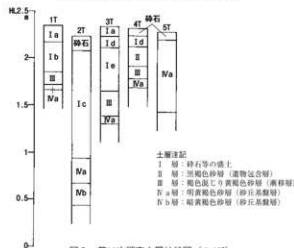


図3 第11次調査土層柱状図 (1/40)

のとおりである。弥生土器 (1~7・9~12)、古墳時代前期の土師器 (13)、須恵器 (15~19)、珠洲焼 (20) 等がある。表では小破片で弥生土器か土師器か判断できないものは弥生土器に含めた。弥生土器は後期の天王山式系が主体でR.L.縄文が目立つ。9は2本描きでⅢ文様帯上半に鋸歯文を入れるもの。8は厚手の口縁部破片で古墳時代後期から古代の鉢か甕。須恵器には無台杯 (15・16)・横瓶 (17・19)・甕 (18) がある。21は安山岩製の磨製石斧で、縄文時代の可能性がある。

**まとめ** 包含層とされたII層からは弥生時代から古代の遺物が出土した。1982年の確認調査でも弥生土器と須恵器が混在し、弥生土器のみが出土するのはII b層以下だったので、同様な調査所見と言えよう。(渡邊明和)

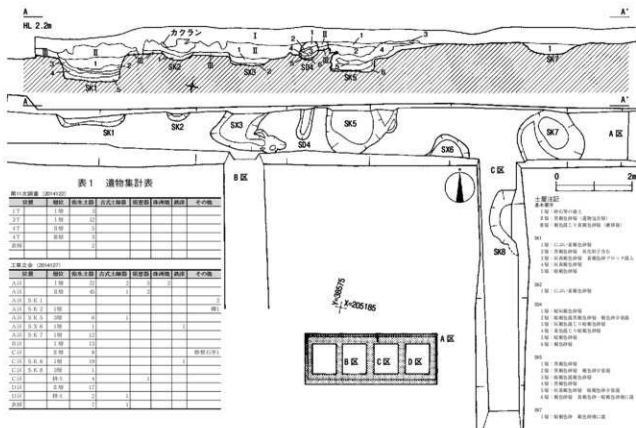
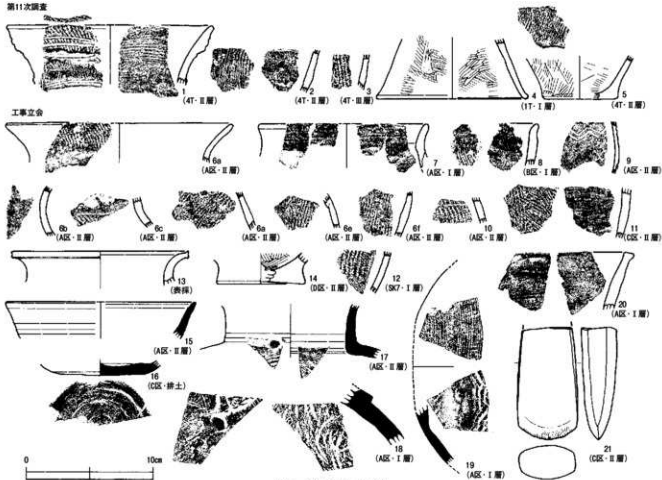


図4 工事立会範囲図(1/800)及び遺構平面図・断面図(1/100)

遺11次調査





六地山遺跡と周辺の遺跡 (1948年米軍撮影 空中写真)



第11次調査 4 T北壁土層断面 (南から)



工事立会全景 (東から)



工事立会 A 区遺構検出状況 (南東から)



工事立会 A 区遺構完掘状況 (西から)

## (6) 下田東遺跡 第1・2次調査(2014140-2014150)

所在地 新潟市西蒲区竹野町字下田2456番1

調査の原因 店舗建設(民間事業)

調査期間 平成26年7月7日(1日回・2014140)、  
平成26年7月17・18・22日

(3日回・2014150)

調査面積 27㎡(2014140)・22.5㎡(2014150)、  
(工事対象面積1948.48㎡)調査担当 諫山えりか  
免 置 工事立会

**調査に至る経緯** 遺跡の存否確認を目的とした試掘調査(第1次・2014140)にあたり、鉄鍬が単独で出土した。これに続く確認調査(第2次・2014150)は、第1次調査時の掘削深度が不足した恐れがあるため、簡易欠板を打設して実施したものである。

**位置と環境** 角田山の東麓に形成された低丘陵の裾から150mほど平野寄りの旧水田区域に位置する。調査地の地形は南東に向かって緩やかに傾斜し、旧田面から1mまでのI層～IV層で粘土層、1mから2.5mまでのV～VII層で河川氾濫層、それ以下のVIII～XII層で未分解有機物を含む沼地堆積層を確認した。

**出土遺物** II層から土師器1点、V層から鉄鍬1点、Xc層から縄文土器片3個体分と石核・剥片1点ずつが出土した。1は内・外面に右回転のロクウ成形痕と糸切痕をもつ土師器無台輪。底径5cmを測り、9世紀後半に



図1 調査位置図(1/10,000)

位置づけられる。2の鉄鍬は先端部を欠損するが、推定長7.5cmの「正三角形錘状式有蓋鍬」である。所属時期は明確でない。4は端部が平坦な縄文土器で、植物繊維を微量に含む。LR・RL原体による非結束羽状縄文を施し、前期前半に位置づけられる。3は流紋岩製の石核。網維面の打点付近にポジ(●)とネガ(○)の別を示した。

**まとめ** 角田山麓では、丘陵裾部に立地する遺跡の多くが隣接する沖積面下で遺物包含層を形成する。調査地の北西側は削平によって平坦地化しているが、居住空間として機能した微高地が付近に存在した可能性が高い。

取扱いは調査地付近には安定的な遺物包含層の存在が予想されたが、保護層が確保されることから工事立会で対応することとなった。(前山精明)

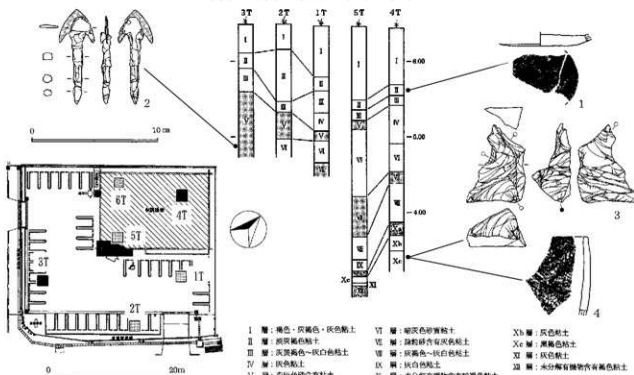


図2 トレンチ位置図(1/60)及び土層柱状図(1/50)、遺物実測図(1/3)

## (7) 舟戸遺跡 第23次調査 (2014152)

所在地 新潟市秋葉区西島字桜大門28番6・13  
 調査の原因 個人住宅建設(民間事業)  
 調査期間 平成26年8月22日(1日間)  
 調査面積 8.32㎡(調査対象面積299.65㎡)  
 調査担当 諏山えりか  
 処置 慎重工事

**調査に至る経緯** 舟戸遺跡は昭和20年代後半の耕地整理によって発見された遺跡である。平成5年に本発掘調査が行われて以後(第2次・1993004〔川上1995〕、20回以上の確認調査が行われている。

個人住宅建設に伴い、「法」第93条の届出が提出された(平成26年8月18日付)。取扱いを決めるため、着手報告を提出し(平成26年8月22日付新歴B第94号の3)、確認調査(第23次・2014152)を実施した。

**位置と環境** 舟戸遺跡は新津丘陵北西側の裾部から広がる沖積地にあり、金津川の扇状地から自然堤防上の微高地に立地する。調査地は舟戸遺跡の範囲内でも北東部に位置し(図1)、現地標高は6.8m程度である。現況は住宅地となっている。

これまでの調査で、第2次調査では古墳時代中期を中心とした集落跡が確認されているほか、弥生・古代・中世の遺物が確認されている(川上前掲、相田2015)。

古墳時代には周辺に塩辛遺跡や高矢C遺跡などが所在しており、近隣に位置する古津八幡山古墳と係わる広大な集落域として注目されている。

**概要と層序** 3.2×2.6mのトレンチを1か所設定した。

基本層序は、I a・b層：盛土、II層：灰白色に暗灰色泥じり粘土、III a・b・c層：シルト質粘土、IV層：暗灰褐色粗砂混粘土(φ0.5～1cmの炭少量混じる)、V層：灰色粘土である(図2)。

IV層が遺物包含層であり、層上面は現地表面から1.85m下より確認されている。

**検出遺構** 遺構は検出されなかった。

**出土遺物** IV層より遺物62点(破片数)が出土した。内訳は土師器50点、須恵器8点、不明土製品3点、軽石1点である(表1)。このうち7点を図化した(図3・表2)。

1は土師器小甕の口縁部から体部上半の破片資料である。口縁部が外反する。外面体部に縦位のハケメ調整が、内面頸部に横位のハケメ調整が施される。口縁部はナデ調整が施されている。2は土師器小甕の頸部から体部上半の破片資料である。外面体部に縦位のハケメ調整が施され、頸部及び内面にナデ調整が施されている。3は土師器長甕の口縁部から体部上半の破片資料である。



図1 調査位置図(1/10,000)



調査地近景(西から)



東壁土層断面(北西から)

外面体部に縦位のハケメ調整が施され、口縁部及び内面にナデ調整が施されている。1～3は全て胎土には比較的粒径の大きな(φ1mm前後)石英や長石、角閃石等が含まれている。

4は須恵器無台杯の口縁部から体部の破片資料である。胎土には微細石英粒が含まれる。5は須恵器無台杯の体部下半から底部の破片資料である。胎土には微細石

英粒が含まれている。内外面に灰白色を呈し、焼成が甘い。新津丘陵窯跡群産である。6は須臾器壺の体部上半の破片資料である。外面体部に平行タタキが、内面体部に同心円当て具痕が確認できる。また、外面体部上半には自然軸がかかっている。胎土には微細な石英や長石、角閃石が含まれる。7は須臾器壺の体部の破片資料である。外面調整に平行タタキが、内面体部に同心円当て具痕が確認できる。胎土には微細な石英や長石、角閃石が含まれており、6と類似している。

1～7の全ての時期は、春日IV期前後(春日1999)の8～9世紀の可能性が高い。

まとめ 遺物包含層より古代の土師器・須臾器が確認された。これまでの調査によって、弥生時代から古墳時代・古代・中世と各時代の遺物や遺構が確認されている。さらに、平成27年度に行われた本発掘調査では、新たに縄文土器が出土した。そのため、舟戸遺跡では縄文時代から中世さらにそれ以降も、連続と継続していないとしても断続的に、人々が生活しない活動していることがこれまでの発掘調査成果の蓄積によって判明してきた。また、これまでの調査では主に舟戸遺跡の南側で遺

物や遺構が確認されていたのに対して、今回の第23次調査は舟戸遺跡の北側に位置しており、舟戸遺跡の北側では古代に人々が活動していたことが新たに分かった。

取扱いについては、基礎工事の掘削が遺物包含層に及ばないため、慎重工事とした。(金田拓也)

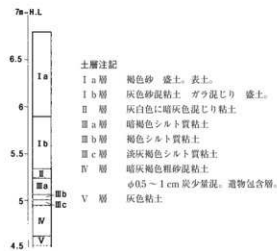


図2 土層柱状図 (1/40)

表1 遺物集計表

トレンチ名	層位	検出(検出数, 総検出量(g))		
		土師器	須臾器	雑物
11	IV層	50 / 360.5	8 / 1264.0	8 / 1130.0
				1 / 390.5

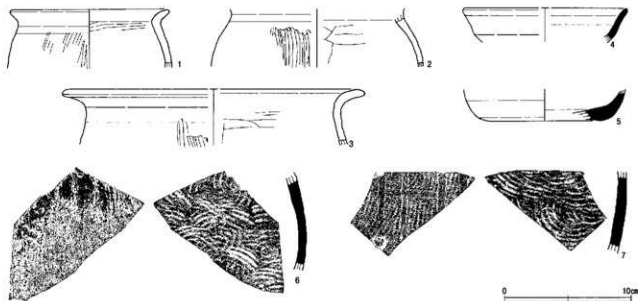


図3 遺物実測図 (1/3)

表2 遺物観察表

検出No.	層位	種類	器種	寸法		色澤		胎土	焼成	調整		遺石率	備考
				口径	口径	器高	外側			内側	外側		
1	IV層	土師器	小壺	122	-	-	灰黄色 (10YR6/3)	灰赤黄 (10YR7/3)	焼成	口:ナデ 底:ハナメ	口:ナデ 底:ハナメ	7/36	-
2	V層	土師器	小壺	-	-	-	灰赤黄 (2.5YR7/4)	灰赤黄 (2.5YR7/4)	焼成	口:ナデ 底:ハナメ	ナデ	3/36	-
3	IV層	土師器	壺	230	-	-	灰赤黄 (2.5YR7/4)	灰赤黄 (10YR7/2)	焼成	口:ナデ 底:ハナメ	ナデ	3/36	-
4	IV層	須臾器	壺	130	-	-	灰赤黄 (2.5YR7/4)	灰赤黄 (10YR7/2)	焼成	口:ナデ 底:ハナメ	口:ナデ 底:ハナメ	2/36	-
5	IV層	須臾器	瓶	90	-	-	灰白 (2.5YR7/4)	灰白 (2.5YR7/4)	焼成	口:ナデ 底:ハナメ	口:ナデ 底:ハナメ	4/36	新津丘陵窯跡群産。
6	IV層	須臾器	壺	-	-	-	灰白 (N7)	灰 (N8)	焼成	平行タタキ	同心円当て具	-	自然軸付。
7	V層	須臾器	壺	-	-	-	灰 (5Y6/1)	灰 (5Y6/1)	焼成	平行タタキ	同心円当て具	-	自然軸付。

**(8) 高矢C遺跡 第8次調査 (2014155)**

所在地 新潟市秋葉区古津字本村239番1外  
 調査の原因 宅地造成(民間事業)  
 調査期間 平成26年8月26・27日(2日間)  
 調査面積 48㎡(調査対象面積1,925.86㎡)  
 調査担当 朝岡政康  
 処置 開発中止

**調査に至る経緯** 調査対象地では宅地造成が計画され、平成26年8月18日に土地所有者より事前調査の依頼が歴史文化課に提出された。それを受けて、平成26年8月22日付新歴B第95号の2で着手報告を行い、確認調査に着手した(第8次・2014155)。

**位置と環境** 高矢C遺跡は国史跡古津八幡山遺跡の北北西に続く新津丘陵緑縁部の台地上に立地し、東西380m、南北200mの範囲に広がっている。調査地点の標高は7.7m程で、現況は南東から北西に向かってわずかに低くなっている。

新潟市史によれば、本遺跡は昭和43(1968)年に水道工事中に古墳時代の小形丸底甕が出土したことにより、「古津諏訪神社前遺跡」として周知化された(川上1989a)。その後、昭和61(1986)年に高矢C遺跡として名称変更を行い現在に至っている。この他に本遺跡では、これまでの確認調査や工事立会では古墳時代の遺物は検出されていないようだが、古墳時代の遺跡とすれば、古津八幡山古墳との関連から注目される遺跡である。

本遺跡のある台地上から周辺の扇状地や沖積地にかけては、1km四方程の範囲に塩辛遺跡・舟戸遺跡・森田遺跡・山脇遺跡など弥生時代中期後半～古墳時代、古代・中世の遺跡が広範囲に分布している。現在は、立地等によって個別の遺跡として周知化されているが、本来は一体の遺跡として土地利用形態を考察する必要がある。

**概要と層序** 現況は宅地であり、住居や蔵・ガレージなどがあるために、調査可能な場所を選定して5か所のトレンチを設定した。基本層序は以下のとおりである。

I a層：盛土、I b層：黒色土層(表土)、I c層：黒褐色シルト層、II層：オリーブ黒色土層(遺物包含層)、III層：明黄褐色シルト層(遺物確認面)、IV a層：黄褐色砂層、IV b層：灰黄褐色砂層、V層：砂利層、VI a層：灰白色シルト層、VI b層：灰白色粘土層。II層が遺物包含層、III層が遺物確認面で、III層以下が台地の基盤層と考えられる。現地表面からII層もしくはIII層までの深度は15～60cm程しかなく、極めて浅い。

1 Tではより古い時代の遺物包含層の有無を確認するために地表から約25mの調査を行ったが、遺構・遺物は検出されなかった。



図1 調査位置図(1/10,000)

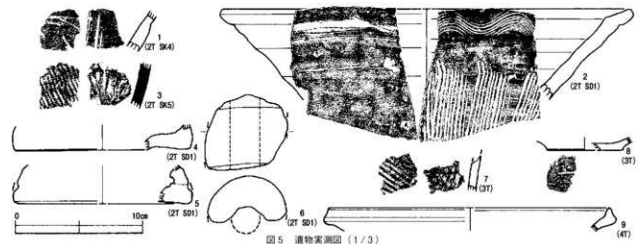
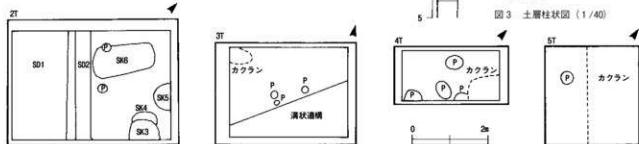
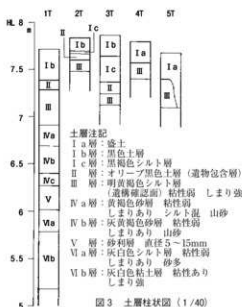
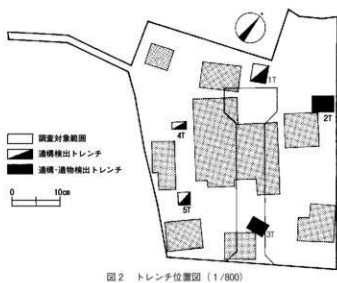


1 T西壁土層断面(東から)

**検出遺構** 全てのトレンチのIII層上面で遺構が検出された。1 T：ピット、2 T：土坑4基・溝2基・ピット2基、3 T：溝1基・ピット3基、4 T：ピット4基、5 T：ピット1基である。遺構からは古代・中世の遺物が出土しているが、遺構出土遺物は中世が主体のように見受けられる。

**出土遺物** 出土遺物は以下のとおり古代・中世の遺物が主体を占める。2 T-SD1：珠洲焼播鉢1点(図5-2)・須恵器2点・土師器1点・羽口1点(6)・焼人骨?10点・不明土製品(4・5)、2 T-SK4：越前焼播鉢1点(1)・土師器1点、2 T-SK5：須恵器1点(3)・土師器2点、3 T-II層：土師器37点(7・8)、4 T：土師器1点(9)である。須恵器・土師器は平安時代、珠洲焼播鉢は吉岡福年VI期と考えられ、15世紀代であろう。羽口や不明土製品は製鉄関連遺物と推測される。

**まとめ** 今回の調査地点の北西西約230m地点で平成18年度に実施した確認調査(第5次・2006124)では、96m程の調査面積であったが、溝・土坑・ピット等の遺構が高密度で検出されるとともに、平安時代の須恵器・土師器・製鉄関連遺物を主に、中世の遺物が若干出土している。(渡邊明和)



2 T北壁土層断面及び遺構検出状況 (北から)



4 T南壁土層断面及び遺構検出状況 (北から)



## (9) 細越遺跡 第1・2次調査 (2014162・2014189)

所在地 新潟市西区内野町385番外  
 調査の原因 集会施設建設 (公共事業)  
 調査期間 平成26年9月11・12日 (2日間・2014162)、  
 平成26年12月10・11日 (2日間・2014189)  
 調査面積 59.2㎡ (2014162)、49.16㎡ (2014189)、  
 (調査対象面積2710.04㎡)  
 調査担当 朝岡政康  
 処置 工事立会

調査に至る経緯 (仮) 内野地区集会施設建設工事に伴う事前の試掘調査 (平成26年9月9日付新歴B第81号の4、第1次・2014162) により発見された遺跡である。その後、計画建物の掘削深度や規模が決まり、取扱いを決めるために追加の確認調査を行った (第2次・2014189)。

位置と環境 調査地は旧内野町の市街地にあり、JR越後線内野駅の東方約100mに位置する。現在の標高は約2.9mである。本遺跡がある内野町付近から角山山麓の佐潟周辺にかけては新砂丘Ⅰ・Ⅱを新砂丘Ⅲが覆っており、旧内野町市街地は新砂丘Ⅱ列上に立地していると考えられている (坂井1991)。

概要と層序 現在の地表から約3mの掘削を行ったが、湧水が激しく調査は困難を極めた。遺構は検出されていないが、基本層序は以下のとおりである。

I層: 表土・盛土、II層: にぶい黄色砂層 (砂丘飛砂堆積層)、III層: 青灰色砂層 (II層が湧水によりグライ土化した層)、IV層: 黒褐色砂層 (近現代遺物出土)、V層: 黄灰色砂泥じりシルト層 (古代遺物出土)、VI層: 褐灰色砂泥じりシルト層、VII層: 灰黄褐色粘土層 (砂泥じり腐植土層)、VIII層: 黒褐色～灰色砂層 (砂丘堆積層)、IX層: 灰黄色粘質土層 (灰色砂泥じり)、X層: 黒色砂層 (砂丘堆積層)、XI層: 暗灰色砂層 (砂丘堆積層)。

XI層が砂丘基盤層、X層がその上に形成された黒色砂層、VIII層は砂丘周辺部の湿水性堆積層と考えられる。

出土遺物 V層から古代の須恵器無台杯と考えられる口縁部破片が出土した。

まとめ 本遺跡は新砂丘Ⅱ-C上に立地し、遺物が出土したV層の黄灰砂泥じりシルト層、は砂丘上に堆積した水性堆積層



図1 調査位置図 (1/10,000)

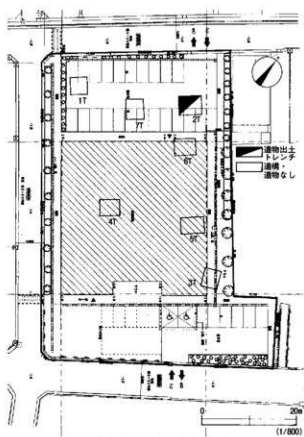


図2 トレンチ位置図 (1/800)

と推測される。同一砂丘南斜面に立地し、本遺跡の南西約900mにあり土師質土器3点が表面採集されている内野潟端A遺跡、同じく南西1,400mにあり珠洲焼1点が表面採集されている内野潟端B遺跡 [新潟市史編さん原始古代中世部会1994] は、これまでは遺跡の存在そのものが疑問視されていたが、本遺跡の発見により、これらの遺跡が再認識・再評価される必要があると言えよう。

なお、「法」第94条の通知は平成27年11月16日に出され、平成28年1月に工事立会が行われた。(波邊明和)



図4 遺物実測図 (1/3)



図3 土層柱状図 (1/40)

### (10) 仲歩切遺跡 第3次調査 (2014179) 及び 工事立会 (2014178)

所在地 新潟市西蒲区道上仲歩切759番外  
調査の原因 道上地区営園場整備事業（公共事業）  
調査期間 平成26年11月4～7日（4日間）  
調査面積 約86.7㎡（調査対象面積266,000㎡）  
調査担当 諫山えりか  
処置 工事立会（25日間・2014178）

**調査に至る経緯** 遺跡は園場整備事業に伴う分布調査によって平成15年に新しく発見された。平成21年に事業予定地内全域を対象に確認調査（第1次・2009177）が行われ、北東から南西方向に細長く延びる奈良・平安時代を中心とする遺跡である事が確認された。今回、園場整備事業に伴う排水管敷設工事が計画され、新潟県地域振興局より「法」第94条の通知と調査依頼書が提出された（平成26年10月28日付）。これを受け、取扱いを決めるために着手報告を提出し（平成26年11月4日付）確認調査（第3次・2014179）を実施した。調査の結果、遺構・遺物が確認された部分については、同事業での排水路等敷設による工事立会（2014178）と併せて対応した。この工事立会では確認調査以上に遺物が出土しており、ここでは工事立会の成果も合わせて記載する。

**位置と環境** 中ノ口川左岸の自然堤防上に立地する（図1）。現標高は約1.6～2.4mを測り、現況は水田・畑であるが昭和30年代の耕地整理によって旧地形は目視できない。調査地の北西に道上荒田遺跡、南に万坊江遺跡など周辺には古代の遺跡が点在する。

**検出遺構** トレンチを17か所設定した。基本層序はI層：褐色粘土、II層：粘土、III層：暗褐色～黒褐色粘土、IV層：シルト質粘土、V層：青灰色シルト（工事立会のみで確認）に分かれる。I層が耕作土・盛土、III・IV層が遺物包含層、III層下面・IV・V層が遺構確認面である。遺物は現地表面から0.3～0.7mの深さで出土する。今回の調査では8Tで1基、15Tで2基の性格不明遺構が検出された。SX1は8Tの壁際のため掘削したが、残りの遺構は掘削していない。また、工事立会時には土坑3基、溝状遺構4基、柱根の残る柱穴3基、性格不明遺構1基が検出された。SK8からは焼骨片（焼骨については、本書V3〔74頁〕に記載）が出土した。長軸3.0m、短軸1.2m、深さ0.1mを測る。焼骨片は残存率の高い土器片の下で検出され、土坑内を三分割して東側から1～3と番号を付して取り上げた（図5）。焼骨の量は少なく、墓とは断定できないため、SK8は焼骨埋納土坑と考える。また、P6では柱根先端が検出されたが、工事掘削底面ですべてが検出できなかったため引き抜かず埋め戻した。



図1 調査位置図（1/15,000）



第3次調査8T高登土層断面及びSX1検出状況（東から）



第3次調査15T高登土層断面及び遺構検出状況（東から）



工事立会2-2号小排水路P1柱根検出状況（北東から）

**出土遺物** 確認調査では8～10・14～16Tから土師器・須恵器が出土し、工事立会時には土師器（古墳・古代・中世）・須恵器・黒色土器・石製品・鍛冶関連遺

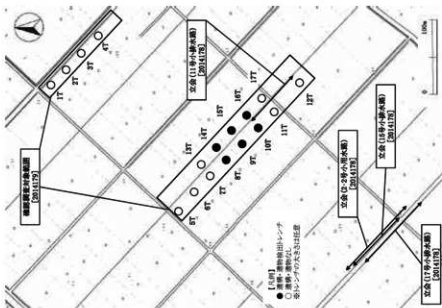


図2 第3次調査・工事立寄位置図 (1/5,000)

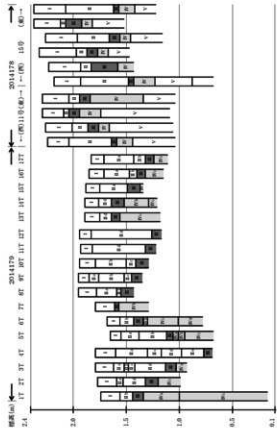


図3 土層柱状図

- 土層記号 (2014170)
- 1層 砂質土・硬土  
2層 砂質土・硬土  
3層 砂質土・硬土  
4層 砂質土・硬土  
5層 砂質土・硬土  
6層 砂質土・硬土  
7層 砂質土・硬土  
8層 砂質土・硬土  
9層 砂質土・硬土  
10層 砂質土・硬土  
11層 砂質土・硬土  
12層 砂質土・硬土  
13層 砂質土・硬土  
14層 砂質土・硬土  
15層 砂質土・硬土  
16層 砂質土・硬土  
17層 砂質土・硬土  
18層 砂質土・硬土  
19層 砂質土・硬土  
20層 砂質土・硬土  
21層 砂質土・硬土  
22層 砂質土・硬土  
23層 砂質土・硬土  
24層 砂質土・硬土  
25層 砂質土・硬土  
26層 砂質土・硬土  
27層 砂質土・硬土  
28層 砂質土・硬土  
29層 砂質土・硬土  
30層 砂質土・硬土  
31層 砂質土・硬土  
32層 砂質土・硬土  
33層 砂質土・硬土  
34層 砂質土・硬土  
35層 砂質土・硬土  
36層 砂質土・硬土  
37層 砂質土・硬土  
38層 砂質土・硬土  
39層 砂質土・硬土  
40層 砂質土・硬土  
41層 砂質土・硬土  
42層 砂質土・硬土  
43層 砂質土・硬土  
44層 砂質土・硬土  
45層 砂質土・硬土  
46層 砂質土・硬土  
47層 砂質土・硬土  
48層 砂質土・硬土  
49層 砂質土・硬土  
50層 砂質土・硬土  
51層 砂質土・硬土  
52層 砂質土・硬土  
53層 砂質土・硬土  
54層 砂質土・硬土  
55層 砂質土・硬土  
56層 砂質土・硬土  
57層 砂質土・硬土  
58層 砂質土・硬土  
59層 砂質土・硬土  
60層 砂質土・硬土  
61層 砂質土・硬土  
62層 砂質土・硬土  
63層 砂質土・硬土  
64層 砂質土・硬土  
65層 砂質土・硬土  
66層 砂質土・硬土  
67層 砂質土・硬土  
68層 砂質土・硬土  
69層 砂質土・硬土  
70層 砂質土・硬土  
71層 砂質土・硬土  
72層 砂質土・硬土  
73層 砂質土・硬土  
74層 砂質土・硬土  
75層 砂質土・硬土  
76層 砂質土・硬土  
77層 砂質土・硬土  
78層 砂質土・硬土  
79層 砂質土・硬土  
80層 砂質土・硬土  
81層 砂質土・硬土  
82層 砂質土・硬土  
83層 砂質土・硬土  
84層 砂質土・硬土  
85層 砂質土・硬土  
86層 砂質土・硬土  
87層 砂質土・硬土  
88層 砂質土・硬土  
89層 砂質土・硬土  
90層 砂質土・硬土  
91層 砂質土・硬土  
92層 砂質土・硬土  
93層 砂質土・硬土  
94層 砂質土・硬土  
95層 砂質土・硬土  
96層 砂質土・硬土  
97層 砂質土・硬土  
98層 砂質土・硬土  
99層 砂質土・硬土  
100層 砂質土・硬土
- 土層記号 (2014170)
- 1層 砂質土  
2層 砂質土  
3層 砂質土  
4層 砂質土  
5層 砂質土  
6層 砂質土  
7層 砂質土  
8層 砂質土  
9層 砂質土  
10層 砂質土  
11層 砂質土  
12層 砂質土  
13層 砂質土  
14層 砂質土  
15層 砂質土  
16層 砂質土  
17層 砂質土  
18層 砂質土  
19層 砂質土  
20層 砂質土  
21層 砂質土  
22層 砂質土  
23層 砂質土  
24層 砂質土  
25層 砂質土  
26層 砂質土  
27層 砂質土  
28層 砂質土  
29層 砂質土  
30層 砂質土  
31層 砂質土  
32層 砂質土  
33層 砂質土  
34層 砂質土  
35層 砂質土  
36層 砂質土  
37層 砂質土  
38層 砂質土  
39層 砂質土  
40層 砂質土  
41層 砂質土  
42層 砂質土  
43層 砂質土  
44層 砂質土  
45層 砂質土  
46層 砂質土  
47層 砂質土  
48層 砂質土  
49層 砂質土  
50層 砂質土  
51層 砂質土  
52層 砂質土  
53層 砂質土  
54層 砂質土  
55層 砂質土  
56層 砂質土  
57層 砂質土  
58層 砂質土  
59層 砂質土  
60層 砂質土  
61層 砂質土  
62層 砂質土  
63層 砂質土  
64層 砂質土  
65層 砂質土  
66層 砂質土  
67層 砂質土  
68層 砂質土  
69層 砂質土  
70層 砂質土  
71層 砂質土  
72層 砂質土  
73層 砂質土  
74層 砂質土  
75層 砂質土  
76層 砂質土  
77層 砂質土  
78層 砂質土  
79層 砂質土  
80層 砂質土  
81層 砂質土  
82層 砂質土  
83層 砂質土  
84層 砂質土  
85層 砂質土  
86層 砂質土  
87層 砂質土  
88層 砂質土  
89層 砂質土  
90層 砂質土  
91層 砂質土  
92層 砂質土  
93層 砂質土  
94層 砂質土  
95層 砂質土  
96層 砂質土  
97層 砂質土  
98層 砂質土  
99層 砂質土  
100層 砂質土

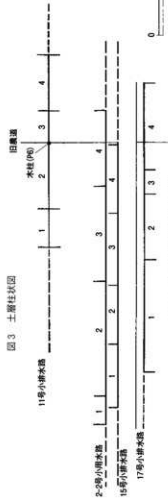


図4 工事立寄位置図 (1/1,500)

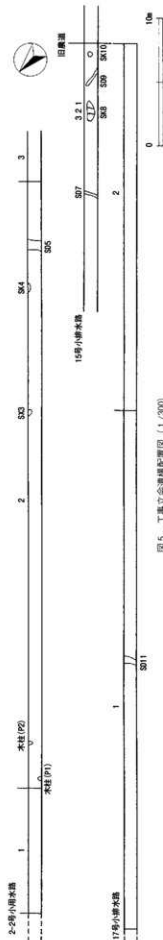


図5 工事立寄位置図 (1/300)

表1 遺物集計表

発見位置	調査年度									
	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006
1号小片	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
2号小片	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
3号小片	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
4号小片	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
5号小片	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
6号小片	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
7号小片	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
8号小片	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
9号小片	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
10号小片	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
11号小片	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
12号小片	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
13号小片	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
14号小片	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
15号小片	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
16号小片	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
17号小片	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
18号小片	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
19号小片	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
20号小片	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
21号小片	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
22号小片	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
23号小片	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
24号小片	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
25号小片	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
26号小片	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
27号小片	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
28号小片	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
29号小片	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
30号小片	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
31号小片	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
32号小片	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
33号小片	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
34号小片	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
35号小片	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
36号小片	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
37号小片	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
38号小片	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
39号小片	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
40号小片	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
41号小片	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
42号小片	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
43号小片	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
44号小片	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
45号小片	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
46号小片	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
47号小片	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
48号小片	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
49号小片	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
50号小片	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
51号小片	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
52号小片	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
53号小片	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
54号小片	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
55号小片	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
56号小片	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1

物・柱根・有機物が出土した。出土遺物の種別と点数は表1のとおりである。そのうち63点を図化した(図6~9)。以下、春日編年(春日1999・2000)を参考に記載する。焼骨が出土したSK 8からは残存率の高い須恵器無台杯を主体にクロクロ・非クロクロの土師器破片などが約2箱出土した。1は土師器無台杯でV期、2は土師器長巻の口縁部でIV・V期に相当する。3~6は須恵器無台杯で、全てV期の小泊窯跡産と考える。SD 7からはクロクロ・非クロクロの土師器を中心に約0.5箱出土した。7はいわゆる西古志型の長巻(坂井1990はか)で口縁部は大きく外反し端部には面をもち、面取りした際の細い溝が認められる。口端部の内面がつまみ上げられたように伸び、やや新しい様相を呈しV期と考える。8は須恵器有台杯でV期の小泊窯跡産である。SD 9からはクロクロ土師器を主体に約0.3箱出土した。9は土師器長巻の口縁部でIV・V期、10は瓶体部に付く断面楕円形の把手でIII・IV期と考える。11は須恵器折縁杯(坂井はか1989はか)で、高台が高く口縁部は外反したち端部が内屈している。笹神丘陵などの阿賀北窯跡産でIV 2・3期に相当する。12以降は遺構外出土である。12は土師器甕で底径が4.2cmと小さく立ち上がり部分にケズリが施され古墳時代の所産と考える。13~16は土師器無台杯で、13・14の内外面には赤彩が施されIII~IV 1期に相当すると考

える。15はⅤ期、16は小片であるが12世紀頃の柱状高台と考える。17は高杯脚部で内面にはハケメが施される。18・19は瓶と考えた。18は逆ハの字状に開く口縁部、19は底面のない底部破片でいずれもⅢ期に相当する。20は土師器長巻で体部内外面にはハケメが施されⅢ期と考える。21は土師器甕で外面にハケメが施され、内面はナデが行われる。22・23はいずれも口径が小さく、Ⅲ期の土師器小甕である。24~28は須恵器無台杯で、24・25は新津丘陵窯跡産でⅣ期、26~28は小泊窯跡産でⅤ期と考える。27・28は底面に墨書が施される。27が「三□」で28が「文□」、27の二文字目は「なべふた」を書いたところで筆を置いたと考える。29~35は須恵器有台杯である。29~31・33は新津丘陵窯跡産で、29のⅢ期以外はⅣ期と考える。34は時期不明だが信濃川左岸の窯跡産と考える。31の内面には刻書が施される。35は高台の内側に稜を持ち底部の切り離しは糸切りである。上越地方の窯跡産の可能性がありⅤ期と考える。36・37は須恵器杯蓋である。36はつまみ部を欠き内面には刻書が施される。Ⅲ~Ⅳ 1期で新津丘陵窯跡産と考える。37は中央部を欠くがⅣ期で信濃川左岸の窯跡産と考える。38は須恵器鉢で器壁がごく薄く推定ではあるが口径16.2cmを測る。小片であり時期・産地ともに不明瞭であるが、山本戸道跡(諏山はか2004)で類似品が出土している(第5330475)。39は須恵器横瓶、40は須恵器甕の小片である。40は口縁部つなぎ目の破面にタタキメが認められる。いずれも時期・産地ともに不明である。41は須恵器直口蓋の完形品である。内面下半はハケメ、外面下部にはケズリが施される。内面には横位状態で何らかの液体が溜まったと思われる黒色着物が認められる。Ⅳ 2・3期で笹神丘陵などの阿賀北窯跡産と考える。42~44は須恵器甕・瓶類で42は長頸甕の口頸部である。いずれも小泊窯跡産である。43は小片のため時期は不明瞭でないが、42・44はⅤ・Ⅵ期と考える。45~50は土師器長巻である。45~47が非クロクロで48~50がクロクロを使用している。45・46はいわゆる西古志型の長巻である。口端部形状から45はⅣ 2・3期以降、46はⅣ 2・3~Ⅴ期と考える。47はいわゆる佐渡型甕(坂井1988はか)で、内外面には細かいハケメが施され部分的に指頭押圧が認められる。Ⅴ期以降と考える。48・49はⅣ期で、50はⅥ期と考える。51・52は黒色土器無台杯である。内面は黒色処理されミガキが施される。52は外面下半にケズリが施される。

53・54は円筒形土製品である。53は内外面ともにハケメが施されるが、54は粘土の輪模り痕を明瞭に残す内面にハケメ、外面には縦方向にケズリが施される。55~59は石製品である。55・56は砥石である。55は確認調査時

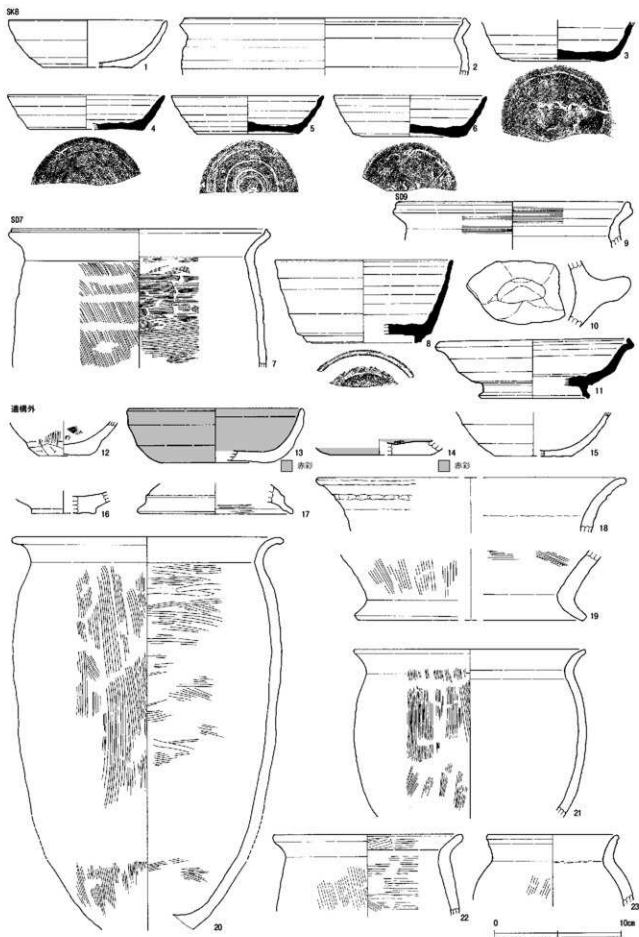


図6 遺物実測図 (1/3)

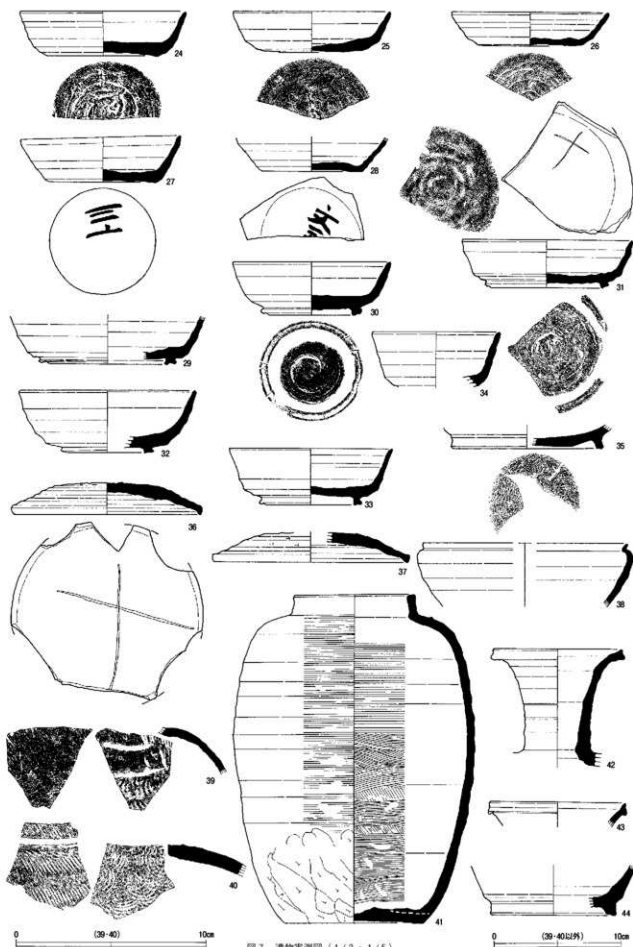


図7 遺物実測図 (1/3・1/5)

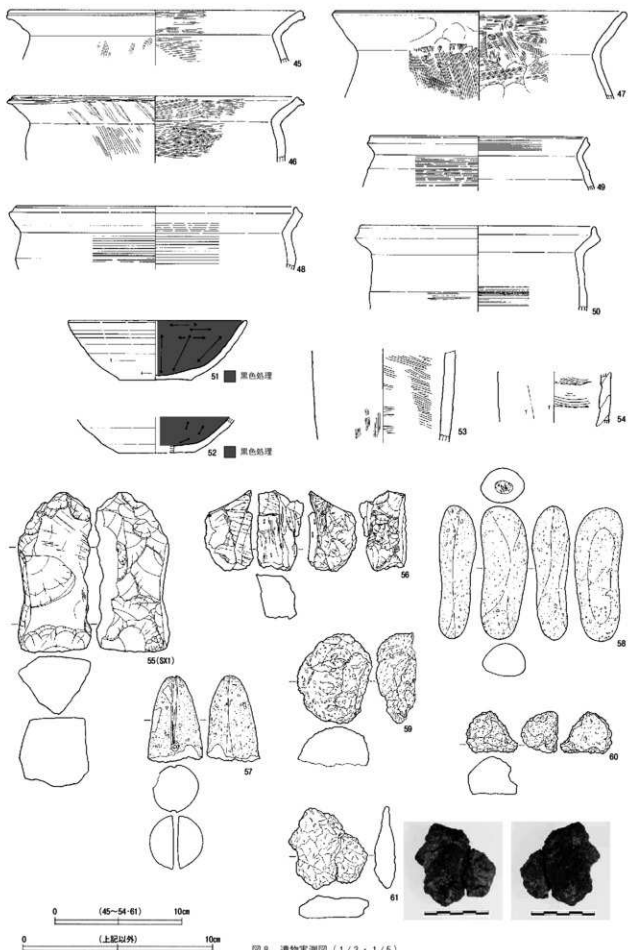


図8 遺物実測図 (1/3・1/5)

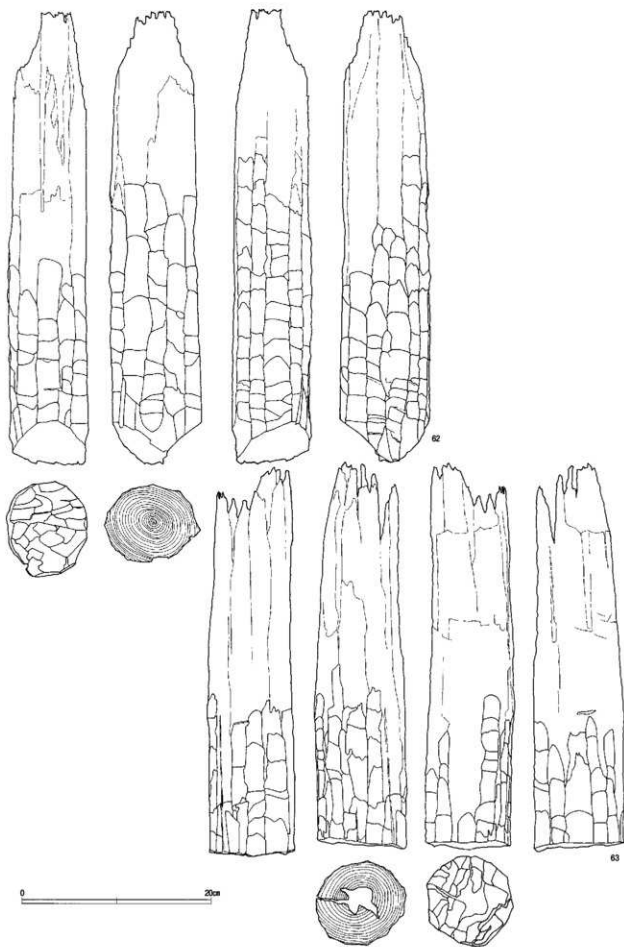


図9 遺物実測図 (1/10)



に遺構 (SX1) から出土した。安山岩製で1面のみ研磨痕が残る。56は泥岩製で、節理面で割れているが溝状に数条の研磨痕が残る。57は安山岩製の有溝石錘で下半部を欠く。孔は中央部分が狭くなっており、両側から開けられたと推察する。58は安山岩製の磨耗産物である。研磨方向は確認できないものの部分的に磨耗しており、端部にはわずかに敲打痕が認められる。59は磨耗軽石である。約半面を欠き一部に磨耗痕が認められる。60は碗形産物で、今回の調査では唯一の出土である。61はアスファルト塊である。不純物は少ない。おそらく新津丘陵周辺で採取されたものとする。62・63は柱根で約6m離れて出土した。いずれも遺存状況が良く、全周に施された加工痕跡が明瞭に残る。ともにクリ材と考えられ、端部は62が断面V字状に、63が水平に加工されている。本遺跡の北東約1.5kmに位置する下新田遺跡出土の柱根でも

端部の加工が同様の2種類認められる(龍田ほか2015)。

まとめ 焼骨埋土坑 (SK8) や掘立柱建物と思われる柱根、その他の出土遺物から、本遺跡は古代集落の主要部分であった可能性が高いと考える。また、古墳時代と考える甕や中世土器製の破片が出土していることから、周辺に古墳時代や中世の遺跡が広がる可能性も考えられる。なお、冬場の水田部は地盤が悪くなることが多く、今回の工事立会時には既設管撤去による湧水など想定外の要因で掘削幅が計画以上となることがあった。よって、今回は遺跡立地や工事の実態等を考慮し慎重な取扱いが必要であろう。

古代の土器については春日真実氏 (公財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団、西古志葉については小野本敦氏 (公財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団、墨書については相澤実氏 (帝京大学) より御教示いただいた。(龍田優子)

表2 土器観察表

調査番号	調査地点	出土状況				用途	形状	材質	色	厚さ (mm)	観察項目				備考
		層位	状態	破損	観察						形状	厚さ (mm)	破損	観察	
1	2014/28	11/10	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
2	2014/28	11/10	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
3	2014/28	11/10	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
4	2014/28	11/10	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
5	2014/28	11/10	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
6	2014/28	11/10	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
7	2014/28	11/10	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
8	2014/28	11/10	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
9	2014/28	11/10	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
10	2014/28	11/10	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
11	2014/28	11/10	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
12	2014/28	11/10	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
13	2014/28	11/10	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
14	2014/28	11/10	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
15	2014/28	11/10	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
16	2014/28	11/10	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
17	2014/28	11/10	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
18	2014/28	11/10	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
19	2014/28	11/10	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
20	2014/28	11/10	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
21	2014/28	11/10	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
22	2014/28	11/10	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
23	2014/28	11/10	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
24	2014/28	11/10	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
25	2014/28	11/10	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
26	2014/28	11/10	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
27	2014/28	11/10	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
28	2014/28	11/10	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
29	2014/28	11/10	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
30	2014/28	11/10	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
31	2014/28	11/10	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
32	2014/28	11/10	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
33	2014/28	11/10	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
34	2014/28	11/10	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
35	2014/28	11/10	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
36	2014/28	11/10	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
37	2014/28	11/10	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
38	2014/28	11/10	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
39	2014/28	11/10	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
40	2014/28	11/10	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
41	2014/28	11/10	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
42	2014/28	11/10	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
43	2014/28	11/10	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
44	2014/28	11/10	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
45	2014/28	11/10	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
46	2014/28	11/10	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
47	2014/28	11/10	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
48	2014/28	11/10	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
49	2014/28	11/10	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
50	2014/28	11/10	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
51	2014/28	11/10	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
52	2014/28	11/10	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	

表3 土製品観察表

調査番号	調査地点	出土状況			用途	形状	材質	色	厚さ (mm)	備考
		層位	状態	破損						
10	2014/28	11/10	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
14	2014/28	11/10	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	

表5 銅治関連遺物・アスファルト観察表

調査番号	調査地点	出土状況			用途	形状	材質	色	厚さ (mm)	備考
		層位	状態	破損						
10	2014/28	11/10	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
11	2014/28	11/10	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	

表4 石製品観察表

調査番号	調査地点	出土状況			用途	形状	材質	色	厚さ (mm)	備考
		層位	状態	破損						
10	2014/28	11/10	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
11	2014/28	11/10	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
12	2014/28	11/10	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
13	2014/28	11/10	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
14	2014/28	11/10	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
15	2014/28	11/10	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
16	2014/28	11/10	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
17	2014/28	11/10	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
18	2014/28	11/10	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
19	2014/28	11/10	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	

表6 木製品観察表

調査番号	調査地点	出土状況			用途	形状	材質	色	厚さ (mm)	備考
		層位	状態	破損						
10	2014/28	11/10	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
11	2014/28	11/10	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	

(1) 近世新潟町跡第19～22次調査 (2014101・2014105・2014126・2014145)

(a) 近世新潟町跡の周知化と取扱い

新潟町は日本海有数の湊町である。17世紀半ばに現在の信濃川左岸の河口付近へ移転し、その後拡大しながら現在に至るが、その移転当初の町を「近世新潟町跡」としている。

現在、近世新潟町跡の周知化は、試掘調査によって江戸時代の土層が確認された地点について行っている。平成26年度末で周知化された地点は15か所である。

(b) 平成26年度の試掘・確認調査

平成26年度に実施された試掘・確認調査は、公共事業に伴うものが1件、民間事業に伴うものが3件である。いずれも、江戸時代の遺物包含層が確認され周知化を行った。

(c) 本町通1番町172-2地点試掘調査

第19次調査 (2014101) (図2・3・8)

所在地 新潟市中央区本町通一番町172番2

調査の原因 集合住宅建設 (民間事業)

調査期間 平成26年4月14日、5月9～13日 (5日間)

調査面積 106㎡ (調査対象面積51099㎡)

調査担当 朝岡政康

処置 工事立会

**調査概要** 調査地は江戸時代には3筆に分かれていたことから、トレンチを屋敷地割ごとに3か所の合計9か所設定した。いずれのトレンチも概ね地表下1.5mまでは、明治時代の遺物が出土したが、1.5m以下は江戸時代後期の遺跡であることが確認された。また、通りに面した表屋敷地側 (1・4・7 T) は攪乱されており、奥屋敷地 (3・6・9 T) 側は堆積状況が良好に残るほか、遺物の量も多かった。遺物は、17世紀後半から18世紀のものを図化した。肥前磁器がもっとも多く日常雑器が多いが、中にはやや高級とされる有田産の椀 (4) や皿 (5)、蓋付鉢 (9) も出土している。8 Tからは「上諸白」の焼印のある樽板 (21) が出土している。「諸白」というのは、白麹と白米で醸した酒の意味である。

当該地は17～18世紀代江戸期の遺物包含層が残っていることが確認されたことから、近世新潟町跡の範囲として周知化された。調査後は、工事立会に対応した。

(d) 上大川前通4番町40-1地点試掘調査

第20・21次調査 (2014105・2014126) (図4・5・9)

所在地 新潟市中央区上大川前通四番町40番1

調査の原因 集合住宅建設 (民間事業)

調査期間 平成26年4月18・19日 (2日間・2014105)、  
5月26～29日 (4日間・2014126)



図1 調査位置図 (1/10,000)

調査面積 27㎡ (調査対象面積1,052.68㎡)

調査担当 諏山えりか

処置 工事立会

**調査概要** 当初トレンチを2か所設定して、試掘を行った所、木製品を多く含む遺構が検出され、18世紀代の陶磁器が出土したため、追加の確認調査 (2014126) を行った。調査地は概ね地表下1.0mまでが盛土であり、Ⅲ層が18～19世紀の遺物包含層である。さらにⅣ層からは上大川前通に直交する溝が検出された。遺物は18世紀後半から19世紀のものが多く、特筆すべき遺物としては、肥前の佐佐見窯で生産されたコンプラ瓶 (14) がある。コンプラ瓶は海外向けに生産されたもので、当時海外との貿易ルートがあった長崎や北海道南端地域で多く出土するほかは、全国的に見てもあまり出土しない遺物である。なお、新潟県内では初の出土例である。

調査の結果、18世紀代の遺構・遺物が出土していることから周知化を行った。調査後は、工事立会に対応することとした。

(e) 古町通3番町654番地地点試掘調査

第22次調査 (2014145) (図6・7・9)

所在地 新潟市中央区古町通三番町654番

調査の原因 駐輪場建設 (公共事業)

調査期間 平成26年7月29・30日 (2日間)

調査面積 21.84㎡ (調査対象面積302.14㎡)

調査担当 朝岡政康

処置 慎重工事

**調査概要** 2か所のトレンチを設定した。1 Tは土層の堆積が良好であり、概ね地表下2 mのⅢ層から18世紀後半～19世紀の遺物が出土した。古町通に面する2 Tでは地表下1.5 mの粘土混じりの土坑から18世紀後半の遺物がまとまって出土した。特に白磁向付 (18)、染付向付 (19)、青磁染付皿 (20) については、同一規格・柄

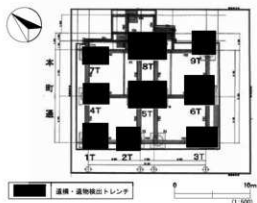


図2 第19次調査トレンチ位置図 (1/500)

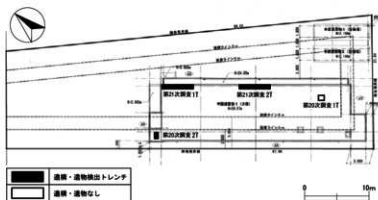
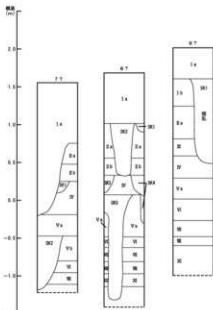
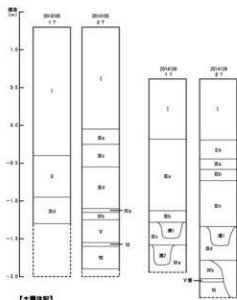


図4 第20・21次調査トレンチ位置図 (1/600)



- 【土層注記】  
 I層 現代の雑土  
 II層 埋設物付土層の盛土  
 III層 灰黄褐色土 粘性土 しまり少  
 IV層 灰黄褐色土 粘性土 しまり少  
 V層 灰黄褐色土 粘性土 しまり少  
 VI層 灰黄褐色土 粘性土 しまり少  
 VII層 灰黄褐色土 粘性土 しまり少  
 VIII層 灰黄褐色土 粘性土 しまり少  
 IX層 灰黄褐色土 粘性土 しまり少  
 X層 灰黄褐色土 粘性土 しまり少  
 XI層 灰黄褐色土 粘性土 しまり少  
 XII層 灰黄褐色土 粘性土 しまり少  
 XIII層 灰黄褐色土 粘性土 しまり少  
 XIV層 灰黄褐色土 粘性土 しまり少  
 XV層 灰黄褐色土 粘性土 しまり少  
 XVI層 灰黄褐色土 粘性土 しまり少  
 XVII層 灰黄褐色土 粘性土 しまり少  
 XVIII層 灰黄褐色土 粘性土 しまり少  
 XIX層 灰黄褐色土 粘性土 しまり少  
 XX層 灰黄褐色土 粘性土 しまり少  
 XXI層 灰黄褐色土 粘性土 しまり少  
 XXII層 灰黄褐色土 粘性土 しまり少  
 XXIII層 灰黄褐色土 粘性土 しまり少  
 XXIV層 灰黄褐色土 粘性土 しまり少  
 XXV層 灰黄褐色土 粘性土 しまり少  
 XXVI層 灰黄褐色土 粘性土 しまり少  
 XXVII層 灰黄褐色土 粘性土 しまり少  
 XXVIII層 灰黄褐色土 粘性土 しまり少  
 XXIX層 灰黄褐色土 粘性土 しまり少  
 XXX層 灰黄褐色土 粘性土 しまり少

図3 第19次調査土層柱状図 (1/50)



- 【土層注記】  
 I層 雑土  
 II層 シルト質粘土  
 III層 黄褐色シルト質粘土  
 IV層 シルト質粘土 (遺物付層)  
 V層 黄褐色シルト質粘土  
 VI層 黄褐色シルト質粘土  
 VII層 黄褐色シルト質粘土  
 VIII層 黄褐色シルト質粘土  
 IX層 黄褐色シルト質粘土  
 X層 黄褐色シルト質粘土  
 XI層 黄褐色シルト質粘土  
 XII層 黄褐色シルト質粘土  
 XIII層 黄褐色シルト質粘土  
 XIV層 黄褐色シルト質粘土  
 XV層 黄褐色シルト質粘土  
 XVI層 黄褐色シルト質粘土  
 XVII層 黄褐色シルト質粘土  
 XVIII層 黄褐色シルト質粘土  
 XIX層 黄褐色シルト質粘土  
 XX層 黄褐色シルト質粘土  
 XXI層 黄褐色シルト質粘土  
 XXII層 黄褐色シルト質粘土  
 XXIII層 黄褐色シルト質粘土  
 XXIV層 黄褐色シルト質粘土  
 XXV層 黄褐色シルト質粘土  
 XXVI層 黄褐色シルト質粘土  
 XXVII層 黄褐色シルト質粘土  
 XXVIII層 黄褐色シルト質粘土  
 XXIX層 黄褐色シルト質粘土  
 XXX層 黄褐色シルト質粘土

図5 第20・21次調査土層柱状図 (1/50)

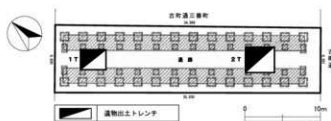
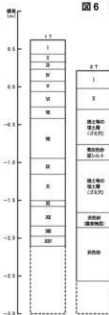


図6 第22次調査トレンチ位置図 (1/500)



- 【土層注記】  
 I層 埋設物付土層の盛土  
 II層 黄褐色シルト質粘土  
 III層 黄褐色シルト質粘土  
 IV層 黄褐色シルト質粘土 粘性土 しまり少  
 V層 黄褐色シルト質粘土 粘性土 しまり少  
 VI層 黄褐色シルト質粘土 粘性土 しまり少  
 VII層 黄褐色シルト質粘土 粘性土 しまり少  
 VIII層 黄褐色シルト質粘土 粘性土 しまり少  
 IX層 黄褐色シルト質粘土 粘性土 しまり少  
 X層 黄褐色シルト質粘土 粘性土 しまり少  
 XI層 黄褐色シルト質粘土 粘性土 しまり少  
 XII層 黄褐色シルト質粘土 粘性土 しまり少  
 XIII層 黄褐色シルト質粘土 粘性土 しまり少  
 XIV層 黄褐色シルト質粘土 粘性土 しまり少  
 XV層 黄褐色シルト質粘土 粘性土 しまり少  
 XVI層 黄褐色シルト質粘土 粘性土 しまり少  
 XVII層 黄褐色シルト質粘土 粘性土 しまり少  
 XVIII層 黄褐色シルト質粘土 粘性土 しまり少  
 XIX層 黄褐色シルト質粘土 粘性土 しまり少  
 XX層 黄褐色シルト質粘土 粘性土 しまり少  
 XXI層 黄褐色シルト質粘土 粘性土 しまり少  
 XXII層 黄褐色シルト質粘土 粘性土 しまり少  
 XXIII層 黄褐色シルト質粘土 粘性土 しまり少  
 XXIV層 黄褐色シルト質粘土 粘性土 しまり少  
 XXV層 黄褐色シルト質粘土 粘性土 しまり少  
 XXVI層 黄褐色シルト質粘土 粘性土 しまり少  
 XXVII層 黄褐色シルト質粘土 粘性土 しまり少  
 XXVIII層 黄褐色シルト質粘土 粘性土 しまり少  
 XXIX層 黄褐色シルト質粘土 粘性土 しまり少  
 XXX層 黄褐色シルト質粘土 粘性土 しまり少

図7 第22次調査土層柱状図 (1/50)

第 19 次調查 (1~9)

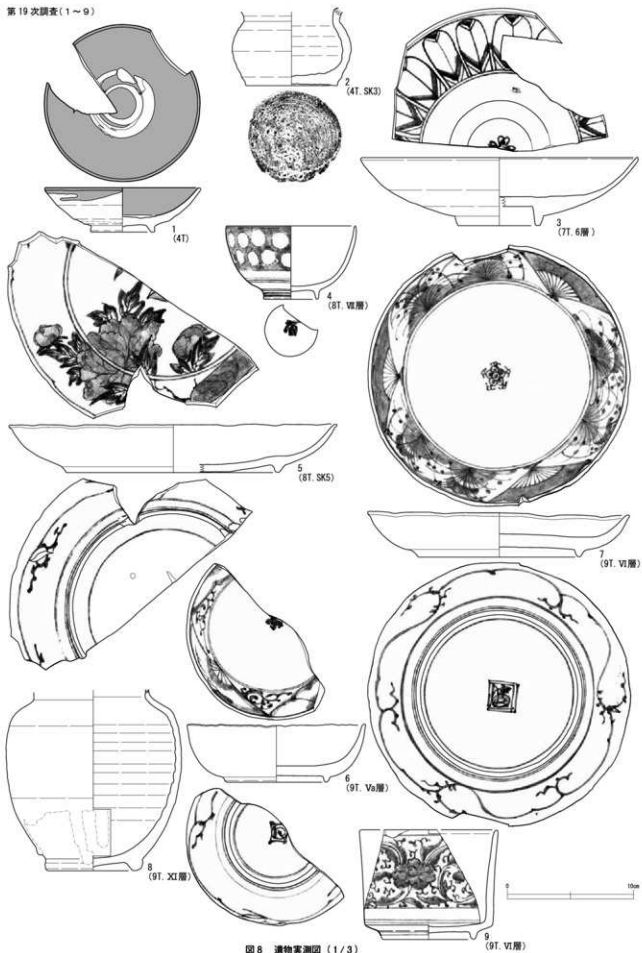


圖 8 遺物實測圖 (1/3)

第20次調査(10～12)・第21次調査(13～15)

第19次調査



第22次調査(16～20)

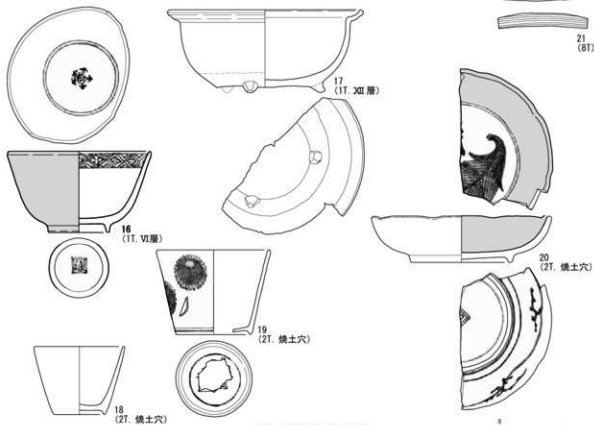


図9 遺物実測図(1/3)

のものが複数出土し、「揃い」として使用されたことが窺える。調査地は18世紀前半には「新明町」と呼ばれる花街であったため、料亭など飲食業での使用が想定される。

調査の結果、18世紀代の遺構・遺物が出土しているこ

とから周知化を行った。調査の結果、掘削は1.0m内におさまることから慎重工事に対応した。陶磁器については大橋康二氏（佐賀県立九州陶磁文化館）より御教示いただいた。

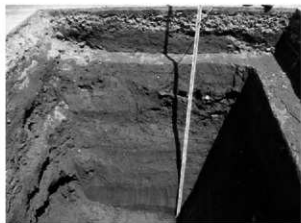
(今井さやか)

表1 陶磁器観察表

第19次調査 (2014/01)										
調査No.	出土位置		種類	器種	産地	年代	寸法 (cm)			図形・調整・文様・施装等
	トレンチ	層位					口径	底径	器高	
1	4T	8	陶器	皿	肥前(内野山)	18世紀前半	12.2	5.0	3.5	内: 通身輪 輪の口縁は外: 内: 通身輪に黒線輪のかけ分け
2	4T	SK3	陶器	灰皿	越前(瀬戸)	18世紀	66.0	7.5	6.5	灰輪 底面: 折縁赤切角 口縁部全周に黒行刺
3	7T	V	陶器	皿	肥前(唐津)	17世紀後半	11.8	3.5	5.4	内: 赤切角 輪の口縁は外: 見込み・輪: 表割に黒行刺
4	8T	Ⅲ	陶器	磁器	肥前(有田)	1680-1710	10.2	4.2	5.8	内: 黒切角 外: 栗輪文 口縁: 口縁: 通縁
5	8T	SK5	陶器	皿	肥前(有田)	1690-1730	26.0	16.8	3.8	内: 黒切角 外: 栗輪文 底面: 黒切角 口縁: 通縁
6	9T	V-8	陶器	皿	肥前(唐津)	18世紀中	7.0	3.0	4.6	内: 黒切角 外: 見込み・輪: コシツメの口縁部は赤切角 外: 栗輪文 底面: 通縁
7	9T	Ⅲ	陶器	皿	肥前(唐津)	18世紀中	20.0	12.8	3.6	内: 黒切角 外: 見込み・輪: コシツメの口縁部は赤切角 外: 栗輪文 底面: 通縁
8	9T	X-1	陶器	皿	肥前	17世紀	-	7.0	14.4	外: 全面に黒く施装をかけた口縁部を黒し分け
9	9T	V	陶器	蓋付鉢	肥前(有田)	18世紀	10.7	7.0	3.0	内: 黒切角 外: 栗輪文
第20次調査 (2014/06・2014/20)										
調査No.	出土位置		種類	器種	産地	年代	寸法 (cm)			図形・調整・文様・施装等
	トレンチ	層位					口径	底径	器高	
10	4T	Ⅲ	陶器	皿	肥前	18世紀	11.2	4.7	6.4	内: 黒切角 外: 栗輪文 見込み・口縁部
11	4T	GL-2B	陶器	小鉢	肥前(西)	18世紀後半	7.0	3.0	3.7	内: 黒切角 外: 栗輪文 見込み・口縁部
12	4T	GL-2D	陶器	小鉢	肥前	19世紀	9.2	3.6	5.1	内: 黒切角 外: 栗輪文 見込み・口縁部
13	4T	GL-2B	陶器	皿	肥前	18世紀	13.8	8.1	4.5	内: 赤切角 外: 栗輪文 見込み・口縁部 外: 栗輪文 底面: 輪の口縁部は赤切角
14	4T	GL-1B	陶器	皿	肥前(唐津)	1820-1850	2.2	-	11.7	内: 黒切角 外: 栗輪文 見込み・口縁部 外: 栗輪文 底面: 輪の口縁部は赤切角
15	4T	Ⅲ	陶器	皿	肥前(内野山)	18世紀前半	3.2	-	12.9	内: 黒切角 外: 栗輪文 見込み・口縁部
第21次調査 (2014/01)										
調査No.	出土位置		種類	器種	産地	年代	寸法 (cm)			図形・調整・文様・施装等
	トレンチ	層位					口径	底径	器高	
16	1T	V	陶器	瓶	肥前	18世紀前半	11.2	4.7	10.0	内: 黒切角 外: 栗輪文 見込み・口縁部 外: 栗輪文 底面: 輪の口縁部は赤切角
17	1T	X-1	陶器	瓶	肥前(西)	18世紀	33.0	7.0	6.5	内: 黒切角 外: 栗輪文 見込み・口縁部 外: 栗輪文 底面: 輪の口縁部は赤切角
18	2T	Ⅲ	陶器	鉢	肥前	18世紀前半	7.0	4.0	5.4	内: 黒切角 外: 栗輪文 見込み・口縁部
19	2T	Ⅲ	陶器	鉢	肥前	18世紀前半	9.0	6.0	6.7	内: 黒切角 外: 栗輪文 見込み・口縁部
20	2T	Ⅲ	陶器	鉢	肥前	18世紀前半	14.0	8.0	5.7	内: 黒切角 外: 栗輪文 見込み・口縁部

表2 木製品観察表

第19次調査 (2014/01)									
調査No.	出土位置		種類	器種	長さ	寸法 (cm)			加工痕・調整
	トレンチ	層位				長さ	厚さ	厚さ	
21	8T	V	竹器	網物類	30		71	0.8	表面に漆(「上塗り」)



第19次調査 9 T東壁土層断面 (西から)



第21次調査 1 T溝完備状況 (東から)



第22次調査 1 T西壁土層断面 (東から)



第22次調査 2 T東壁土層断面 (西から)

### Ⅲ 文化財センターの事業

#### 1 発掘調査の概要

##### (1) 本発掘調査について

試掘・確認調査で埋蔵文化財の存在が確認され、埋蔵文化財が土木工事により破壊される場合、記録による保存を目的とした発掘調査を実施する。これを本発掘調査（本格発掘調査）と呼んでいる。

新潟市では、本発掘調査の要否について、文化庁の示した通知（平成10年9月29日付庁保記第75号 各都道府県教委教育長宛文化庁次長通知「埋蔵文化財の保護と発掘調査の円滑化等について（通知）」）及びそれを受けて設定した新潟県教育委員会の基準（平成11年9月10日付「発掘調査の要否等の判断基準」）に即して判断している。

試掘・確認調査で遺跡の内容を十分に把握した後、遺跡の保存のため可能な限り遺跡を破壊せず、また遺跡が破壊され本発掘調査が必要な場合であっても最小限の規模となることを目指して開発事業者等と遺跡の取扱いについて協議している。しかし、民間事業者の宅地開発事業における道路部分や公共事業でも大規模な圃場整備事業等では、遺跡を破壊しない計画への変更が困難な場合もあり、本発掘調査による記録保存を行うことが多い。

本発掘調査実施にあたっては、「法」第99条により、本市教育委員会がこれを実施するものとし、基本的に直営の体制で対応している。しかし、現在の発掘調査の件数・規模に対し、現体制では対応可能な調査担当や調査員の人数が限定されている。また、現場作業と並行して整理・報告書作成作業も遅滞なく進めなければならず、民間調査組織を適宜導入している。

##### (2) 平成26年度の本発掘調査

表1に示した通り、3遺跡で発掘調査を行った。

圃場整備関係1件、道路関係2件とすべて公共事業が原因である。

圃場整備の用排水工部分及び面施工部分が対象となった細池寺道上遺跡（2014001、本書41頁概要報告）の調査面積が5,500㎡を超えた他は、いずれも1,000㎡未満と

比較的小規模な調査面積となっている。（廣野耕造）

##### (3) 平成26年度の発掘調査現地説明会

平成26年度は細池寺道上遺跡で現地説明会を開催した（表2）。細池寺道上遺跡では、異なる原因の調査が2か所で行われたが、調査地が近いことから同じ日に現地説明会を開催したところ142名と多くの参加者があった。手代山北遺跡（2014003、本書43頁概要報告）は、面積が狭小であったことと調査期間が非常に短いことから現地説明会は行わなかった。（今井さやか）



現地説明会風景（細池寺道上遺跡第43次調査）



現地説明会風景（細池寺道上遺跡第44次調査）

表2 平成26年度発掘調査現地説明会参加者数

年月日	遺跡名	参加者数 (人)
2014年・28（日）	細池寺道上遺跡	142

表1 平成26年度本発掘調査一覧（調査番号順）

調査番号	遺跡名	調査開始日	調査終了日	調査場所	調査目的	調査内容	遺跡の状況	主な遺物	主な遺跡	
2014001	細池寺道上遺跡	11	11/24	新潟市東区古津	開発準備	①試掘・②調査・③調査・④調査・⑤調査・⑥調査・⑦調査・⑧調査・⑨調査・⑩調査・⑪調査・⑫調査・⑬調査・⑭調査・⑮調査・⑯調査・⑰調査・⑱調査・⑲調査・⑳調査・㉑調査・㉒調査・㉓調査・㉔調査・㉕調査・㉖調査・㉗調査・㉘調査・㉙調査・㉚調査・㉛調査・㉜調査・㉝調査・㉞調査・㉟調査・㊱調査・㊲調査・㊳調査・㊴調査・㊵調査・㊶調査・㊷調査・㊸調査・㊹調査・㊺調査・㊻調査・㊼調査・㊽調査・㊾調査・㊿調査	2/14-12/26	平成・鎌倉・奈良	①土器・②土器・③土器・④土器・⑤土器・⑥土器・⑦土器・⑧土器・⑨土器・⑩土器・⑪土器・⑫土器・⑬土器・⑭土器・⑮土器・⑯土器・⑰土器・⑱土器・⑲土器・⑳土器・㉑土器・㉒土器・㉓土器・㉔土器・㉕土器・㉖土器・㉗土器・㉘土器・㉙土器・㉚土器・㉛土器・㉜土器・㉝土器・㉞土器・㉟土器・㊱土器・㊲土器・㊳土器・㊴土器・㊵土器・㊶土器・㊷土器・㊸土器・㊹土器・㊺土器・㊻土器・㊼土器・㊽土器・㊾土器・㊿土器	①土器・②土器・③土器・④土器・⑤土器・⑥土器・⑦土器・⑧土器・⑨土器・⑩土器・⑪土器・⑫土器・⑬土器・⑭土器・⑮土器・⑯土器・⑰土器・⑱土器・⑲土器・⑳土器・㉑土器・㉒土器・㉓土器・㉔土器・㉕土器・㉖土器・㉗土器・㉘土器・㉙土器・㉚土器・㉛土器・㉜土器・㉝土器・㉞土器・㉟土器・㊱土器・㊲土器・㊳土器・㊴土器・㊵土器・㊶土器・㊷土器・㊸土器・㊹土器・㊺土器・㊻土器・㊼土器・㊽土器・㊾土器・㊿土器
2014002	細池寺道上遺跡	43	10/27	新潟市東区古津	開発準備	①試掘・②調査・③調査・④調査・⑤調査・⑥調査・⑦調査・⑧調査・⑨調査・⑩調査・⑪調査・⑫調査・⑬調査・⑭調査・⑮調査・⑯調査・⑰調査・⑱調査・⑲調査・⑳調査・㉑調査・㉒調査・㉓調査・㉔調査・㉕調査・㉖調査・㉗調査・㉘調査・㉙調査・㉚調査・㉛調査・㉜調査・㉝調査・㉞調査・㉟調査・㊱調査・㊲調査・㊳調査・㊴調査・㊵調査・㊶調査・㊷調査・㊸調査・㊹調査・㊺調査・㊻調査・㊼調査・㊽調査・㊾調査・㊿調査	6/23-10/16	平安・鎌倉・奈良	①土器・②土器・③土器・④土器・⑤土器・⑥土器・⑦土器・⑧土器・⑨土器・⑩土器・⑪土器・⑫土器・⑬土器・⑭土器・⑮土器・⑯土器・⑰土器・⑱土器・⑲土器・⑳土器・㉑土器・㉒土器・㉓土器・㉔土器・㉕土器・㉖土器・㉗土器・㉘土器・㉙土器・㉚土器・㉛土器・㉜土器・㉝土器・㉞土器・㉟土器・㊱土器・㊲土器・㊳土器・㊴土器・㊵土器・㊶土器・㊷土器・㊸土器・㊹土器・㊺土器・㊻土器・㊼土器・㊽土器・㊾土器・㊿土器	①土器・②土器・③土器・④土器・⑤土器・⑥土器・⑦土器・⑧土器・⑨土器・⑩土器・⑪土器・⑫土器・⑬土器・⑭土器・⑮土器・⑯土器・⑰土器・⑱土器・⑲土器・⑳土器・㉑土器・㉒土器・㉓土器・㉔土器・㉕土器・㉖土器・㉗土器・㉘土器・㉙土器・㉚土器・㉛土器・㉜土器・㉝土器・㉞土器・㉟土器・㊱土器・㊲土器・㊳土器・㊴土器・㊵土器・㊶土器・㊷土器・㊸土器・㊹土器・㊺土器・㊻土器・㊼土器・㊽土器・㊾土器・㊿土器
2014003	手代山北遺跡	8	6/20	新潟市東区古津	開発準備	①試掘・②調査・③調査・④調査・⑤調査・⑥調査・⑦調査・⑧調査・⑨調査・⑩調査・⑪調査・⑫調査・⑬調査・⑭調査・⑮調査・⑯調査・⑰調査・⑱調査・⑲調査・⑳調査・㉑調査・㉒調査・㉓調査・㉔調査・㉕調査・㉖調査・㉗調査・㉘調査・㉙調査・㉚調査・㉛調査・㉜調査・㉝調査・㉞調査・㉟調査・㊱調査・㊲調査・㊳調査・㊴調査・㊵調査・㊶調査・㊷調査・㊸調査・㊹調査・㊺調査・㊻調査・㊼調査・㊽調査・㊾調査・㊿調査	10/19-11/26	平安・鎌倉・奈良	①土器・②土器・③土器・④土器・⑤土器・⑥土器・⑦土器・⑧土器・⑨土器・⑩土器・⑪土器・⑫土器・⑬土器・⑭土器・⑮土器・⑯土器・⑰土器・⑱土器・⑲土器・⑳土器・㉑土器・㉒土器・㉓土器・㉔土器・㉕土器・㉖土器・㉗土器・㉘土器・㉙土器・㉚土器・㉛土器・㉜土器・㉝土器・㉞土器・㉟土器・㊱土器・㊲土器・㊳土器・㊴土器・㊵土器・㊶土器・㊷土器・㊸土器・㊹土器・㊺土器・㊻土器・㊼土器・㊽土器・㊾土器・㊿土器	①土器・②土器・③土器・④土器・⑤土器・⑥土器・⑦土器・⑧土器・⑨土器・⑩土器・⑪土器・⑫土器・⑬土器・⑭土器・⑮土器・⑯土器・⑰土器・⑱土器・⑲土器・⑳土器・㉑土器・㉒土器・㉓土器・㉔土器・㉕土器・㉖土器・㉗土器・㉘土器・㉙土器・㉚土器・㉛土器・㉜土器・㉝土器・㉞土器・㉟土器・㊱土器・㊲土器・㊳土器・㊴土器・㊵土器・㊶土器・㊷土器・㊸土器・㊹土器・㊺土器・㊻土器・㊼土器・㊽土器・㊾土器・㊿土器

## 2 平成26年度の本発掘調査

平成26年度本発掘調査の概要を次項より記す。概要は、基本的に調査番号順であるが、同遺跡の場合は調査

回数順としている。概要掲載遺跡の位置を図1、一覧を表3に、試掘・確認調査の概要掲載遺跡と併せて示した。各項題は、調査名であり、末尾括弧内は調査番号である。(金田拓也)

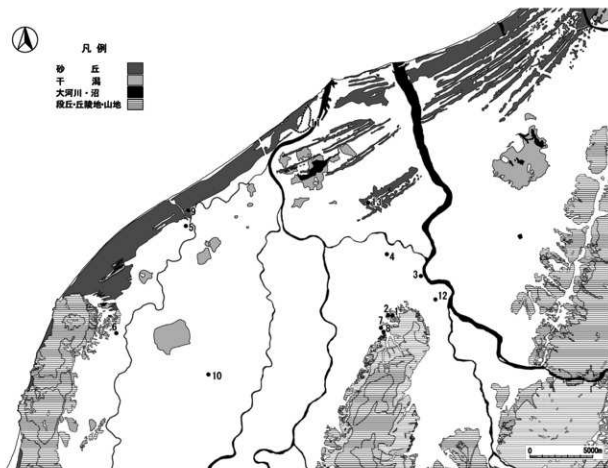


図1 平成26年度概要掲載発掘調査位置図 (1/300,000)

表3 平成26年度概要掲載発掘調査一覧

平成26年度発掘調査に係る試掘・確認調査及び本発掘調査

遺跡番号	遺跡名	調査回数(次)	調査番号	位置番号(期)	掲載頁
126	早濠跡	7・8	2013188 2014111 2013189	1	7
261	沢海遺跡	1・2	2014112 2014119	2	13
268	中新田久保遺跡	3・4	2014113 2014226	3	15
265	古塚遺跡	1	2014119	4	16
3	六地山遺跡	11	2014122	5	17
263	下田東遺跡	1・2	2014140 2014150	6	20
132	春日遺跡	20	2014152	7	21
135	高五ヶ倉遺跡	8	2014165	8	22
266	細橋遺跡	1	2014162	9	25
572	侍多町遺跡	3	2014178 2014179 2014101	10	26
575	近世新田町跡	19~22	2014105 2014126 2014145	11	34

平成26年度本発掘調査

遺跡番号	遺跡名	調査回数(次)	調査番号	位置番号(期)	掲載頁
151	網走中道上遺跡	43	2014002	12	41
		44	2014001		42
234	平谷石止遺跡	4	2014003	13	43



本発掘調査風景(網走中道上遺跡第44次調査)



(1) 細池寺道上遺跡 第43次調査 (2014002)

所在地 新潟市秋葉区大安寺693番3 外  
調査の原因 市道大安寺第5号大間線改良工事  
(公共事業)

調査期間 平成26年6月23日～10月10日  
調査面積 557.28㎡  
調査担当 遠藤恭雄  
調査員 青木 誠・日聖祐輔(㈱イビック)  
処置 記録保存

**調査に至る経緯** 市道大安寺第5号大間線の拡幅工事に伴い、平成25年度に確認調査を実施した(第42次・2013176)。その結果を受けて、新潟市秋葉区建設課より「法」第94条の通知が提出され(平成26年3月10日付)、平成26年6月20日付新歴下第77号で着手報告を提出し、本発掘調査を実施した。

**位置と環境** 今回の調査は、遺跡北側にあたり、平成20年度に実施した調査(第26次・2008006)の2区に隣接する。幅2m、延長約300mの範囲を対象とした。標高は現水田面において8.2～8.5m前後で、南東から北西にかけて緩やかな下り勾配を有する。

**検出遺構** 第26次調査2区に隣接する部分を中心に、地表面から0.5～1.5mほどの深さで道路状遺構1条、井戸10基、溝29条、土坑15基、柱穴192基など計247基の遺構が検出された。溝や道路状遺構、建物の柱穴については、第26次調査2区と連続する位置で確認されている。

**出土遺物** 遺物包含層は水田耕作などの影響を受けて部分的な残存にとどまり、主に遺構の中から珠洲焼を中心とする中世遺物が出土している。年代的には、13世紀～14世紀を中心とするもので、検出された遺構も同時期が主体であると考えられる。また、平安時代の土師器・須恵器も少量出土している。

その他、井戸や溝の土壌を分析した結果、イネやコムギの種実やソバ・アブラナ科(ナタネ、ダイコン、ハクサイなど)の花粉が検出され、調査地周辺でこれらの植物が栽培されていたと推定される。

**まとめ** 第26次調査2区との溝や道路状遺構、建物の柱穴などの連続性を確認できた。また、調査地南端部でも、溝や土坑などの遺構が集中する区域があり、調査地南側にも集落範囲の広がる可能性がある。

調査地は、検出された道路状遺構の続きと建物跡や井戸などの集落の痕跡から、13～14世紀を主体に営まれた散在的な農村集落の一部にあたると思われる。

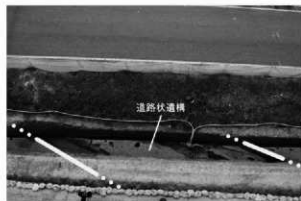
第43次調査の報告書は、平成26年度に刊行した「遠藤・青木ほか(2015)。(遠藤恭雄)



図1 調査位置図(1/10,000)



調査地全景(南東から)



道路状遺構(北東から)



第26次調査2区(下)・第43次調査(上) 合成写真(北東から)

## (2) 細池寺道上遺跡 第44次調査 (2014001)

所在地 新潟市秋葉区東金沢字家浦97番外  
調査の原因 両新地区ほ場整備事業（公共事業）  
調査期間 平成26年7月16日～12月26日  
調査面積 5547.6㎡  
調査担当 立木宏明  
調査員 牧野耕作、  
松井 智・長沼吉嗣・安達尊伸・  
南波 守（柳吉田建設）

免 費 記録保存

**調査に至る経緯** 新潟県地域振興局から平成26年4月10日付で本発掘調査の依頼文書が提出され、これを受けて圃場整備工事により保護層が確保できない範囲（2区1556.2㎡、3区2308.5㎡、4区1031.0㎡、5区9.4㎡）及び幅2mの用・排水路管理施設区域とこれに接したユニット埋設場所（1区642.5㎡）を対象とした調査を、平成26年7月16日付で報告し、本発掘調査を実施した。

**位置と環境** 細池寺道上遺跡は、新津丘陵の東側を流れる能代川と阿賀野川に挟まれた沖積地に立地する古代・中世の遺跡である。遺跡の広がりには南北1.7km・東西1.2kmにおよぶ。現地表面標高は9～10mである。

これまでも複数回の調査が行われており、古代・中世の遺物やそれらと同時代と考えられる遺構が確認されている〔立木2015(ほか)〕。

**概要と層序** 調査区は遺跡範囲中央に位置する1～3区と遺跡範囲南側の4・5区に分かれる（図1）。

**検出遺構** 遺構は掘立柱建物35棟、井戸48基、土坑183基、溝110条、道路状遺構2か所などに代表される計3249基が検出された。

1～3区の古代の遺構としては掘立柱建物が2区で3棟、3区で2棟確認された。その他にカマド状遺構8基、井戸・土坑・ピットなどをまとめて検出した。また、3区から幅4～5m程の旧河道が検出している。中世の遺構としては掘立柱建物が26棟確認され、その他に井戸・土坑・溝・道路状遺構・水田跡などが確認された。4区での古代の遺構としては土坑・溝などが、中世の遺構としては掘立柱建物が4棟、南北に走る幅3m程の道路状遺構、井戸側を伴い底面に径50cmの大型曲物を水溜めとした井戸などが検出された。

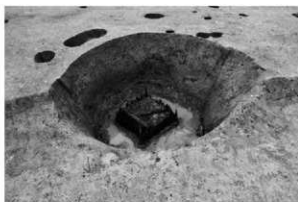
**出土遺物** 今回の本発掘調査では、コンテナケース404箱を数え、1～3区は古代では9世紀代の須恵器・土師器の食膳具・貯蔵具・煮炊具が多く出土した。旧河道中からは墨書土器37点が出土した。中世では13～14世紀代の珠洲焼大甕・壺・片口鉢が出土した。その他に鉄鍬などの鉄製品や砥石・磨石などの石製品が出土した。



図1 調査位置図 (1/10,000)



1・3区調査区全景（東から）



4区井戸 (SE215) 検出状況（南から）

4区では古代の須恵器・土師器の食膳具のほか中世の曲物・井戸側などの木製品が出土した。

**まとめ** 出土遺物の様相から平安時代から室町時代を通じて有力な集落であったと判断される。古代では旧河道を通じた内水面交通の拠点集落であり、中世においては計画的に溝で区画された有力集落と考えられる。報告書は平成28年度以降に刊行予定である。（立木宏明）

### (3) 手代山北遺跡 第4次調査 (2014003)

所在地 新潟市江南区手代山一丁目2528番10 外  
調査の原因 市道亀田南線道路改良工事 (公共事業)  
調査期間 平成26年12月19日～12月26日  
調査面積 62.97㎡  
調査担当 遠藤恭雄  
調査員 大谷祐司 (柳吉田建設)  
処置 記録保存

**調査に至る経緯** 手代山北遺跡は、市道亀田南線道路改良工事に伴う試掘調査 (第1次・2007192) で新たに発見された遺跡である。平成19 (1区 第2次・2007007、以下「1区」)・20 (2区 第3次調査・2008003、以下「2区」) 年度に同工事に伴う本発掘調査が行われており、古代の集落縁辺部に位置すると推測されている (朝岡ほか2009)。今回調査地は、1・2区調査実施時に未買収のため調査範囲から除外された部分で、1区北東側に隣接する (図2)。付近は1区調査において古代の遺構が比較的まとまって検出された地点であり、未調査部分に遺構の広がる可能性が高いことから本発掘調査が必要と判断された。新潟市土木部東部地域土木事務所より「法」第94条の通知が提出され (平成26年12月1日付)、平成26年12月18日付新歴B第172号の10で着手報告を提出し、本発掘調査を実施した。

**位置と環境** 手代山北遺跡は旧流路 (現亀田排水路) の自然堤防上に立地する (図1)。調査前は果樹園の一部となっており、現地標高は1.0m前後である。

**概要と基本層序** 道路工事により、耕作土はほとんど削平されていた。基本層序は3層に分けられる (図4)。I層は近世以降の客土で1・2区調査のII層に対応す



図1 調査位置図 (1/10,000)



調査地全景 (北から)

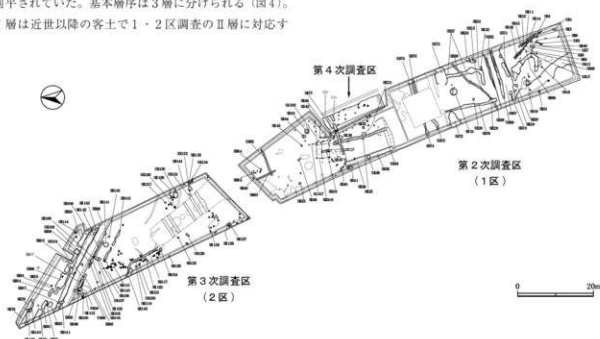


図2 第2～4次調査全体図 (1/1,000)

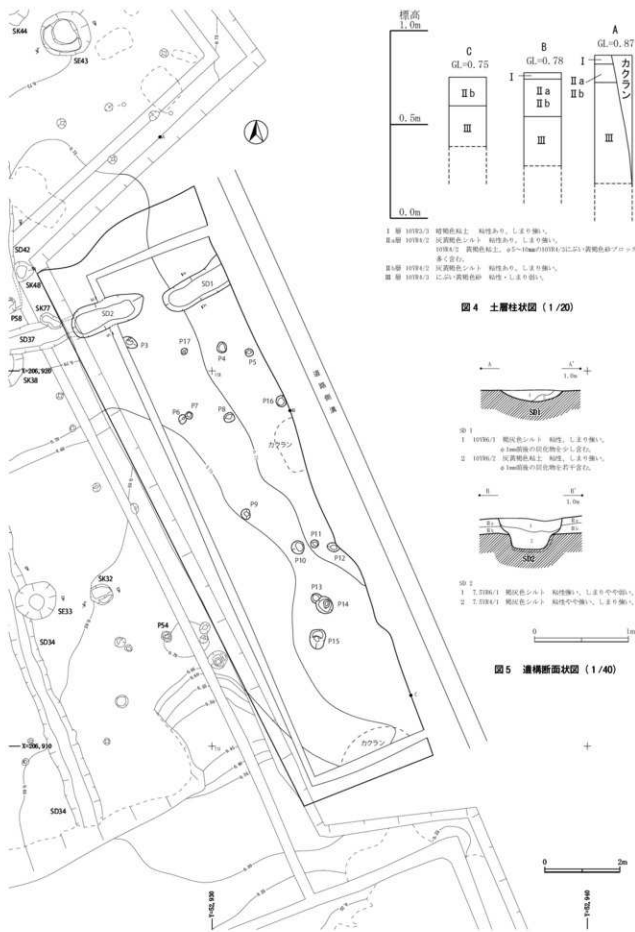


図3 遺構全体図 (1/100)

図4 土層柱状図 (1/20)

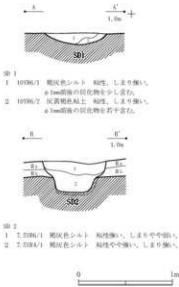


図5 遺構断面図 (1/40)

る。Ⅱ層上面は遺構検出面である。灰黄褐色シルトに黄褐色粘土が混じる層で1・2区調査Va層に対応する。Ⅲ層は黄褐色砂層で河川由来と考えられる。1・2区調査ではこれに対応する層は確認されていない。

**検出遺構** 検出した遺構は溝2条(SD1・2)、ピット15基である(図3・5)。溝はいずれも南西から北東方向に延び、SD1は北東端が調査区外へ続く。SD2は1区調査で確認されたSD37の続きである。ピットは柱痕を確認したものもある(P14・15)が、建物は確認できなかった。すべての遺構から、時期を判断できる遺物は出土していない。しかし、遺構の時期は形態・大きさ・覆土の様相からすべて近世以降の所産と推測した。な

お、覆土の分類については、1・2区調査に従った。SD2は第2次調査における出土遺物や切り合い関係から近世以降の所産と判断した。

**出土遺物** P14から出土した土師器細片1点のみである。時期や器種などは不明である。

**まとめ** 以上から今回調査においては、1区調査と連続する古代の遺構の広がりには確認されなかった。調査地付近では、南西から北東側に向かって緩やかに高くなる地形であることから、調査範囲外の北東側に微高地部および遺跡の主体が存在する可能性がある。

手代山北遺跡第4次調査については、本書の記述をもって正式報告とする。(遠藤恭雄)



着手前状況(南東から)



完掘状況(北西から)



SD1土層断面状況(南西から)



SD1完掘状況(南西から)



SD2土層断面状況(北東から)



SD2完掘状況(北東から)

### 3 整理作業の概要

平成26年度に文化財センターが実施した発掘調査等の整理作業一覧を調査番号順に表4に示した。整理作業のうち、主要なものについて以下に記述する。

#### (1) 試掘・確認調査、工事立会、本発掘調査の再整理事業

平成25年度の試掘・確認調査、工事立会に伴う遺物について収蔵のための再整理を行い、コンテナ約30箱を収蔵した。また、以前に新潟県教育委員会から譲与を受けた図面資料等についても台帳内容の確認を行った。

試掘・確認調査、工事立会は歴史文化課で実施し、出土遺物については文化財センターで水洗・注記・収蔵作業を行っている。

報告書刊行済みの調査資料については収蔵棚位置の確認作業を行い、管理台帳の整備を進めた。

平成24年度より実施している馬場屋敷遺跡等再整理では、下層出土の木製品実測図のトレス作業に着手した。(相澤裕子)

#### (2) 大沢谷内遺跡第19～21次調査の整理作業

**整理作業の概要と整理体制** 大沢谷内遺跡第19～21次調査は、一般国道403号小須戸田上バイパス整備工事に伴い平成23～25年度に実施した本発掘調査である。整理作業の対象区は8・9区で、第19次調査(平成23年度)：8・9区、第20次調査(平成24年度)：9区、第21次調

査(平成25年度)：8区である。なお、8・9区では、奈良・平安時代や鎌倉時代を中心とする時期の建物や畑・水田等が確認されている。遺物については、奈良・平安時代では円面硯や奈良三彩、越州窯系青磁、石帯、アスファルト、木製品、鎌倉時代では算や菓形、アスファルト、鉄や櫛の木製品等が出土している。

平成23・24年度に、発掘調査と並行して遺物の洗浄や注記、接合、記録類の基礎整理及び現場で採取した土壌水洗等を行っていたが、本報告書作成に係る本格的な整理作業は平成25・26年度の2か年で実施した。平成25年度は現場作業終了後に、8区を中心とした遺構図面の整理や、抽出遺物の実測図作成及びデジタルトレス、写真撮影等を行った。平成26年度は9区を中心とした遺構図面・遺物の整理作業を行い、遺構では、図面校正及びレイアウトを、遺物では、実測図作成・デジタルトレス、実測遺物の写真撮影、レイアウト等を行った(表5)。さらに報告書の原稿執筆、各種図面の版下作成や編集等を行った。なお、平成25・26年度の整理作業体制は表6のとおりである。

**整理作業の成果** 大沢谷内遺跡において、既刊の発掘調査報告書〔川上1989b、細野ほか2012、前山ほか2012〕に続く4冊目の報告書であるため、『大沢谷内遺跡Ⅳ 第19・20・21次調査』〔相田ほか2015a〕として平成27年3月に刊行した。(相田泰臣)

表4 平成26年度整理作業一覧

遺跡名・事業名	調査年度	調査番号	整理項目	整理内容	主な作業内容
神ノ原遺跡	19・22	200605・200704		複製品類・複製電子	遺物実測・報告書作成・収蔵作成・台帳作成
宇野沢遺跡	15・16	201302・201304	本発掘調査に伴う整理	複製品類・複製電子	報告書・図面作成
大沢谷内遺跡	18・9	201303・201305		複製品類・複製電子	報告書・図面作成
細野寺遺跡	20・22	200906・201003		複製品類・複製電子・複製写真・複製動画	複製品類・遺物実測・報告書作成・印刷発行・収蔵作成
細野寺遺跡	30・31	201105・201206	本発掘調査に伴う整理	複製品類・複製写真・複製写真・複製動画	複製品類・遺物実測・報告書作成・印刷発行・収蔵作成
細野寺遺跡	41・44	201304・201305		複製品類・複製写真・複製写真・複製動画	複製品類・遺物実測・報告書作成・印刷発行・収蔵作成
大沢谷内遺跡	19・20	201306・201301	本発掘調査に伴う整理	複製品類・複製写真・複製写真・複製動画	複製品類・遺物実測・報告書作成・印刷発行
大沢谷内遺跡	19・20	201305	本発掘調査に伴う整理	複製品類・複製写真・複製写真・複製動画	複製品類・遺物実測・報告書作成・印刷発行
下野田遺跡	6・8・9	201308・201305	本発掘調査に伴う整理	複製品類・複製写真・複製写真・複製動画	複製品類・遺物実測・報告書作成・印刷発行
細野寺遺跡	3	201303	本発掘調査に伴う整理	複製品類・複製写真・複製写真・複製動画	複製品類・遺物実測・報告書作成・印刷発行
細野寺遺跡	40	201402	本発掘調査に伴う整理	複製品類・複製写真・複製写真・複製動画	複製品類・遺物実測・報告書作成・印刷発行・収蔵作成
宇野沢遺跡	4	201403	本発掘調査に伴う整理	複製品類・複製写真・複製写真・複製動画	複製品類・遺物実測・報告書作成
文化財センター 発掘調査・確認調査 試掘調査・確認調査 工事立会・本発掘調査 大発掘調査	1・2・3	18030314	再整理	複製品類・複製写真・複製写真・複製動画	複製品類・遺物実測・報告書作成・印刷発行・収蔵作成

表5 平成25・26年度大沢谷内遺跡の主な整理作業の内容(8・9区)

年度	内容
平成25年度	第19次・20次・21次調査・遺物実測・遺物実測図作成・デジタルトレス
平成26年度	第19次・20次・21次調査・遺物実測・遺物実測図作成・デジタルトレス・遺物実測図・遺物実測図デジタルトレス編集

表6 平成25・26年度大沢谷内遺跡整理作業体制

年度	内容
平成25年度	調査主任 相田泰臣(発掘主任、研究員)
調査員	相田泰臣(発掘主任、研究員)
所管課・事務局	相田泰臣(発掘主任、研究員)
調査員	相田泰臣(発掘主任、研究員)
調査員	相田泰臣(発掘主任、研究員)
調査員	相田泰臣(発掘主任、研究員)
整理係職員	相田泰臣(発掘主任、研究員)
平成26年度	調査主任 相田泰臣(発掘主任、研究員)
調査員	相田泰臣(発掘主任、研究員)
所管課・事務局	相田泰臣(発掘主任、研究員)
調査員	相田泰臣(発掘主任、研究員)
調査員	相田泰臣(発掘主任、研究員)
調査員	相田泰臣(発掘主任、研究員)
整理係職員	相田泰臣(発掘主任、研究員)

## 4 資料の収蔵・保管

### (1) 収蔵方針

文化財センターでは、新潟市内で発掘調査によって出土した遺物や、写真・図面などの記録類を一括集中管理している。なお、文化財センター開館以前の発掘調査によらない考古資料や個人寄贈・寄託資料に関しては、各区の博物館や資料館などで保管・管理が行われている。

### (2) 収蔵・保管施設

収蔵・保管施設は、埋蔵文化財収蔵庫・特別収蔵庫1(木製品)・2(金属製品)・資料収蔵庫・図書室・民俗資料収蔵庫がある。民俗資料収蔵庫は(6)に記載した。

**埋蔵文化財収蔵庫** 土器や石器などの比較的周辺の環境による影響で劣化のしづらい資料を収蔵している。平成27年3月末時点で11,717箱収蔵している。

**特別収蔵庫1・2** 保存処理が完了した木製品や金属製品などを収蔵している。平成27年3月末時点で特別収蔵庫1に649箱(木製品)、特別収蔵庫2に189箱(金属製品101箱、骨・骨製品88箱)収蔵している。

**資料収蔵庫** 発掘調査の図面や写真フィルム・CD・DVDなどの記録類を収蔵している。

**図書室** III 6(6)に記載した。

### (3) 発掘調査番号

遺物や調査記録類をまとめるために、新潟市内における全ての発掘調査及び工事立会に対し調査番号を付けている。

### (4) 再整理作業

文化財センター開館以前の資料について、平成26年度も継続して作業を継続中である。

### (5) 収蔵資料のデジタル化及びデータベース化

保存と活用のために、遺構に関しては遺構台帳を作成し、図面や写真等の記録類に関しても紙やフィルムなどのアナログデータのデジタル化を実施している。

発掘調査図面は、殆どが業者に委託したデジタルデータ(CADデータ)が存在する。

写真に関しては、発掘調査終了後速やかにデジタル化を行っており、データ形式も汎用性を考えてtifデータとしている。

発掘調査報告書に関しては、印刷業者に報告書を入稿する前もしくはその後pdfデータを作成している。

収蔵図書に関しても書誌データ(CSV形式)を継続して登録している。

### (6) 民俗資料等

民俗資料収蔵庫には、農具・漁具・生活用具等の民具を中心に収蔵している。非常勤職員を雇用し、整理作

業や台帳作成を行っている。平成26年度も所蔵数に変化はなく、約3,000件が収蔵されている。また、平成26年度には民俗資料収蔵庫において防虫処理(ブンガノン散布)を行った。

その他、文化財センターに隣接する旧木場小学校校舎は、「大形民具収蔵庫」として利用され、敷地・建物を文化財センターが、収蔵品の民俗資料は歴史文化課・新潟市歴史博物館が管理している。

### (7) 埋蔵文化財情報管理システム

埋蔵文化財の管理と活用、デジタル化した記録類のデータ管理を目的として、「埋蔵文化財情報管理システム」を活用している。遺跡管理のための地理情報管理システム(GIS)と発掘調査記録や収蔵品管理のためのデータベースの機能を併せ持ったシステムである。このシステムは、新潟市役所の統合型GISのサブシステムとして構築されている。

平成25年度に新潟市役所のGeoBase版統合型GISのOSサポート期間が平成27年度に満了となることに伴い、GeognoSIS版統合型GISに新潟市役所全庁のシステムを統合することが決定した。そこで、「埋蔵文化財情報管理システム」を含む全てのサブシステムについて再構築を行うこととなった。そのため、平成26年度は平成27年度5月にシステムの運用開始を目指し、サブシステムの設計作業が行われた。(金田拓也)



特別収蔵庫1 収蔵状況



特別収蔵庫2 収蔵状況

## 5 資料の公開・活用

### (1) 展示

『新潟市文化財センター条例』の設置目的にある「埋蔵文化財及び有形民俗文化財を保存し、及びこれらの活用を図る」主な事業の一つとして埋蔵文化財・有形民俗文化財の展示を行っている。

文化財センターの展示は以下のような方針で構成されている。文化財センターには市内から出土した埋蔵文化財が大量に所蔵されており、これからも毎年行う発掘調査で新資料が増えるので、博物館のようにストーリー性を持った固定的な展示ではなく、展示品・グラフィックパネル表に自ら容易に変更できるようにした。そして、平成26年度からは、年4回の企画展を開催することとした。企画展の内容については、市内8区の遺跡を順次紹介することを柱とし、今年度は西区と西蒲区について行い次年度以降に他の区を行うことにした。

**展示室1** 導入展示室兼展示室2の前室としての機能を有している。「歴史を伝える出土品の世界」と題して、市内で出土した縄文時代から近世の土器陶磁器、縄文時代から近世の木製品を壁一面に展示している。また、緒立遺跡出土の網代や御井戸遺跡の木柱などの大型木製品、市内出土の木簡レブリカ、近世新潟町出土の陶磁器をケースで展示している。

**展示室2** 大きく3つの展示に分かれている。「新潟市文化財センターの活動」では、文化財センターが行っている発掘調査現場を再現した西区四十石遺跡のジオラマと、発掘調査・整理作業で使用する器材を展示している。また、4面のウォールケースでは「遺跡が語る新潟市の歴史」と題して旧石器時代から江戸時代までの通史展示を行っている。一般になじみの薄い原始・古代・中世・近世等とせず、旧石器時代、縄文時代、弥生時代、古墳時代、飛鳥・奈良・平安時代、鎌倉・南北朝・室町時代、安土・桃山・江戸時代としている。大きく変更があったところとしては、弥生時代前期の資料を緒立遺跡

から西郷遺跡へと変更したことである。中央は企画展示コーナーで、平成26年度は4回の企画展を開催した(表7)。各展示詳細については次頁以降に記載する。なお、この企画展の開催によりこれまで企画展示コーナーで行ってきた「交流 交じり合う文化」を大型ケース2つに規模を縮小して展示することにした。

**エントランス** エントランスでは、大形品の展示のほか、連報性・話題性のある出土品の展示を不定期で行っている。平成26年度には、復元整備が完了し全面オープンさせた古津八幡山古墳についてのパネル展示を行った。連報展示としては平成26年度に調査を行った細池守道土遺跡と下郷南遺跡の展示を行った。また、行燈型ケースでは平成25年度の海場がり縄文土器に加え、平成26年度には新潟市の井村氏が発見した海場がりの弥生土器(『年報』第2号掲載資料(渡邊2015))を借用して展示を行った。平成27年3月には、大沢谷内遺跡のアスファルト関連遺物とアスファルト精製実験(『年報』第2号概要掲載(今井2015))について紹介した。

来館者からは、企画展示が行われるようになってよかったとの声が多く聞かれる。文化財センターとしても、これまで展示されてこなかった収蔵資料を公開する機会が得られたこと、職員の展示能力の向上など多くのメリットがあった。(今井さやか)



エントランスパネル展示(古津八幡山古墳)

表7 平成26年度文化財センター企画展一覧

企画展名	会期	企画期間	入館者数 (人)	展示種別(イベント)			参加者数 (人)
				演目 イベント名	年月日	講師	
歴史展 弥生遺跡・緒立遺跡展 ～平野に開いた弥生文化の足跡～	2014.7.1(火) ～6.1(日)	特別企画	3,181	本誌の古代分冊 ～遺跡発掘現場 現場遺跡～	2014.4.29(火・祝日)	坂本幸治 山梨大学文学部教授	72
新潟県最古の弥生文化 緒立遺跡展 緒立遺跡と2000年分冊展の公開 ～縄文の終末と弥生の始まりを求めて～	2014.6.3(火) ～8.3(日)	連携企画	2,654	緒立遺跡の時代 ～縄文時代の終末から弥生へ～ 「緒立遺跡の縄文から弥生へ」 ～2013～2014年の発掘調査と 新潟県立歴史博物館のこころ	2014.6.15(日)	石川直高志 (山梨大学文学部教授) 渡邊明和 大塚 哲 資料研究 (東京農業大学文学部助教授)	60
出土品を巧み再現	2014.9.5(火) ～11.30(日)	今井さやか 年功企画	3,790	出土品を巧み再現	2014.9.10(日)	東京農業大学文学部助教授	15
古代遺跡の多面性 ～発掘に隠れた自然と人々の営み～	2014.12.2(火) ～2015.3.29(日)	渡辺明和 藤田肇子	3,014	文化財センター社会連携 商業展の古代	2014.9.21(日) 2014.12.14(日)	今井さやか 藤田肇子 (山梨県商経局文化財調査係事務室 調査係主任)	45
				戦国展での展示	2015.3.15(日)	高橋 一 (山梨県立歴史博物館教員)	51



(2) 企画展1「**県史跡 的場遺跡・緒立遺跡展**  
—平野に造られた古墳と古代の役所—」

会 期 平成26年4月1日(火)～6月1日(日)  
担 当 相田泰臣  
入 館 者 数 3,181人

**展示概要** 新潟市西区に所在するの場遺跡・緒立遺跡は、平成6年に県の史跡に指定され、平成26年度で指定から20周年を迎えた。本企画展1は、その節目を記念して、的場遺跡・緒立遺跡のこれまでの歩みを振り返るとともに、古墳時代から平安時代の資料をとおして新潟市の歴史を探ることを目的として企画した。また、両遺跡は文化財センターから約3kmと近く、企画展と現地を一緒に見学してもらえるという利点もあった。

的場遺跡と緒立遺跡は近い距離関係にあることや出土遺物の内容などから、奈良・平安時代には、一連の遺跡と考えられ、どちらも漁撈に関係する官衙関連遺跡として相互に補完するような関係があったと考えられている。

平成8年、的場遺跡の奈良・平安時代の主要遺物5,585点は県指定文化財になったが、今回の企画展は、的場遺跡出土遺物として最初のまとまった展示となった。

**展示構成**

- 1) 的場・緒立遺跡の歩みと関連文献
- 2) 的場・緒立遺跡の調査概要と遺物
- 3) 緒立八幡宮古墳の調査概要と遺物
- 4) 的場・緒立遺跡の概要と遺物
- 5) 木簡・墨書土器に残された文字資料
- 6) 役所と祭祀関係遺物
- 7) サケ漁と関係遺物
- 8) 各種生産関係遺物

**主要展示** 展示室2に入ってすぐの目立つ位置に展示した昭和27年に発見された緒立八幡宮古墳の壙は、緒立遺跡の発見の契機ともなった資料である。

的場遺跡出土の「秋(杉)人鮓」「欽食」と書かれた木簡は、前者が杉人なる人物が納めたサケに付けられていた荷札、後者が「欽(東北地方日本海側の蝦夷)をでもした食料を意味すると考えられている。緒立遺跡では「題一 題六 水戸四 〇二 酒杯九十」など器名や数量を記した木簡があり、定量出土した大形須恵器甕は水産物の貯蔵や加工に使用された可能性が指摘されている。

また、墨書土器では「乙長」「廣成」「秋庭女」などの人名や、「酒屋」といった施設名が確認できる。

的場遺跡出土の灰軸・緑軸陶器、篠原産須恵器、内外面黒色処理された甕、多彩された杯や暗土土器、木製の

櫛・扇、黒漆を塗った木杵、帯金具、太刀金具、鈴等は、当遺跡が公的な機能を有した遺跡であることを示す。

的場遺跡では、調査区の北側と西側の湿地から葦草や人形、舟形、馬形、刀形などの形代が多く出土し、水辺の祭祀を行っていたと考えられる。他にも、建物の柱の穴から20枚ままと出て出土した和同開珎は、地鎮の祭祀に使用されたと推測される。

漁撈関連の遺物では、土製の鍾と木製の浮子が最も多く、ほかに網針などがある。木製の浮子は、長さ25～28cmの大形品(約15点)と、長さ7～15cmの小形品(約80点)があり、大形品はサケなど大きい魚に使用したと考えられている。土製の鍾は管状のもので、長さ5～11cm、重さ30～200gの大形品(約300点)と、長さ2～6cm、重さ2～20gの小形品(約3,800点)があり、大形

新潟市文化財センター 企画展

県史跡

**的場遺跡・緒立遺跡展**

—平野に造られた古墳と古代の役所—

平成26年 **4月1日(火)～6月1日(日)**

開催時間 9:00～17:00  
休館日 休館日 4月29日(土)・5月11日(日)・5月17日(日)  
入館料/観覧料 中学生・高校生無料・児童500円

4月29日(土) 9:00～18:00  
『水辺の古代官衙遺跡—一連漁撈関係 的場遺跡—』  
講師 堤井博典氏(新潟大学文学部文化財史料科助教授)  
会場 文化財センター1F 展示室2

文化財センター 新潟市西区 電話 025-224-0400

ポスター

新潟市文化財センター 企画展

県史跡 的場遺跡・緒立遺跡展

—平野に造られた古墳と古代の役所—

開催時間 9:00～17:00  
休館日 休館日 4月29日(土)・5月11日(日)・5月17日(日)  
入館料/観覧料 中学生・高校生無料・児童500円

4月29日(土) 9:00～18:00  
『水辺の古代官衙遺跡—一連漁撈関係 的場遺跡—』  
講師 堤井博典氏(新潟大学文学部文化財史料科助教授)  
会場 文化財センター1F 展示室2

文化財センター 新潟市西区 電話 025-224-0400

パンフレット

品は曳網・巻網に使用されたと推測されている。また、サケ・ボラ・スズキなどの骨や貝殻の他、製塩土器が出土しており、塩生産も行っていたことが分かる。

**関連講演会** 企画展の関連講演会を1回開催した。

**演 目** 水辺の古代官衙遺跡  
 -流通漁業基地 的場遺跡-  
**講 師** 坂井秀弥氏 (奈良大学文学部教授)  
**日 時** 平成26年4月29日(火・祝日)  
 午後1時30分～午後3時

**参加者数** 72人

**入館者の声** 展示遺物の隣にある「的場遺跡」などのキャプションでどの遺跡から出土したかは分かるが、時

代も書かれているとより分かり易く、その時代背景が想像できる、といった声があった。確かに解説パネルだけではなく、遺物のキャプションにも時代を記入することで、理解がより深まると考えられる。今後の企画展で改善していきたい。

**まとめ** 関連講演会は、的場・緒立遺跡の発掘調査や実務に実際携われ、両遺跡の研究・論考も多い坂井秀弥氏にお願いした。的場・緒立遺跡のこれまでの歩みや、調査から発跡までの裏話、両遺跡の性格や位置づけまで、全国的視野からご講演頂いた。講演終了後には、講師による展示遺物の解説を行い、参加者に大変好評であった。講演直後に実際の遺物を見学することで、遺跡の性格を推定した根拠等について知ることができ、遺跡に対する理解がより深まったと考える。

会期中、緒立遺跡や的場遺跡へ実際に行ったという方は一定数いたようであるが、企画展の一環として、職員が同行して現地で説明するなどの企画も行えば良かったと感じた。また、パンフレットは一般向けのものとは別に小学生用のものも作成して配布した。解説パネルも含め、分かり易い文章を心掛けたが、専門用語などを分かりやすく簡潔な文章でまとめることの難しさを痛感した。文章や表現方法の改善は大きな課題である。

(相田泰臣)



展示風景 (展示室2)



展示状況 (6 役所と祭祀関係遺物)



展示状況 (7 サケ漁と関係遺物)



関連講演会風景 (水辺の古代官衙遺跡)



関連講演会風景 (展示解説)

(3) 企画展2 「新潟県最古の弥生文化 緒立遺跡展  
緒立遺跡と黒埼地方史研究会の活動

—縄文の終末と弥生の始まりを求めて—

会 期 平成26年6月3日(火)～8月3日(日)

担 当 渡邊朋和

入館者数 2,406人

**展示概要** 西区緒立遺跡の縄文時代～弥生時代の移行期と、現在の新潟市内で教育委員会が調査主体となつて行われた最古の発掘調査である1957(昭和32)・1958(昭和33)年の調査を主導した黒埼地方史研究会の活動についての展示を行った。また、平成17年の市町村合併により、旧豊栄市と旧黒埼町が新潟市になったことにより、縄文時代晩期終末の「鳥屋式」と弥生時代初頭の「緒立式」を一緒に展示する初めての機会になった。

**展示構成**

- 1) 緒立遺跡の発見
- 2) 黒埼村教育委員会・黒埼地方史研究会による発掘調査
- 3) 東日本における縄文時代～弥生時代の研究
- 4) 「緒立式」-「石器時代」第9号掲載土器-
- 5) 縄文土器と弥生土器-「鳥屋式」と「緒立式」-
- 6) 信仰と生活
- 7) 黒埼地方史研究会の活動
- 8) 緒立遺跡・的場遺跡の今昔-空中写真で見る今昔-
- 9) 再葬墓の成立-大形壺形土器の世界-  
参考パネル展示 村尻遺跡・猫山遺跡

**主要展示**

- 1) 緒立八幡宮古墳出土壺形土器(古墳時代)
- 2) 1957・1958年の発掘調査写真・図面・作業日誌、縄文土器「緒立B群」
- 3) 4) 「緒立式」-「石器時代」第9号掲載土器の検証
- 5) 北区鳥屋遺跡の「鳥屋式」(「石器時代」第4号他)
- 6) 緒立遺跡石器・穿孔人骨・抜歯人骨・土製品他
- 7) 黒埼地方史研究会の活動(発掘調査記録他)
- 8) 空中写真で見る今昔地図・空中写真
- 9) 再葬墓の成立-大形壺形土器の世界-  
参考パネル展示 村尻遺跡・猫山遺跡

**関連講演会**

演 目 緒立遺跡の時代  
-新潟界隈の縄文から弥生へ-

講 師 石川日出志氏(明治大学文学部教授)

日 時 平成26年6月15日(日)

参加者数 60人

講演会の前に、渡邊朋和「緒立遺跡の発掘調査に参加して-1979～1981年の発掘調査-」の報告と、黒埼地方



関連講演会風景(緒立遺跡の時代)



関連講演会風景(黒埼地方史研究会のこと)



展示風景(エントランス)



展示風景(展示室2)

史研究会の会員であった八木稔氏に「黒埼地方史研究会のこと」として1957・1958年の発掘調査の会の経緯などについてお話しいただいた。

**入館者の声** エントランスに発掘調査のスナップ写真をA4サイズにして展示したところ、調査参加者の方から懐かしいという意見が寄せられた。

**展示調査成果** 企画展では弥生時代の初頭の遺物がまわって出土した緒立B遺跡を中心とし、1957・1958年、1979（昭和54）・1980（昭和55）年の発掘調査出土品を中心に展示を行った。また、磯崎正彦氏のご遺族から黒埼町（当時）に寄贈された資料や、青木宏氏のご遺族から新潟市に寄贈された資料のうち、「石器時代」第9号の草履や、これまで知られていなかった1957・1958年の発掘調査写真や図面類、黒埼地方史研究会関係資料などの展示も行うことができた。

#### (a) 緒立遺跡の概要

遺跡は新潟市西区黒鳥・緒立流通一丁目・緒立流通二丁目に所在する。西川右岸、低湿地の中の小砂丘上にある。縄文時代晩期、弥生時代前期～中期、古墳時代前期、奈良・平安時代、鎌倉・室町時代の遺構・遺物が検出されている。

緒立遺跡は、1952（昭和27）年に緒立八幡宮（新潟市西区黒鳥）の社殿改修工事の際に口頭部の欠損する完形の大型竈が出土したことを契機に発見された。2014（平成26）年までに10回以上の発掘調査が行われており、新潟市内では古くから研究が行われている遺跡の一つである。現在では、地点によってA・B・Cの3地点に分けられており、遺跡発見のきっかけとなった緒立八幡宮古墳のある緒立A遺跡は県指定史跡となっている。

#### (b) 発掘調査の経緯と意義

緒立遺跡は、黒埼村教育委員会、鷲尾年秀・坂倉伝三郎・青木宏氏を中心とした黒埼地方史研究会（黒埼村郷土史研究会）により1957年11月と1958年8月に発掘調査が行われた。発掘調査には、永峯光一・上原甲子郎・磯崎正彦氏の指導の下、黒埼地方史研究会や黒埼中学校歴史クラブ生徒・黒埼青年団が参加した。この緒立遺跡の調査は、教育委員会が調査主体となって行われた新潟市内で最も古い発掘調査であり、郷土の歴史を明らかにしたいという黒埼地方史研究会や村民の熱意により村当局が発掘調査費用を予算化して行われた画期的なものである。

発掘調査の成果は、「黒埼村郷土史研究会編1958『緒立遺跡』」と「黒埼地方史研究会・黒埼中学校歴史クラブ編集1959『緒立 黒埼村緒立遺跡発掘調査中間報告』黒埼村教育委員会・黒埼村公民館発行」の2冊が謄写版

（ガリ版刷）で作られた村民に広く配布された（坂井2000）。

また、「上原甲子郎・永峯光一・磯崎正彦1968『越後緒立遺跡の古式土師器』『考古学雑誌』第52巻第3号」、[磯崎正彦・上原甲子郎1969『亀ヶ岡文化の外郭圏における終末期の土器型式―新潟県・緒立遺跡の土器をめぐる―』『石器時代』第9号]として考古学専門雑誌にも報告され、発掘調査成果は学界でも注目された。なかでも、「石器時代」第9号で報告された土器群は、磯崎正彦氏らによって縄文時代晩期終末期の土器型式「緒立式」と命名され、縄文時代終末期の研究に一石を投じることになった。

その後、1979・1980年の県道建設に伴う発掘調査で、東海系や北陸系の播磨土器・糸置土器（弥生土器）が共存したことにより、「緒立式」土器は弥生土器と認識されることになり、このことがきっかけで、東日本の当該期の研究が大きく進展することになる（中村1988）。

#### (c) 1957・1958年調査箇所の特徴

これまで、1957・1958年の調査箇所が明確ではなかったが、青木宏氏の寄贈資料にトレンチ設定図が発見されたので、黒埼町都市計画図（平成3年10月作図、平成7年12月修正 2千5百分の1）と1979・1980年のグリッド設定図に重ね合わせる事が可能となった。水田・畑・水路等と合わせているので正確な発掘調査箇所は不明であるが、県道新潟―燕瀬特殊改良工事に伴う発掘調査地点の東側に隣接する場所だったと推察された。両者の遺物が接合するものや明らかに同一個体と考えられる個体があり、このことから調査区の一部が重複していることを裏付けている。

#### (d) 『石器時代』9号報告遺物の検証

1957年・1958年調査資料で現存する土器については黒埼町史編纂時点で作れる限り図化作業を行ったが、『石器時代』第9号報告資料との同定作業を行うことができなかった。そこで、企画展にあたり、『石器時代』第9号報告資料と町史掲載資料との同定作業を行い、現存する遺物と石器時代掲載実測図を併せて展示した。

両者の対応関係は以下の通りである。石器時代№1・町史№87（以下、石器時代№・町史№省略）、4・90、6・88、7・141?、9・85、10・92、11・168?、16・207、17・84?、21・115、22・91、23・135、25・26・353、28・219、29・223・224、31・220、32・218、36・60、38・228、39・229?、44・65、45・230、46・238、51・232、59・98、65・94・95、67・107?、68・104、100・316・698~707、69・304、71・110?、72・109?、73・307、76・44、77・41、78・42、79・43、80・40、85・111、89・86、90・125、92・116、93・214、94・

225、95・479、97・100。

『石器時代』第9号では条痕文壺(町史325)や磨消縄文のある破片(町史187・188等)が報告されていないが、縄文時代晩期終末の「緒立式」設定に配慮したためであろう。いずれにしても、1957・1958年調査資料は1979・1980年調査資料と比較して、大形壺が少ないこと、磨消縄文のある土器が少ないという傾向は見受けられる。

(e) 1979・1980年調査の土坑・大形壺・焼人骨

1979・1980年の緒立B遺跡の発掘調査区南側からまともって検出された土坑群周辺からは、焼人骨片や大形壺・人面付土器などの遺物が出土している。当該期の再葬墓では土坑の中から大形壺がまともって出土することが一般的であるが、緒立遺跡では土坑の中から大形壺が出土するような状況は見られなかった。出土状況から土坑の上部に大形壺が置かれていた可能性が高いものと考えられる。

縄文時代晩期終末の北区鳥屋遺跡3号土坑でも土坑上部に大形壺が置かれており、似た状況を示している。また、福島県伊達市根古屋遺跡の再葬墓からも焼けた人骨や多数の土坑が検出されている。再葬墓の埋葬工程の一部の可能性もある(岡はか1980)。

1957・1958年の発掘調査では大形壺はほとんど見つからない。同じ遺跡の中でも、場所(調査区)によって遺跡の性格が異なることによるものと考えられる。1957・1958年の調査区は居住域、1979・1980年の調査区は墓域から居住域にかけて発掘調査を行ったものと推察される。

また、再葬墓では一般的ではない鉢などの小形土器も多くあり、居住域が近くにあった可能性も高いと思われるが、竪穴住居や掘立柱建物などの遺構も確認されていない。砂丘上に立地する遺跡のために、季節風などの影響により削平を受けた可能性もある。そのために遺構の検出が難しくなったことも考えられる。

(f) 「緒立式」土器

緒立遺跡の土器は、磯崎正彦氏によって「緒立式」土器として設定されることになるが、当初、縄文土器とするか弥生土器とするか、その位置づけは揺れ動いている。

磯崎氏の恩師である山内清男氏が1961(昭和36)年京都大学に提出した学位請求論文[山内清男1979『日本先史土器の縄紋』先史考古学会]では、「直前段反撚RRL P15「近年新潟方面の晩期末の一形式」[5A下右]に発見された。」として、緒立遺跡出土土器の写真が掲載されている。同じく山内氏や磯崎氏が執筆した[山内清男・佐藤達夫・江坂輝弥・磯崎正彦 1964『日本原始美術1』講談社]の編年表の弥生時代の欄(波線の下)

には「(緒立1) / (猫山)」と記載され、弥生土器と考えていたようである。同書では阿賀野市猫山遺跡の土器は参考写真図版で「弥生式」と記載されており、弥生土器と認識されていたことは明確である。猫山遺跡の土器は[上原甲子郎・磯崎正彦 1968『北陸地方II』「弥生式土器集成 本編2」]にも北陸地方IIの第1様式土器「猫山式」として記載されている。

その後、最終的には[磯崎正彦・上原甲子郎 1969『亀ヶ岡文化の外郭圏における終末期の土器型式-新潟県・緒立遺跡の土器をめぐって-』『石器時代』第9号]では、縄文時代晩期終末の土器型式「緒立式」とされる。この辺の明確な理由はわからないが、猫山遺跡のように弥生時代の再葬墓では大形壺が多く出土するのに対し、緒立遺跡では大形壺が少なかったことから、最終的に縄文時代の土器と考えたのではないかと推測される。

磯崎氏が、「緒立式」土器を縄文時代終末期に位置づけたことで、新潟県内だけでなく東日本の縄文時代晩期終末期から弥生時代初頭の土器編年研究に多大な影響を及ぼすことになる。(波邊明和)



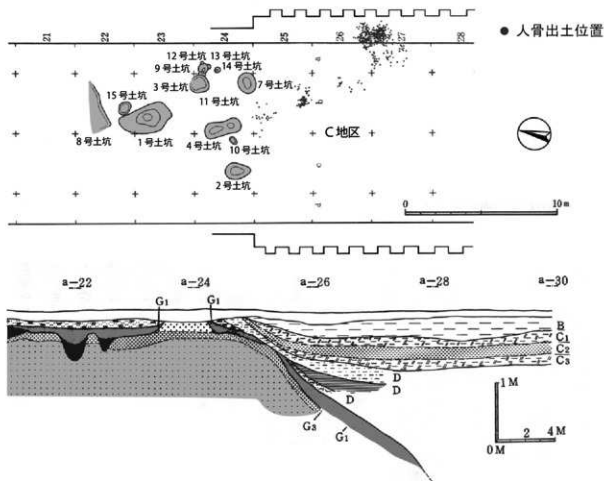
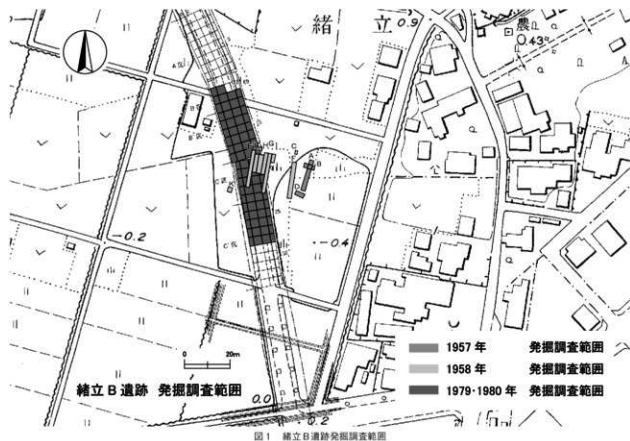
発掘調査風景 (1958年撮影)



縄文時代の配石遺構 (1958年撮影)

### III

#### 文化財センターの事業



**(4) 企画展3 「出土品を残す技術」**

会 期 平成26年8月5日(火)～11月30日(日)

担 当 今井さやか・本間敏則

入館者数 3,786人

**展示概要** 文化財センターの業務である出土品を残す技術について紹介する企画展を開催した。土器・金属製品・木製品と種類ごとに劣化のメカニズムや保存方法についてパネルと遺物で展示した。特に土器の本物の部分と充填して補彩した部分を観覧者が直接触れる「さわって確かめるコーナー」が好評であった。

**展示構成**

- 1) 土器の復元
- 2) 復元された場所と本物の場所をさわって確かめる
- 3) 金属製品の保存処理
- 4) 木製品の保存処理
- 5) 出土品から情報を引き出す

**主要展示** 1の土器の復元では炊飯器の深鉢について、復元過程を4コママンガのようにしたパネルで展示した。2では中田遺跡の古墳時代土師器壺3点を土器の本物の部分と復元された部分との違いを触って確かめられるようカバーをかけない状態で展示した。3では金属製品の保存処理に使う道具と薬品類、山本戸遺跡の青銅製品と鉄製品を展示した。4では和納跡跡、小坂居付遺跡の田下駄と漆器を例に保存処理をせず自然乾燥した木製品と保存処理をした木製品を比較展示したほか、小坂居付遺跡の田下駄や人形などの木製品を展示した。また、1本の木を3分割しPEG・トレハロースそれぞれで処理をしたものと自然乾燥したものを展示し、ここでも触ったり持って重さを感じられる展示とした。5では川根遺跡の烏帽子について漆膜の顕微鏡写真を展示することによって烏帽子の芯材がわかることを紹介した。

**関連講演会** 企画展の関連講演会と関連イベントをそれぞれ1回開催した。

演 目 出土品を残す技術

講 師 米村祥史氏

(東北芸術工科大学芸術学部准教授)

日 時 平成26年8月10日(日)

午後1時30分～午後3時

参加者数 15人

遺跡出土の保存処理について、木製品と金属製品それぞれの方法とメカニズムについて解説していただいた。また、保存処理の歴史は浅く、まだ研究がはじまって50年しか経っていない分野だということ、特に保存処理後の経年劣化については今後の大きな課題だという問題提起がなされた。

イベント 文化財センター仕事体験

講 師 今井さやか

日 時 平成27年9月21日(日)

午後1時30分～午後3時

参加者数 10人

文化財センターの仕事のうち、土器の洗浄と接合・充填作業を体験した。接合・充填作業についてはあらかじめ作成して割った復元土器を用いた。特に接合・充填作業は難しかったようで、展示されている土器の多くが美しく接合されていることに、感心していた。

**入館者の声** 「出土品を残す作業・技術・大変さばかり、今後展示品の見方が変わると思う。」「甘味料であるトレハロースが保存処理に使われていると知って驚いた。」「(遺物に直接)触れられる体験がとてよもよかった。」「

まとめ 遺跡そのものでなく、文化財センターの仕事に焦点をあてた展示であったが、興味を持ってもらえたと感じた。特に触って確かめるコーナーが好評であり、今後も遺物の盗難や破損の危険が少ない展示状況であれば、取り入れていきたいと感じた。

その一方で、木製品や金属製品の「盤」や「刀子」の用語がわかりにくくもつと平易な表現にして欲しいと言った声もあり、今後検討する必要があると感じた。

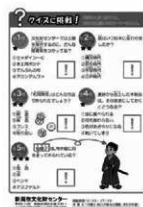
(今井さやか)



チラシ(表)



パンフレット（一般向け）



パンフレット（小学生向け）



展示風景（展示室2）



触ってみようコーナー



関連講演会風景（出土品を残す技術）



関連イベント風景（文化財センター仕事体験）



## (5) 企画展4 「古代遺跡の多様性

～変化に富んだ自然と人々の営み～

会 期 平成26年12月2日(火)

～平成27年3月29日(日)

担 当 前山精明・龍田優子

入館者数 3,014人

**展示概要** 西蒲区に分布する飛鳥時代から平安時代の遺跡を、平野・丘陵・砂丘・海辺という立地で分け、当時の暮らしに焦点をあてて紹介した企画展である。出土した古代の土器に含まれる様々な情報から、今までにない方法で土器の作られた場所や環境などを推測し展示した。そして、豊かな自然環境を背景にした西蒲区の古代の魅力的な姿を浮き上がらせた。

**展示構成**

- 1) 各エリアから出土した主要な古代土器
- 2) 湖底に沈んだ飛鳥時代の遺跡
- 3) 沖積地の営み
- 4) 丘陵上の営み
- 5) 内陸砂丘の営み
- 6) 海辺の営み
- 7) 土器からの情報① 土師器に混じる小さな石
- 8) 土器からの情報② 土師の正体を探る

**主要展示** 1では大島橋遺跡・下新田遺跡・重稲場遺跡・下稲場遺跡などから出土した須恵器・土師器と日本海から揚がった須恵器、2では鑑潟湖底のボーリングデータと大島橋遺跡出土の土製品、3では下新田遺跡・林付遺跡の遺構・遺物と鑑潟の民俗、4では峰岡上町遺跡の遺構・遺物と沖積地の樹木利用、5では下稲場遺跡の遺物と四石遺跡から出土した様子、6では銭原遺跡・うぶすめ遺跡・沙山遺跡の遺物と海辺の地層に残る津波の痕跡、7では新潟市周辺から採取した川砂と土師器の混和材、8では下新田遺跡の土器に残る種実や木葉の圧痕とシリコンを用いて作成したレプリカを紹介した。

**関連講演会** 企画展の関連講演会を2回開催した。

演 目 西蒲区の古代

講 師 春日真実氏

((公財)新潟県歴史文化財調査事業団調査課長代理)

日 時 平成26年12月14日(日)

午後1時30分～午後3時

参加者数 45人

西蒲区の飛鳥時代から平安時代を中心として、発掘調査などで見つかった生活の痕跡や出土品などから当時の暮らしを語る講演会。当日の資料では、西蒲区を含む周辺地域の古代遺跡から出土した土器の最新の編年案が示された。

演 目 低湿地での暮らし

講 師 中島榮一氏(湯東歴史民俗資料館館長)

日 時 平成27年3月15日(日)

午後1時30分～午後3時

参加者数 51人

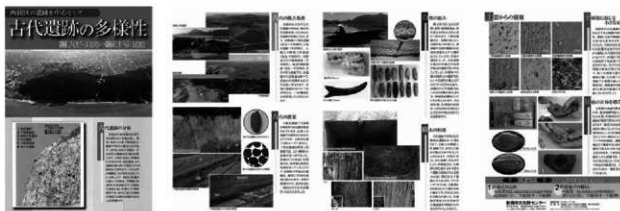
越後平野にかつてあった鑑潟の民俗事例を基に、周辺の古代遺跡とも関連づけながら古代の低湿地での暮らしを語る講演会。明治時代に描かれた鑑潟で舟上遊びを楽しむ日本画や、鑑潟干拓工事の状況を記録した映像を交えた分かりやすい講演であった。

**入館者の声** 「昭和の鑑潟での漁と同じような形の道具が千年以上も昔の漁でも使われていたと知った。昔の人の知恵はすごいと思った。」「西蒲区に焦点をあて、県内でよく取り上げられる縄文や古墳時代ではなく古代(飛鳥～平安時代)に絞った企画展は画期的である。」「貴重品や出土の多い土器ばかりでなく、沖積地・丘陵上・砂丘地・海辺における古代の多様な生活がわかるような展示になっていて興味深かった。」「

まとめ 企画展で焦点をあてた西蒲区は、これまで発掘調査があまり行われてこなかった地域である。特に近年の発掘調査によって見えてきた豊かな自然環境の中で古代の多様な営みを見せる西蒲地域の魅力を伝えられた。この企画展をきっかけとして、西蒲区内の資料館・公民館等でも同様の展示や、発掘調査成果を紹介する企画展の開催が期待されている。(龍田優子)



チラシ(表)



パンフレット

Ⅲ

文化財センターの事業



展示風景（展示室2）



展示状況（1 各エリアから出土した主要な古代土器）



展示状況（2 湖底に沈んだ縄鳥時代の遺跡）



展示状況（8 土器からの情報② 圧痕の正体を探る）



関連講演会風景（西蒲区の古代）



関連講演会風景（低湿地での暮らし）

## 6 教育普及活動

### (1) 公開講座

文化財は歴史的・文化的資産としてだけでなく、地域の成り立ちなどを知る地域資産や教育的資産でもある。新潟市ではこれらの資産を普及事業として積極的に公開・活用し、地域の歴史や文化に対する意識や愛着を育てていきたいと考えている。以下、平成26年度に実施した公開講座の概要について述べる(表8)。

**講座** 考古学と民俗学関連の講座を行った。考古学関連の講座では、平成26年度企画展の内容に関連した講演会を行った。詳細は各企画展の頁(V5)を参照いただきたい。民俗学講座については、文化財センターの民俗資料の中から、黒埼に関係の深いテーマを2つ取り上げた。

また観察再現講座として、ものを観察しその作り方をじっくり学ぶ講座を開催した。縄文土器を観察して再現する内容の講座では、文化財センターのボランティアが講師となって参加者に教えた。

**体験イベント** 子ども向け歴史体験「縄文土器づくり」「文化財センター仕事体験」を夏休みに開催した。いずれも3年継続している事業であるが、定員にすぐに達する人気イベントである。

地域の方々と交流を目的としたイベントとして、「旧武田家住宅で民具とお茶を楽しむ会」と「黒埼の民具とお茶を楽しむ会」を開催した。「黒埼の民具と民話を楽しむ会」は、平成26年度に初めて開催したイベントであり、旧武田家住宅を会場に、地元で活動している「新潟語りの交流会黒埼とんと」による昔語りを行った。

**速報会** 平成26年度の発掘発掘調査速報会では、昨年度に引き続き講演の部に新潟大学の橋本博文教授を招

き、新潟大学が9月に発掘調査を行った「牡丹山諏訪神社古墳」の調査成果について講演をしていただいた。

**出前講座・職員派遣** 文化財センターでは、研究団体、地方自治体、市民団体などに依頼に応じて職員派遣を行っている。新潟市では、通常の派遣申請以外に、市民が市政に関するテーマについて学びたい場合に職員を派遣する「市政さわやかトーク宅配便」制度がある。これはFAXやメールで必要事項を記載し担当課に送れば、その他の書類手続きが不要という簡便さが利点の制度である。

表8 平成26年度公開講座一覧

開催年度	開催月	開催日	内容	講師	人数
2014年度(平成26年度)	9月	12(土)	新潟市立博物館 企画展「縄文土器の歴史」	坂井 隆夫(新潟大学)	22
		13(日)	新潟市立博物館 企画展「縄文土器の歴史」	坂井 隆夫(新潟大学)	22
	10月	12(日)	新潟市立博物館 企画展「縄文土器の歴史」	坂井 隆夫(新潟大学)	40
		13(月)	新潟市立博物館 企画展「縄文土器の歴史」	坂井 隆夫(新潟大学)	40
2015年度(平成27年度)	10月	10(土)	新潟市立博物館 企画展「縄文土器の歴史」	坂井 隆夫(新潟大学)	45
		11(日)	新潟市立博物館 企画展「縄文土器の歴史」	坂井 隆夫(新潟大学)	45
	11月	15(日)	新潟市立博物館 企画展「縄文土器の歴史」	坂井 隆夫(新潟大学)	45
		16(月)	新潟市立博物館 企画展「縄文土器の歴史」	坂井 隆夫(新潟大学)	45
2016年度(平成28年度)	10月	10(土)	新潟市立博物館 企画展「縄文土器の歴史」	坂井 隆夫(新潟大学)	45
		11(日)	新潟市立博物館 企画展「縄文土器の歴史」	坂井 隆夫(新潟大学)	45
	11月	15(日)	新潟市立博物館 企画展「縄文土器の歴史」	坂井 隆夫(新潟大学)	45
		16(月)	新潟市立博物館 企画展「縄文土器の歴史」	坂井 隆夫(新潟大学)	45
2017年度(平成29年度)	10月	10(土)	新潟市立博物館 企画展「縄文土器の歴史」	坂井 隆夫(新潟大学)	45
		11(日)	新潟市立博物館 企画展「縄文土器の歴史」	坂井 隆夫(新潟大学)	45
	11月	15(日)	新潟市立博物館 企画展「縄文土器の歴史」	坂井 隆夫(新潟大学)	45
		16(月)	新潟市立博物館 企画展「縄文土器の歴史」	坂井 隆夫(新潟大学)	45
2018年度(平成30年度)	10月	10(土)	新潟市立博物館 企画展「縄文土器の歴史」	坂井 隆夫(新潟大学)	45
		11(日)	新潟市立博物館 企画展「縄文土器の歴史」	坂井 隆夫(新潟大学)	45
	11月	15(日)	新潟市立博物館 企画展「縄文土器の歴史」	坂井 隆夫(新潟大学)	45
		16(月)	新潟市立博物館 企画展「縄文土器の歴史」	坂井 隆夫(新潟大学)	45

表9 平成26年度職員派遣・出前講座一覧

年月日	内容	派遣先	派遣先	派遣員数
2014.9.12(土)	講演「考古学から見た新潟市の歴史」旧土居・縄文時代	小針青年公民館	小針青年公民館	1名
2014.6.7(土)	講演「考古学から見た新潟市の歴史」小針時代	小針青年公民館	小針青年公民館	1名
2014.6.6(木)	短講「つぐみ」	江南区郷土資料館	江南区郷土館	1名
2014.6.26(木)	縄文土器づくり	江南区郷土資料館	江南区郷土館	1名
2014.6.22(金)	大江の縄文遺跡を語る	大江山地区コミュニティ協議会	大江山地区コミュニティ協議会	1名
2014.9.10(木)	江南区の遺跡と地産品	徳島県立大学	徳島県立大学	1名
2014.9.17(木)	わくわく見学ツアー(黒埼地区の心豊かな生活)	黒埼南小学校	黒埼南小学校	1名
2014.9.29(土)	ふんふん見学ツアー(黒埼地区の心豊かな生活)	黒埼南小学校	黒埼南小学校	1名
2014.10.5(日)	ふれあふれ見学ツアー「つぐみ」	黒埼南小学校	黒埼南小学校	1名
2014.10.11(土)	わくわく見学ツアー「つぐみ」	黒埼南小学校	黒埼南小学校	1名
2014.10.12(日)	つぐみ見学の準備について	黒埼南小学校	黒埼南小学校	1名
2014.10.13(月・祝)	大江山公園	大江山公園	大江山公園	1名
2014.10.20(日)	3学年社会科授業「黒埼の歴史」71名参加	黒埼南小学校	黒埼南小学校	1名
2014.10.26(日)	黒埼南小学校	黒埼南小学校	黒埼南小学校	1名
2014.10.26(日)	黒埼南小学校	黒埼南小学校	黒埼南小学校	1名
2014.12.12(金)	3学年社会科授業「黒埼の歴史」76名参加	大形小学校	大形小学校	1名
2015.1.22(木)	3学年社会科授業「黒埼の歴史」50名参加	大形小学校	大形小学校	1名
2015.2.10(水)	3学年社会科授業「黒埼の歴史」77名参加	大形小学校	大形小学校	1名
2015.2.23(月)	3学年社会科授業「黒埼の歴史」75名参加	大形小学校	大形小学校	1名



平成26年度には、葛蒲塚古墳などや江南区笹山前遺跡など、実際に遺跡を訪れて職員による解説を聞くといった依頼があった(表9)。また、3学年の「昔のくらし」において、学校へのお出前授業を4件受けた。当初は民具だけを貸して欲しいといった学校からの要望であったが、専門家による正しい民具の知識を伝えること、実際に体験することによって理解を深めてもらうことが必要と考え、職員が出前授業を行うスタイルとしている。

#### (2) 施設利用

文化財センターでは、展示見学のほかに「体験コーナー」として研修室の一部を使用して新潟や埋蔵文化財に関連した体験学習ができるスペースを設置している。体験コーナーでは、「開館時間中であれば、いつでも誰でも予約なしでできる個人向けの体験」と、「予約をいただいた団体向けの体験」の2種類がある。いずれも材料費相当の負担をいただいている。また、無料の体験として新潟市から出土した土器をもとに制作した「土器パズル」が5点ある。

また季節限定体験として夏休み期間は火起こし体験、冬休み期間中は裂き織り体験・縄切り体験を行った。結果、火起こし体験が290名、裂き織り体験が79名の参加者があった(表10)。

また、旧武田家住宅及び体験広場(芝生)の貸出(有料)を行っている。利用状況は表11のとおりである。

#### (3) 入館者数

文化財センターの入館者数は表12のとおりである。平成25年度に比べておよそ2,000人増加し、開館以来最も多い年間入館者となった。企画展を開催したこと、冬季の団体利用が増えた事が要因として考えられる。

入館者のアンケートからは、「日曜日なのに空いている。もっと宣伝した方がいい」、「解説文の文字が小さい」、「開初裏を開んだイベントを企画して欲しい」等、今後の改善につながるご指摘をいただいた。

平成26年3月末までの開館からの累計入館者数は30,992人である。

#### (4) 団体見学・施設見学

小学校や子ども会などの子どもが主体の団体では、見学だけではなく体験活動を組み込むことが多い。特に小学校では社会科の授業として4・5月には6学年の歴史で、1月は3学年の昔のくらしの学習で利用する傾向にある。平成26年度では、小学校・中学校の利用は35校であり平成25年度より10校増加した。社会科の授業以外に、職場体験実習として利用する学校もある。また、介護老人施設の見学利用が増加してきているのが、文化財センターの特徴でもある。

(今井さやか)



冬の旧武田家住宅



黒埼の民具と民芸を楽しむ会



平成26年度新潟市遺跡発掘調査説明会



中学生職場体験

表14 平成26年度資料対応件数一覧

考古資料

資料対応許可

件数	申請者	資料	点数	提出日	備考
1	個人	のち遺跡 木製品	2	平成26年4月13日	調査研究
2	個人	赤土取遺跡 石部	11	平成26年7月11日	研究・論文執筆
3	個人	赤土取遺跡 石部	40	平成26年8月18日・19日	研究・論文執筆
4	個人	西郷遺跡ほか 土器	47	平成26年10月9日	新潟県における土器の構成方法の定量化調査
5	個人	赤土取遺跡ほか 土器	75	平成26年11月27日	新潟県文化財センター企画展「縄文遺跡調査報告」
6	個人	箕山遺跡ほか 土器	58	平成26年12月18日	研究
7	個人	大正川遺跡 土器ほか	68	平成26年12月25日	新潟県立考古資料館「縄文遺跡調査報告」
8	個人	のち遺跡 土器	35	平成27年3月7日	新潟県考古学会での発表
9	個人	赤土取遺跡 デジタル複製	一式	平成27年3月12日	調査報告書の調査
10	個人	のち遺跡 土器	30	平成27年3月28日	新潟県考古学会での発表

資料許可

件数	申請者	資料	点数	提出期間	備考
1	医療社団法人平人会 理事 阿部達幸	諏訪遺跡 土器	5	平成26年4月1日～平成27年3月31日	常設展示
2	新潟市江南区郷土博物館 会長 藤田 順	砂原遺跡ほか 土器ほか	51	平成26年4月1日～平成27年3月31日	常設展示
3	新潟市志んぼ郷土博物館 館長 空崎芳幸	高野遺跡 土器ほか	23	平成26年4月1日～平成27年3月31日	常設展示
4	新潟県中上川人形 会長 藤田 順	赤坂入遺跡 土器ほか	8	平成26年4月1日～平成27年3月31日	常設展示
5	新潟市中央博物館 館長 小林昌一	箕山遺跡ほか 土器ほか のち遺跡 土器・石部 のち遺跡 レンガ片 大正川新築遺跡 陶器類・瓦片	84件 38 54 27	平成26年4月1日～平成27年3月31日	常設展示
6	信濃川大島街道遺跡協議会 会長 藤田 順	秋葉遺跡 王冠型土器	1	平成26年7月9日～平成26年7月11日	信濃川大島街道遺跡協議会総合（縄文サミット） 推進委員会・展示
7	十日町市博物館 館長 佐野芳幸	箕山遺跡 土冠型土器 赤土取遺跡 「の」字状石製品	1	平成26年9月1日～平成26年11月28日	秋季特別展「縄文時代のムラ 赤土取遺跡」展示
8	高橋屋六代目芸術史博物館 館長 高橋寿哉	のち遺跡 帯金具ほか	29	平成27年3月1日～平成27年6月20日	企画展「人々の記憶」展示

資料許可

件数	申請者	資料	点数	提出日	備考
1	国立歴史民俗博物館 館長 久留島 浩	高野原遺跡 帯札写真 新潟市西蔵区角田沖梁見の 縄文土器写真	4	平成26年4月22日	「歴史」184号掲載
2	新潟県海防が陶器研究会 代表 寺嶋祐助	新潟市西蔵区角田沖梁見の 縄文土器写真 新潟市西蔵区角田沖梁見土 器上らねる縄文土器写真 高野原遺跡の縄文土器写真 大正川新築遺跡の縄文土器写真	11	平成26年5月21日	「新潟県における海防が品調査報告 -新潟県内海防がり品の実態調査-」掲載
3	株式会社東栄社 新書編集部 部長 藤島昌介	秋葉遺跡 王冠型土器写真 土器・アスファルト写真	2	平成26年6月11日	東海新書「縄文人からの伝言」掲載
4	信濃川大島街道遺跡協議会 会長 藤田 順	新潟市西蔵区角田沖梁見の 縄文土器実測図・写真	3	平成26年7月11日	信濃川大島街道遺跡協議会総合（縄文サミット）で 報告発表用及び説明パネルに使用
5	新潟県海防が陶器研究会 代表 寺嶋祐助	新潟市西蔵区角田沖梁見の 縄文土器実測図・写真 新潟市西蔵区角田沖梁見土 器上らねる縄文土器実測図・写真 高野原遺跡の縄文土器実測図・写真	28	平成26年7月22日	「新潟県における海防が品調査報告 -新潟県内海防がり品の実態調査-」掲載
6	株式会社プロメディア新潟 営業制作部 水戸 一広	縄文遺跡 発掘調査風景写真	1	平成26年8月13日	テレビ新潟「夕方アリア新潟一番」の「いっしょに学び」 にて使用
7	株式会社アム・プロモーション 代表取締役 藤山史郎	秋葉遺跡 王冠型土器写真	1	平成26年9月8日	「縄文カレンダー2015 大島型土器」制作
8	個人	砂原遺跡 木部非朽蝕写真	1	平成26年9月20日	「木部研究」第9号掲載
9	株式会社オリス 社長 石栗定雄	砂十石遺跡 空中写真	1	平成26年10月23日	パンフレット掲載
10	学芸法人総合 理事長 河合忠登	のち遺跡 木簡写真	1	平成26年11月5日	複製試験掲載
11	高橋屋六代目芸術史博物館 館長 藤島寿哉	のち遺跡 帯金具ほか写真	7	平成26年11月12日	企画展「人々の記憶」展示関係掲載
12	公益財団法人 新潟県立文化財調査事業団 事務局長 土部 茂	高野原遺跡 空中写真	1	平成27年3月3日	展示用パネル作成



西区ふれあいまつり「弓矢体験」



小学校3学年「むかしのくら」民具出前講座

## (5) 資料利用

## (a) 手続きに関する条例・規則

**特別利用許可** 文化財センター内で考古資料の熟覧・実測・撮影等を行う場合：「新潟市文化財センター条例」及び「新潟市長から委任を受けた新潟市文化財センター管理に関する規則」により許可申請書を市教委宛に提出する。

**貸出許可** 考古資料の寄託・借用・貸出等をする場合：「新潟市文化財センター考古資料の寄託、借用及び貸出に関する規則」により許可申請書を市教委宛に提出する。

**寄附申込** 考古資料の寄附申し込みをする場合：「新潟市物品管理規則」により物品寄附申込書を市長宛に提出する。

**民俗資料** 民俗資料の利用・貸出をする場合：「新潟市物品管理規則」により許可申請書を市長宛に提出する。なお、分析資料提供・掲載許可手続きは適用規則がないため、任意書式提出を依頼している。

## (b) 利用件数

以下、平成26年度の各利用件数について記す(表14)。

**特別利用許可** 考古資料に関して熟覧・実測・撮影の利用件数は10件である。

**貸出許可** 考古資料と民俗資料の貸出許可は、博物館等の常設展示に伴う年度単位の貸出と企画展等の短期間の貸出がある。前者では次年度も引き続き貸出を希望する場合は年度ごとに手続きを行っている。公民館等では地域の歴史に親しみを感じてもらう観点からその地域の遺跡から出土した遺物の貸出を行っている。資料の貸出期間等は「新潟市文化財センター考古資料の寄託、借用及び貸出に関する規則」に規定されている。常設展示に伴う長期貸出5件、企画展等に伴う短期貸出3件である。

**掲載許可** 文化財センターが保管する写真や報告書等掲載資料の提供を希望する場合や申請者が貸出を受けて撮影したものを印刷物等で使用する場合がある。利用件数は12件であった。

**寄附申込** 平成26年度は0件である。

各利用件数とも前年度より減少している。

## (6) 図書の収蔵と閲覧

## (a) 収蔵

図書室の面積は89.33㎡で、室内には単式固定5段8連1台、複式移動7段7連5台、複式移動7段8連6台の棚が列設置されている。棚段数は総数で1,202段、約5万冊の図書の収蔵が可能である。なお、分類整理作業が必要な図書や登録未了図書に関しては、隣接する埋蔵文化財収蔵庫の棚に仮置きをし、登録が終わったものが

ら順次配架を行っている。

図書の収蔵状況は、旧市町村で所蔵していた発掘調査報告書が合併に伴い集められた結果、新潟県内の発掘調査報告書には複本が多数生じることになった。複本があり利用頻度の高い報告書は、文化財センター図書室の他、調査研究室と保存処理室、そして伏見区にある弥生の丘展示館に置いて利用している。

書誌情報の入力作業は、司書(臨時職員)3名を雇用し継続して行っている。なお、書誌情報の入力は平成21年度に構築した埋蔵文化財情報管理システムを利用している。入力作業と併せ、図書の管理のために寄贈者印・所蔵印を押捺し、3段ラベル・バーコードを貼る作業を行っている。平成27年6月に新潟市役所の地理情報システム再構築に伴い、遇った時点での入力数集計は不可能となったが、平成27年10月までの入力数は43,684冊である。平成26年4月から5,630冊更新している。

## (b) 利用状況

図書室では、2名分の閲覧スペースがある。大まかに配架作業が終了した平成24年6月から閲覧開始するとともに、著作権法の範囲内でコピーサービス(有料)も開始した。図書室の利用人数とコピーサービス利用人数は表15のとおりである。前年度比では利用者数は1人減、コピーサービス利用人数は13人増である。なお、収蔵図書は発掘調査報告書等の発行部数の少ない稀覯本がほとんどのため、館外貸出は行っていない。(相澤裕子)

表15 平成26年度図書室・コピー利用者数

月	図書室利用(人)	コピー利用(人)
4月	5	1
5月	10	3
6月	8	3
7月	4	1
8月	2	2
9月	8	3
10月	6	2
11月	6	4
12月	4	3
1月	14	5
2月	11	3
3月	9	4
合計	87	38



図書室

## 7 保存処理

### (1) 木製品の保存処理について

**処理の概要** 文化財センターでは、木製品の保存処理は資料の形態・材質・劣化度を考慮しPEG（ポリエチレングリコール）含浸法を中心に行っており、PEG法では漆被膜がはがれて行えない漆器や木質が丈夫で若干の強化で済む近世遺跡出土の木製品についてはトレハロース含浸法で行っている。詳細な方針及び方法については、『年報』第1号に記載されている（今井2014）。

**平成26年度** 平成26年度には22遺跡33調査分1,943点の木製品の保存処理を行った（表16）。発掘から20年以上が経過し劣化の著しい上浦A遺跡（1992001）、和納館跡（1995004）出土木製品の保存処理をPEG含浸法で行った。また6月に県から譲与を受けた小坂居付遺跡の木製品については、(公財)新潟県埋蔵文化財調査事業団により脱鉄処理の工程までが済んでいたため、多くの遺物を譲与後すぐに含浸槽へ入れることができた。なお厚みが5cm以下の小型木製品については、タッパーを使ったPEG含浸を行っている。平成26年度には、劣化の著しい箸類とひょうたんを中心に処理を行った。

### (2) 金属製品・その他の保存処理について

**処理の概要** 文化財センターでは、木製品の保存処理の含浸期間中に金属製品の保存処理を行うというサイクルで業務を行っている。保存処理を行う順序は、原則調査年次が古いものからとしている。詳細な方針及び方法については、『年報』第1号に記載されている（今井2014）。

**平成26年度** 平成26年度は、山木戸遺跡（1991004）出土鉄製品72点の保存処理を行った（表16）。なお、遺跡出土の青銅製品の保存処理が2010年度調査分まで終わっているため、新たに青銅製品の保存処理を行わなかった。次年度以降県から譲与された小坂居付遺跡のものも処理する必要がある。

### (3) 保存処理外部委託について

PEG処理法に向かない木製品など文化財センターで保存処理ができないものについて、外部委託を行っている（表17）。

表16 平成26年度木製品・鉄製品保存処理一覧

品名	調査番号	材質	品類	処理方法	点数(区)	備考
小丸金貨	1990003	木製品	板状木製品	PEG	1	
長石遺跡	1990005	木製品	骨物	PEG	6	
上浦A遺跡	1992001	木製品	木打物	PEG	49	
舟戸遺跡	1993004	木製品	木打物	PEG	23	
石巻遺跡	1995003	木製品	骨物	PEG	3	
和納館跡	1995004	木製品	木打物	PEG	210	
石巻遺跡	1997001	木製品	漆器類	トレハロース	1	
内河内遺跡	1999001	木製品	打物	PEG	2	
内河内遺跡	2004003	木製品	漆器類	PEG	1	
下野田遺跡	2002004	木製品	骨物	PEG	2	
新七尾遺跡	2003001	木製品	杖	PEG	1	
龍門丸	2004002	木製品	骨物	PEG	2	
大沢谷内遺跡	2002009	木製品	漆器類	トレハロース	1	立倉
和納館跡	2005021	木製品	箸	PEG	1	漆器調査
和納館跡	2005021	木製品	下駄	トレハロース	1	漆器調査
和納館跡	2005025	木製品	漆器類	トレハロース	1	漆器調査
和納館跡	2006004	木製品	コウラシム	PEG	1	立倉
大沢谷内遺跡	2007002	木製品	漆器類	トレハロース	1	
神ノ倉遺跡	2007004	木製品	コウラシム	PEG	1	
手代山北遺跡	2008003	木製品	箸	PEG	1	
手代山北遺跡	2008003	木製品	漆器類	トレハロース	2	
大沢谷内遺跡	2008005	木製品	コウラシム	PEG	3	
大沢谷内遺跡	2008005	木製品	漆器類	トレハロース	2	
和納館跡	2008006	木製品	骨物	PEG	49	
和納館跡	2008007	木製品	漆器類	PEG	4	立倉
和納館跡	2008142	木製品	箸	トレハロース	1	立倉
大沢谷内遺跡	2009003	木製品	箸	PEG	1	
小坂居付遺跡	2009007	木製品	漆器類	PEG	1,354	
小坂居付遺跡	2009007	木製品	漆器類	トレハロース	76	
宮内町東成宮	2009021	木製品	骨物	PEG	2	漆器調査
林付遺跡	2009031	木製品	骨物	PEG	13	
大沢谷内遺跡	2012001	木製品	骨物	PEG	111	
大沢谷内遺跡	2012001	木製品	漆器類	トレハロース	2	
長石遺跡	2012119	木製品	骨物	PEG	1	
大沢谷内遺跡	2013002	木製品	骨物	PEG	36	
大沢谷内遺跡	2013002	木製品	漆器類	トレハロース	2	
下野田遺跡	2013005	木製品	漆器類	PEG	10	
和納館跡	2014145	木製品	漆器類	トレハロース	4	
和納館跡	2014154	木製品	漆器類	トレハロース	1	
計					1,963	

品名	調査番号	材質	品類	処理方法	点数(区)	備考
山木戸遺跡	1991004	鉄製品	釘等	キーコンニア ・埋め直法	72	
計					72	

表17 平成26年度外部委託保存処理一覧

品名	調査番号	点数	備考	委託先	数量(円)	合計(円)
大沢谷内遺跡	2008002	7	漆物3点、 他2遺跡の漆器・木目	文化財研究所	1,610,800	
小坂居付遺跡	2009007	7	漆器	文化財研究所	1,484,345	974,327
和納館跡	2014154	5	漆物4点、 釘類1点(埋め直し)	文化財研究所	3,179,520	



木製品 保存処理前(長沼遺跡・1990005)



木製品 保存処理後(長沼遺跡・1990005)



## 8 新潟市文化財センター運営協議会

文化財センターでは、文化財センターの運営について、市民、学校教育関係者、学識経験者からの幅広い意見を聴取することを目的として、「新潟市文化財センター運営協議会」（以下「協議会」）を平成25年度から開催した。協議会開催にあたっては、開催要項を定め、委員10名を市長が選任し（表18）、事務局は文化財センターに設置した。この協議会は原則公開としている。

そして、平成25年7月23日（火）に新潟市文化財センターに於いて第1回協議会を開催し、翌年の平成26年4月16日（水）に新潟市新津美術館レクチャールームに於いて第2回協議会を開催した。

協議会では、昨年度の事業報告及び新年度の事業計画を中心に報告され、その内容を踏まえて委員による意見交換が行われた。意見交換は活発に行われ、複数の議論がなされ、文化財センターの運営の参考になっている。実際に、文化財センターの場所が分かりにくいため、文化財センターへの案内標識が必要という意見に対して、付近の主要交差点に案内標識を設置する等の取り組みを行っている。

今後も運営協議会での意見を参考に、文化財センターの活動が市民に浸透し、より活発になるように取り組んでいく必要がある。（金田拓也）

表18 文化財センター運営協議会委員名簿（平成25・26年度）

委員長	高橋 正	新潟市長学芸会理事・学芸員会理事
委員	本野 信昭	〔元〕 新潟県埋蔵文化財調査会事務局課長
	長寿 久美子	新潟市長学芸会委員
	三ツ井 雅子	〔公財〕新潟県埋蔵文化財調査会事務局課長副課長
	杉中 慶彦	新潟市立東通南小学校校長
	水本 真二	新潟市立東通南中学校校長
	渡邊 昌仁	新潟市立東通南小学校PTA会長
	小林 忠芳	本場地区連合自治会長
	渡辺 順子	新潟市歴史博物館ボランティア
	山本 昭夫	公募委員



第1回文化財センター運営協議会風景

## 9 決算額

平成26年度の文化財センターの決算額は表19の通りである。（福地康郎・土田俊哉）

表19 平成26年度文化財センター決算額

■収入 〔一般会計〕		
区 分	決算額 (円)	
○使用料及び手数料	997,610	
文化財センター設備使用料	1,400	
行政財産使用料	996,000	
○国庫支出金	116,304,000	
市内遺跡範囲等確認調査事業費	19,075,000	
埋蔵文化財保存処理	8,406,000	
溝口地区埋蔵物発掘調査費	1,100,000	
河野地区埋蔵物発掘調査費	13,250,000	
道上地区埋蔵物発掘調査費	600,000	
兜野古津八幡山遺跡整備・保存活用事業費	82,125,000	
文化財センター保存・活用事業	10,728,000	
○議決金	289,100,000	
溝口地区埋蔵物発掘調査費	19,800,000	
河野地区埋蔵物発掘調査費	23,850,000	
道上地区埋蔵物発掘調査費	19,800,000	
小規模緊急発掘調査費	0	
○繰入金	1,157,610	
○市債	75,300,000	
(合併) 兜野古津八幡山遺跡整備事業債	75,300,000	
合 計	481,859,010	

■歳出 〔一般会計〕		
区 分	決算額 (円)	
○文化財保護調査事業費	1,371,684	
埋蔵文化財発掘費	1,371,684	
○市内遺跡範囲等確認調査事業費	21,815,286	
○出土品管理活用事業費	0	
○埋蔵文化財保存処理調査事業費	239,000,000	
溝口地区埋蔵物発掘調査費	22,900,000	
河野地区埋蔵物発掘調査費	265,000,000	
道上地区埋蔵物発掘調査費	120,000,000	
小規模緊急発掘調査費	0	
○古津八幡山古墳保存整備事業費	159,583,330	
○兜野古津八幡山遺跡整備活用事業費	3,337,981	
○兜野古津八幡山遺跡及びガイダンス施設管理運営費	13,770,728	
○文化財センター管理運営費	8,488,269	
合 計	581,367,258	

※126から「文化財センター管理運営費」に統合。

## IV 史跡古津八幡山遺跡歴史の広場

### 1 史跡古津八幡山遺跡保存整備活用事業の概要

#### (1) 史跡・整備概要

古津八幡山遺跡は、弥生時代後期から古墳時代の北陸から東北における社会情勢を考える上で重要な遺跡として、平成17年に国史跡に指定された。現在は平成23年の追加指定を含め、約12haが国史跡となっている。

平成17年に遺跡の大半が公有地化された後、平成18年から史跡整備を進め、平成21年度までに弥生時代の高地性環濠集落内の竪穴住居7棟・環濠・土壇・方形周溝墓や前方後方形周溝墓の復元整備を行った。また、平成24年4月21日、麓にガイダンス施設「史跡古津八幡山 弥生の丘展示館」（以下「弥生の丘展示館」）が開館するとともに、「新潟市古津八幡山遺跡歴史の広場」として暫定オープンした。

古津八幡山古墳やその周辺域は、平成22年に追加指定されたのを受けて、平成23年（第17次）から平成25年（第19次）の3か年にわたり復元整備のための確認調査を行い、その成果を基に平成25・26年度に周辺域も含めた復元整備工事を行った（復元整備工事の詳細についてはIV 3掲載）。平成27年4月17日、古墳も含めた史跡公園として全面オープンとなった。

#### (2) 施設情報

「新潟市古津八幡山遺跡歴史の広場」には、ガイダンス施設である弥生の丘展示館と竪穴住居等が復元されている史跡公園が存在している。詳細な施設情報については、『年報』第1号に記載されている（渡邊2014）。

弥生の丘展示館は、基本的に月曜日等の休日の翌日が休館日だが、隣接する新潟市新津美術館に合わせて臨時開館する日もある。

管理は、文化財センターが直接管理している。史跡公園における芝刈り・草刈り、竪穴住居の燃焼作業や枯れ枝の伐採、園路周辺の草刈り等については、NPO法人にいがた森林の仲間会に委託している。史跡公園では休館日を除き、4～11月は毎日3～4人、冬期間の12～3月は2人ずつ常駐して作業を行っている。

弥生の丘展示館は、平常時は非常勤職員1～2名と臨時職員1～2名で施設管理や体験学習の指導を行っており、イベント等で来館者が多い時には文化財センター職員も一緒に事業を行っている。

### 2 教育普及活動

#### (1) 展示

弥生の丘展示館は、鉄筋コンクリート1階建て、床面積430㎡で、展示室180㎡、体験学習室118㎡が主な施設である。展示室には古津八幡山遺跡から出土した旧石器時代から平安時代の土器や石器など500点以上を展示するほか、弥生時代のムラの様子を縮尺300分の1の復元ジオラマ模型で再現している。また、遺跡への親近感や理解が深まるよう、展示ケースの壁面には全面に考古イラストレーターの高川和子さんによる時代毎の復元画を貼っている。

ガイダンスシアターでは、65インチの大型モニターで、古津八幡山遺跡の概要やこれまでの調査成果等を映像で見ることが出来る。平成26年度には、平成23年度から平成26年度にかけて実施した古津八幡山古墳の確認調査や復元整備工事の記録映像を新たに追加した。



古津八幡山古墳復元経過一般公開（まいごん祭り）



弥生の米作り 古津八幡山遺跡で稲作体験（田植え）



## (2) 平成26年度の新たな取り組み

平成27年4月17日に、古津八幡山古墳のエリアを含む歴史の広場が全面オープンしたことから、古津八幡山古墳の解説を加えたリーフレットを新たに作成した。

また、古津八幡山古墳の解説として、『弥生の丘展示館ガイドブックNo.6(古津八幡山古墳編)』を作成した。容易に携帯できるよう、A5版の大きさとした。ガイドブックは弥生の丘展示館の来館者に無料で配布している。

古津八幡山古墳の調査及び整備工事の記録として、新潟市教育委員会「国史跡 古津八幡山遺跡 保存整備事業報告書2-1600年の時を越え よみがえる蒲原の王墓-」(相田ほか2015b)を刊行した。

## (3) 体験学習

弥生の丘展示館では、個人が来館すればいつでも体験できる事前申し込み不要の体験学習メニューを月毎に決めている(表1・2)。これらの参加者数は、平成25年度7,818人に対し、7,743人と若干減少している。

概ね10人以上の団体の場合は事前に申し込みをお願いしているが(表3・4)、件数・人数とも平成25年度に比

べ約1.5倍増加した。とりわけ、小学校での利用が多く、平成25年度の16件から倍増している。

## (4) イベント等

市報やホームページ等で広報して、事前募集して行うイベントを月に1回から2回程度実施している(表5)。

また、当日受付のものでは、6月に新潟県立植物園をメイン会場として行う第13回にいつ花ふるフェスタの協賛イベントとして、鹿角ペンダントや土偶作り、古代米の脱穀体験、弓矢体験等を行った。また、9月には新潟県埋蔵文化財センターと連携してまいふん祭りをを行い、弓矢体験や石斧体験、鋳造体験、脱穀体験、石包丁・木包丁を使った稲刈り体験等その他、復元整備途中の古津八幡山古墳の特別公開を行った。なお、1月には弥生の餅つきを行っている。いずれも500人以上の参加者があり、大盛況であった(表5)。

## (5) 入館者数

平成26年度の弥生の丘展示館の入館者数は、36,365人である(表6)。昨年度よりも818人増加したことになる。内訳を見ると、団体入館者数が約1.5倍に増加したが、

個人入館者はやや減少した。

これまでも課題として挙げられていた冬季における入館者数は昨年度に比べやや増加した。とりわけ、2月は昨年度に比べ2倍以上の増加となった。一方、積雪が早かったこともあり、12月は昨年度に比べ半数以下に減少した。

入館者数の増減については、関連する新潟市新津美術館の企画展内容や入館者数も影響していると考えられるが、冬期間の12~3月を主とした入館者数の増加に向けた取り組み・工夫は今後の検討課題といえる。

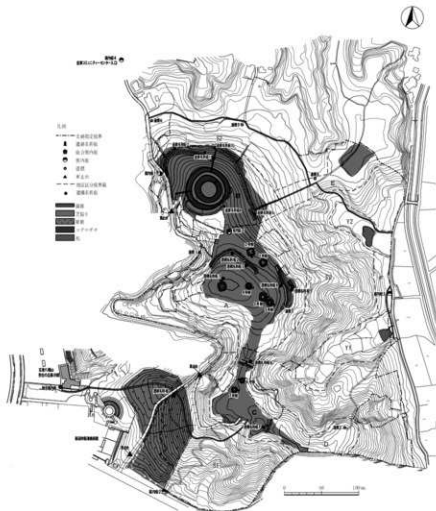


図1 史跡古津八幡山遺跡復元整備全体図(古津八幡山古墳復元整備後 1/5,000)

### 3 古津八幡山古墳復元整備の概要

#### (1) はじめに

古津八幡山古墳及びその周辺は、第2次世界大戦前後の畑地造成のための切り盛りによって本来の形状が大きく変更されていた。そのため、復元整備を行うにあたり、築造時の形態や規模等を確認する必要があり、平成23年度から平成25年度に確認調査を実施し、その結果をもとに平成25・26年度に古墳及びその周辺の復元整備工事を行った。なお、復元整備工事の詳細については報告書〔相田ほか2015b〕を参照頂きたい。

新潟市古津八幡山遺跡歴史の広場は、平成27年4月17日に古墳の地区を含めて全面オープンとなった。

#### (2) 復元整備の概要

①概要 古墳が位置する地区は、平成24年度に実施設計を行い、平成25・26年度に復元整備工事を行った(図2)。工事内容は、古墳の墳丘や周濠の復元の他、古墳の北から東側にかけて存在する弥生時代の環濠の園路標示工事である。その他、古墳説明用の案内板1基と周濠や環濠説明用の遺構名称板5基を設置した。

古津八幡山遺跡基本設計の「復元的整備に伴う造成は原則として現況地盤の上で行う工事とし、盛土を原則とする」とある方針に従い、古墳及びその周辺は現況地盤を極力壊さないよう、古墳については確認調査で復元された当時の墳丘面より基本的に1m高く盛土を行い復元した。古墳周辺についても基本的に盛土を行い造成した。

土砂の流出を防止するため、古墳斜面にはコグマザサを、それ以外の全面に芝を植栽した。墳丘斜面をコグマザサにしたには周囲と植栽を変えることで墳頂を分かりやすくする目的もあった。また、コグマザサは芝ほど生育が良くないため、管理がしやすい利点もあった。

史跡内では視界を遮るような構築物は極力造らないよう努めており、遺構名称板は地面と同じ高さとし、案内板についても極力視界の妨げにならないよう低い台座とした。また、急な斜面部分7か所に木製階段を設置したが、景観に配慮し、近景写真などを撮影する際になるべ

く写りこまない位置になるよう配慮した。他には、整備工事の一環として古墳周辺の杉の伐伐を行った。

②墳頂部 墳頂部は平安時代に削平を受けており、その後も畑の利用や大気測定所の設置などにより影響を受けていたことが調査で判明している。そのため、本来の墳丘高・墳頂平坦面については不明である。調査の結果、埋葬施設は確認されなかったが、埋葬施設があったとすれば、墳丘の築造方法から墳丘の中心部では旧表土直上(標高約47.5m)から最低でも4工程分の盛土の高さ(約2.5m)が必要であることから、墳頂標高50m(復元整備後51m)で復元を行った。

③テラス テラスの勾配については、確認調査結果や整備検討委員会・調査指導部会での指導をもとに、約6%の勾配で復元した。テラスが平坦でないのは築造前の旧地形の影響と考え、調査結果を活かし、あえて平らに復元していない。

④周濠 南西側の周濠は、確認調査で深い所で濠底から1.5mほど埋まった状態であることが確認されたが、復元については埋まった状態の上に保護盛土を行い、芝で植栽するのみとした。また、周濠外側については、民地が大半を占めるため現況のままとした。

⑤園路(環濠) これまでの調査で、古墳の北西から南東側には外環濠A・B・Dが確認されている。これらについては、古墳と時代が異なることから自然土舗装材による園路として整備・標示した。(相田泰臣)



古津八幡山古墳(復元整備後)

整備工事内容	平成25年度										平成26年度																
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月		
復元工事(工事用道路敷設・掘削)																											
造成工事(盛土・掘削・防犯柵)																											
復元工事(内環濠A~D)																											
周濠復元工事(表土降・表土盛)																											
園路工事																											
案内・説明板																											
植栽工事																											
サイン工事 (園路の視認性向上)																											
施工要領																											

図2 古津八幡山古墳復元整備工事の流れ

## V 研究活動－資料報告・研究ノート等－

### 1 西蒲区御井戸B遺跡出土の石製模造品について

#### (1) はじめに

西蒲区(旧巻町)に所在する御井戸B遺跡から平成9(1997)年に実施された本発掘調査で石製模造品が出土しており、平成15(2003)年度に実施した確認調査の概要報告書(前山・相田2004)に遺跡を考える上で重要な遺物という形で報告されている。石製模造品は、古墳時代中期を中心に盛行する祭祀遺物であり、列島の広い範囲で確認されるが、地域的偏在が激しい特徴的な遺物である。新潟市内では、現時点で管身の知る限り、御井戸B遺跡出土例のみである。ここでは、御井戸B遺跡出土の石製模造品について紹介し、若干の考察を行う。

#### (2) 御井戸B遺跡出土石製模造品について

**御井戸遺跡** 御井戸遺跡は越後平野の西縁を日本海に沿って連なる山地帯の北端、角田山の南麓、矢垂川によって形成された扇状地ないし自然堤防上に立地する。縄文時代晩期に集落が形成され、古墳時代後期に至るまで断続的に集落が営まれたと考えられている。特に、縄文時代晩期と古墳時代前期を中心に多量の遺物が出土している。古墳時代前期には、近接した山地上に前方後方墳である山谷古墳が所在しており、その関係が指摘されている(前山・相田2004)。御井戸遺跡は隣接して御井戸A遺跡と御井戸B遺跡に分かれているが、一体の遺跡として評価できるため、細かく調査や出土場所を述べる場合はA・Bを分けるが、全体の評価においては御井戸遺跡と述べる。

**出土状況** 既に述べたように、石製模造品は平成9年実施の本発掘調査で出土した。調査によって、古墳時代の御井戸B遺跡東部は北部に埋没谷、中央に微高地、南部に低湿地が広がることが判明した。石製模造品はこのうち北部埋没谷の南岸斜面から7点出土している。集中した分布と限定された点数から、一括性の高い資料と考えられている。

**石製模造品** ここでは個別の資料について述べる。なお、資料番号は報告書記載の番号を用い、石製模造品の分類等については[金田2015]を用いる。

1は扁平円型の剣形である。最大長4.2cm、最大幅2.2cm、厚さ5.0mm、孔径2.0mmである。全面に擦痕が確認できる。2は扁平半月型の勾玉形である。最大長

3.6cm、最大幅1.7cm、厚さ7.0mm、孔径1.0mmである。全面に擦痕が確認できる。3は双孔円型の板形である。最大長1.6cm、最大幅1.6cm、厚さ3.0mm、孔径1.5mmである。全面に擦痕が確認できる。他の板形に比べて、若干小形である。4は双孔楕円型の板形である。最大長2.3cm、最大幅1.9cm、厚さ2.5mm、孔径1mmである。前面に擦痕が確認できる。5は双孔円型の板形である。最大長2.1cm、最大幅1.9cm、厚さ3.5mm、孔径1.0mmである。全面に擦痕が確認できる。6は単孔楕円型の板形である。最大長2.3cm、最大幅1.9cm、厚さ3.0cm、孔径2.0cmである。表・裏面に擦痕が確認できるが、側面にはほぼ確認できない。7は単孔円型の板形である。最大長2.0cm、最大幅1.9cm、厚さ3.5mm、孔径1.0mmである。表・裏面に擦痕が確認でき、側面にも一部擦痕が確認できる。石材は、蛇紋岩を微量に含む滑石と報告されている。個々の色調は緑色から青色と異なり、特に7は若干異質な感じも受けるが、率先して異なる石材として分類できるものは無い。調整は、どれも全面に擦痕が確認でき、各形式で一般的に確認できる調整である。双孔型板形の側面は、擦痕の一つの濃まりの単位が少ないため、その境界の角が目立ち、少し角張る曲線を描く。単孔型板形のみ側面の擦痕が希薄で、粗雑な印象を受ける。

以上のように御井戸B遺跡では、勾玉形・剣形・板形の3種類の形式が確認でき、これらは定形三種類に分類され、多くの集落から出土する形式である。さらに、この時期について考える。新潟県は資料が少ないため、隣接地域の東北の例を参考にすると[金田2015]、概ね須臾器型式のTK73からTK208の時期の可能性が高く、なかでもTK216からTK208の時期の可能性がある。御井戸B遺跡出土の土器でも、TK73からTK208と併行する時期の土器が確認されており、当該期の可能性は十分にある。

#### (3) 新潟県出土の石製模造品について

[金田2015]を基に新潟県の石製模造品の分布について概観する。新潟県において石製模造品が出土する遺跡は大きく2つに分類できる。実用品類(玉類形・紡錘車形)のみが出土する遺跡と、狭義の石製模造品として評価できる定形三種類(勾玉形は円型を含まない)が出土する遺跡である。このうち、定形三種類が出土する遺跡はほぼ中越地域以南である。この定形三種類が出土する遺跡は、分布の濃まりからさらに、糸魚川市周辺(以下

「糸魚川」、南魚沼市周辺（以下「南魚沼」、長岡市・新潟市西蒲区周辺（以下「長岡・旧巻」）の3つの地域に分けることができる。このうち糸魚川は、円型勾玉形や実用品類などと共に板形が中心となる。そして、石製模造品出土遺跡の多くは玉作遺跡である。一方、南魚沼では、定形三種類の中でも剣形が出土する。そして、長岡・旧巻である御井戸遺跡から定形三種類の3つの形式が出土している状況である。

#### (4) 御井戸遺跡出土石製模造品の意義

御井戸遺跡は、新潟県内で定形三種類が出土する石製模造品出土遺跡で最北に位置する（日本海側で見ると山形県庄内地域等で出土している）。御井戸遺跡出土の石製模造品は剣形を含む定形三種類の3つの形式が確認でき、南魚沼との様相と類似している。そのため、南魚沼との関係が深いと考えられる。

御井戸遺跡は、角田山の南麓から流れる矢垂川の氾濫源の微高地上に立地する。矢垂川は矢川に合流し、さらに西川に合流する。この西川は大河内分水路が開削される以前は、江戸時代には信濃西川と呼ばれる流路と同様の流路と考えられ、信濃川が寺泊市大河内付近で分岐する2つの流路のうちの1つである〔雁見1985〕。この信濃西川はもう一方の信濃東川（現在の信濃川とは同様の流路）と新潟市平島で再び合流したと考えられ、信濃西川と信濃東川に大幅に大きな違いがなく、どちらも主要な流路であったと考えられている。また、信濃西川のような新潟平野の西側を流れる主要な流路は、弥生時代や古墳時代にも存在していたと考えられている（鶴井・安井2004）。

以上を踏まえ現在の河川で考えると、南魚沼市を流れる魚野川から信濃川、西川へと河川に沿った交流経路を

想定することができる。また、長岡市島崎に所在する大武遺跡や奈良崎遺跡からも板形石製模造品（春日ほか2002・2014）が出土している。大武遺跡や奈良崎遺跡は東頸城丘陵北東側付近の沖積地に立地しており、大河内分水路開削以前は旧島崎川と呼ぶ西川に合流する河川が付近を流れていたと考えられている。そのため、この大武遺跡についても、魚野川から西川の交流経路との関係が考えられる。

このように、御井戸遺跡から出土する石製模造品は南魚沼との旧河川沿いによる交流経路によって波及したと考えられ、さらに南魚沼は魚野川沿いを南下すると群馬県へとつながる。南魚沼と群馬県との関係は既に指摘されており〔寺村1972、安立2001〕、群馬県からは剣形で言えば、両面鏡くびれ型等の新潟県出土よりも古い型式の石製模造品が出土することから考えれば、群馬県から南魚沼、さらに長岡・旧巻へと波及したと考えることができる。このことから、古墳時代中期に群馬県から新潟平野西側を通る内水面交通によって日本海へと抜ける交流経路を想定することができる。御井戸遺跡はその交流経路上に位置し、交通の要所であったために、石製模造品が出土したと考えられる。

最後に、本論は御井戸遺跡出土の石製模造品の資料を報告すると共に、（金田2015）を基に御井戸遺跡出土の石製模造品の意義について若干の予察を行ったものである。しかし、新潟県内の石製模造品については、筆者自身の観察や考察に不十分な点が多く、誤謬や誤解が含まれている可能性がある。今後、新潟県内の石製模造品についてより詳細に検討することで、御井戸遺跡出土の石製模造品の意義をより明確にしていきたい。（金田拓也）



御井戸B遺跡出土石製模造品

表1 御井戸B遺跡出土石製模造品観察表

番号	形状	材質	色	長さ	幅	厚さ	重量	観察者	備考
1	板形	石	黒	4.2	1.2	0.1	0.12	金田	板形
2	板形	石	黒	3.5	1.0	0.1	0.10	金田	板形
3	板形	石	黒	3.2	0.8	0.1	0.08	金田	板形
4	板形	石	黒	3.0	0.7	0.1	0.07	金田	板形
5	板形	石	黒	2.8	0.6	0.1	0.06	金田	板形
6	板形	石	黒	2.5	0.5	0.1	0.05	金田	板形
7	板形	石	黒	2.2	0.4	0.1	0.04	金田	板形



図1 新潟県における定形三種類（円型勾玉形除く）出土遺跡 (1/3,000,000)

## 2 沖ノ羽遺跡から出土した古墳時代後期の「甗」について

報告に至る経緯 2014年2月、新潟市教育委員から「沖ノ羽遺跡Ⅴ 第18・19次調査」が刊行された(遠藤・澤野ほか2014)。報告書中で、4区から出土した図1-29は、古墳時代後期の「甗」として分類、報告された(澤野2014a・b)。

以前、この種の土器について「頸部有孔受口付甗形土器」と仮称して集成及び若干の検討を行ったことがある(相田2009)。その後、春日真実氏は6・7世紀における越後の甗を総括的に検討する中で、「頸部付近に椀木孔があり、椀木孔のU字型の突起があるもの(「頸部有孔受口付甗形土器」と呼称されるもの)について、底部単孔の甗としてI d類に分類した(春日2013)。

2009年に集成した以後、類例が増加していることから、本稿では、現時点における集成を行うとともに、若

干の私見を述べたい。なお、この種の土器について、筆者も春日氏と同様に甗と考えており、以下では「頸部有孔受口付甗」として記述する。

土器の概要 図1-29は、沖ノ羽遺跡4区(2005年調査)の包含層出土遺物である。体部上方から口縁部の資料で、頸部から口縁部にかけて緩やかに外反する形状をなす。頸部には穿孔が1箇所確認でき、外面は孔の下に受け口状の突起が付く。器面の摩耗が激しく調整は不明な点が多いが、受け口部外面には指頭圧痕が、頸部外面には一部ハネが認められる。復元口径は23.0cmである。

4区では古墳時代の土器が定量出土している(図2)。SX3出土の須恵器杯はTK10型式の特徴をもつ。また、杯・高杯は内面黒色処理されたものが大半を占める。杯の多くは半球状の体部に外反する口縁部が延びる形態で、体部の器壁は比較的厚いものが多い。高杯脚部は全て短脚で、ハの字状に裾が広がる形態をなす。これら土師器杯・高杯の特徴は須恵器の年代観と矛盾せず、図1

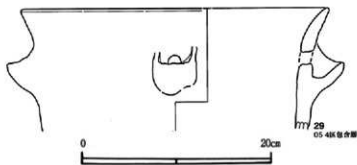


図1 沖ノ羽遺跡4区(2005年調査)出土の頸部有孔受口付甗(遠藤・澤野ほか2014)

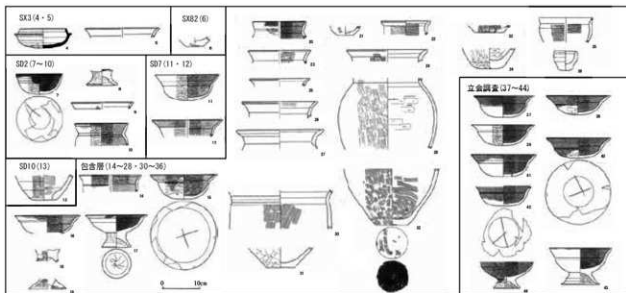


図2 沖ノ羽遺跡4区(2005年調査)出土の古墳時代の土器(図1-29除く)(遠藤・澤野ほか2014)



29も、TK10型式並行期前後の時期の可能性が高い。

おわりに 頸部に浅木孔を穿ち、外面の孔の下に受口状の突起が付く頸部有孔受口付甗は、現時点において、管見の限り沖ノ羽遺跡を除けば、阿賀野川以北と庄内平野に分布が限定される(図3)。時期の特定が困難な資料も多いが、いずれもMT15・TK10型式前後の資料と推測している(相田2009)。

この種の土器について、新潟県内では底部の形状が判明している例は存在しないが、山形県鶴岡市の矢馳A遺跡と助作遺跡からは、類似した特徴をもつ単孔底の甗が出土している(図3-3~5)。図3の土器は、いずれも形態や調整が類似しており、年代も近いと推測されるこ

とから、矢馳A・助作遺跡例と同様に、単孔底の甗である可能性が高いと判断し得る。

繰り返しになるが、この種の土器の分布は、現状で沖ノ羽遺跡を除くと阿賀野川以北と庄内平野に限られる。なお、沖ノ羽遺跡は阿賀野川の西2.5kmに位置し、阿賀野川の支流、小阿賀野川から派生する能代川と至近距離にあるなど、内水面交通によって阿賀野川と結ばれた阿賀野川流域の集落といえる。この種の特徴をもつ土器が、この地域に分布する具体的な背景については今後の検討課題であるが、該期における阿賀野川流域以北と庄内平野との密接な関係を示す資料と考える。(相田泰臣)

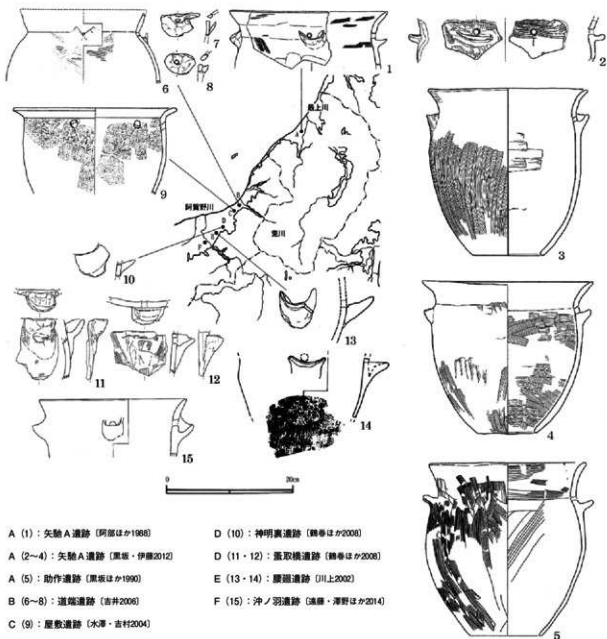


図3 頸部有孔受口付甗の分布

### 3 仲歩切遺跡から出土した骨様物質の組織形態学的分析結果

#### (1) 緒言

平成26年度に実施された仲歩切遺跡の工事立会(2014178、本書26頁概要報告)において、古代の土坑(SK 8) 1~3から灰白色の骨様物質小片が出土した。そのうちの数点に、焼成した陸生哺乳類四肢長骨の緻密質に類似する形状を認めたものの、細片化が著しく肉眼観察では骨と断定するのは困難であった。こうした微小な骨様物質の鑑定には、顕微鏡を用いた組織形態観察が有効であることが知られている[Greenlee and Dunnell, 2010; Sawada et al. 2014]。そこで、(1) 骨か否か、(2) 骨だとすればヒトか動物かを明らかにするため、骨様物質を薄切して検鏡し、組織形態学的検討を実施した。以下にその結果を報告する。

#### (2) 試料と方法

組織形態の分析に際し、SK 8-1~3から出土した骨様物質3点を試料とした(NB01-03、写真1)。各試料を70%エタノールに浸漬して脱気処理を行い、80%・90%・100%エタノールに各15時間、別の100%エタノールに1.5時間浸漬して脱水した。その後、スチレンモノマーに2時間、別のスチレンモノマーに2時間、スチレンモノマーと樹脂(Rigolac2004とRigolac70F(Nisshin EM)を7対3で混合)の等量混合液に24時間浸漬した後、樹脂(同上)に24時間浸漬した。以上の過程を経た試料を、重合促進剤(Benzoyl Peroxide、和光純薬工業)を添加した別の樹脂(同上)に包埋して恒温器内に安置し、30℃から12時間毎に10℃ずつ60℃まで温度を上げて樹脂を重合した。樹脂が十分に硬化したのち、硬組織切断機(SP1600、Leica)で50μm厚に薄切してプレパラートに封入した[澤田ほか、2010]。

検鏡には明視野・偏光観察の可能な光学顕微鏡(Imager A1、Zeiss)を使用した。骨構造を確認できた試料については、Pfeiffer(2000)およびSawada et al. [2004]にしたがって、完形の二次オステオンの面積(On.Ar)とハバース管の面積(H.Ar)を計測した。計測の劣化や、骨組織像は顕微鏡に接続したCMOSカメラ(Go-5、QImaging)で撮影し、画像解析にはImageJ(US National Institute of Health, <http://imagej.nih.gov/ij/>)を用いた。比較データとして、ヒト、ニホンザル、ウマ、イノシシ、ニホンジカ、カモシカ、ウシ、キツネ、タヌキ、イヌ、クマのOn.Ar、H.Ar、H-On示数(Sawada et al. [2014]と澤田・奈良[2015])に基づく。附表参照)を利用した。



写真1 出土試料  
左からNB01 (SK 8-1出土)、NB02 (SK 8-2出土)、NB03 (SK 8-3出土)。スケール・バーは5 mm。

#### (3) 結果1：検鏡所見

試料の顕微鏡像を写真2に示す。全ての試料に骨構造の特徴が認められており、いずれも骨であることは疑いない。

NB01 (SK 8-1出土) 骨質は劣化しており随所に亀裂や空隙が生じていたものの、二次オステオンを主体とする緻密質の組織構造が確認された(写真2-1)。隅蹄類などヒト以外の一部の動物に顕著に発達する葉状骨(Hillier and Bell, 2007; Mulhern and Ubelaker, 2012)(写真2-13)は見当たらない。二次オステオンの分布様相と緻密質の厚さは、中・大型の陸生哺乳類(写真2-4~2-12)に類似する。

NB02 (SK 8-2出土) NB01と同様に二次オステオンを主体とする緻密質の組織構造が確認されたが、保存状態はきわめて不良である(写真2-2)。葉状骨は見当たらない。中・大型の陸生哺乳類に類似する。

NB03 (SK 8-3出土) 二次オステオンを主体とする緻密質で、葉状骨は見当たらない(写真2-3)。他2点の試料に比べて組織形態の保存状態が良好で、二次オステオンの形状を明瞭に確認できる。二次オステオンの分布様相と緻密質の厚さは中・大型の陸生哺乳類に類似する。ハバース管の径は大きく、定性的な所見として成人骨(写真2-4)に近い印象を受けた。

#### (4) 結果2：骨組織形態計測

試料NB01とNB03においては10個以上の完形二次オステオンおよびハバース管を確認し得たので、これら試料2点を対象として骨組織形態計測を実施した。試料NB02は組織構造の劣化が著しくオステオンの輪郭は不明瞭であったため計測に至らなかった。

試料の骨組織形態計測値を表1に示す。また、試料および各種動物四肢骨緻密質のOn.ArとH.Arを図1、H.ArとOn.Arの比(H-On示数)を図2にまとめた。NB01のOn.Arの平均値(390128μm<sup>2</sup>)、H.Arの平均値(24116μm<sup>2</sup>)、H-On示数の平均値(6.3)はいずれもヒトの平均値の範囲(On.Ar 314638-490387μm<sup>2</sup>、H.Ar 17343-25245μm<sup>2</sup>、H-

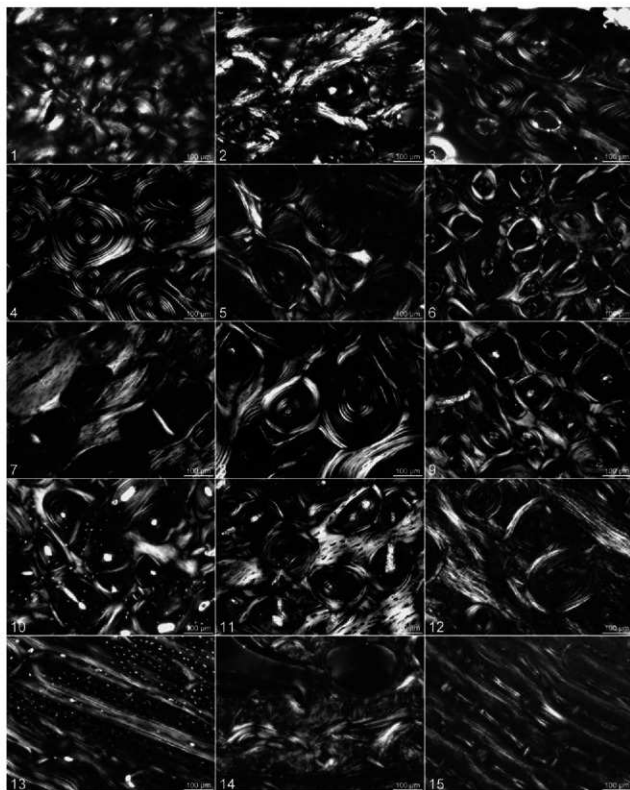


写真2 試料および比較動物四肢骨骨幹部の偏光顕微鏡写真

1 NB01, 2 NB02, 3 NB03, 4 成人大鼠骨, 5 ニホンザル大脳骨, 6 イヌ大脳骨, 7 タヌキ大脳骨, 8 タマシ鼠骨, 9 シカ大脳骨, 10 イノシシ大脳骨, 11 ウシ大脳骨, 12 ウマ大脳骨, 13 イノシシ大脳骨 (葉状骨), 14 乳児大脳骨 (一次骨), 15 オオハクチョウ大脳骨, 4~12はいずれも二次オステオンを主体とする組織形態。

表1 仲歩切遺跡出土骨片試料の骨組織形態計測値

試料名	On.Ar ( $\mu\text{m}^2$ )		H.Ar ( $\mu\text{m}^2$ )		H-On示数
	Mean	SD	Mean	SD	
NB01	12	2902.8	11022.8	2411.6	9.3
NB03	15	3595.1	18630.3	2453.2	6.9

n: 試料の二次オステオンの個数。On.Ar: 定形の二次オステオンの面積。H.Ar: 定形の二次オステオン内にあるハバース管の面積。H-On示数: H.Ar/On.Ar × 100。

On示数5.4-7.3)に取まっていた。NB03のH.Arの平均値(2456.3  $\mu\text{m}^2$ )もヒトの平均値の範囲にあり、On.Arの平均値(55856.1  $\mu\text{m}^2$ )とH-On示数の平均値(5.0)はヒトの平均値の範囲からわずかに外れるものの、比較動物群の中ではヒトに最も近いところに位置していた。

### (5) 考察

骨組織形態の大きさは同じ種なかでも個体によって相違するが、大きさの平均値が顕著に異なる動物間で比較するときは、種内の個体差の影響は小さいとみなしてよい(澤田ほか, 2010)。骨組織形態計測においてオステオンやハバース管の大きさは動物種の識別に有効とされており(Currey, 1960; Harsányi, 1993)、特にH-On示数は人獣鑑別に優れた指標である(澤田ほか, 2010; 澤田・奈良, 2015)。

試料はいずれも二次オステオンを主体とする緻密質であり、骨質が厚いことから中・大型哺乳類に比定される。このうち、試料NB01とNB03のOn.Ar, H.Ar, H-On示数は中・大型哺乳類の中でもヒトの値の範囲内ないしヒトに近い値を示したことから(図1・2)、これら2点の試料はヒトの可能性がきわめて高いと判断してよい。偶蹄目などヒト以外の一部の動物群に発達する葉状骨が試料に認められなかったことも、この見解と矛盾しない。なお、軟部組織に包まれた生骨が強く焼成したとき、高温により組織形態が変化することがある(Nelson, 1992)。しかしながら、試料の表面に生骨焼成に伴う亀裂(cf. 池田, 1981)が生じておらず、試料NB03に良好な組織形態が保存されていたことも考慮すると、焼骨であったとしても組織形態の変化の影響は小さいと思われる。

ヒトの骨組織形態は成長段階によって異なっており、例えば新生児から乳児の大腿骨骨幹部は一次骨を主体とするが(写真2-14)、2歳を過ぎると二次骨(二次オステオン)が散見されるようになり、成長に伴って二次骨の占める割合は増加していく(Kerley, 1965; Sawada et al., 2004)。試料は一次骨をほとんど含まず、二次オステオンを主体としていたことから、ある程度成長が進んだ個体由来するとみなして大過ない。

試料NB02は中・大型哺乳類に類似していたものの、保存不良ゆえ人獣鑑別は困難であった。ただし、ヒトの特徴に合致しない組織形態は見られなかったことから、

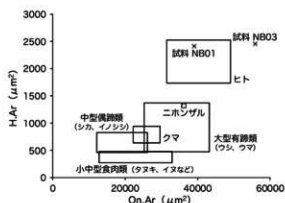


図1 オステオン面積 (On.Ar) とハバース管面積 (H.Ar)

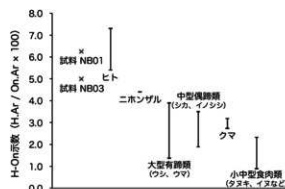


図2 オステオンとハバース管の面積比 (H-On示数)

ヒトの可能性は否定されない。

### (6) 結論

仲歩切遺跡平成26年度工事立会のSK 8-1 ~ 3から出土した白色の骨様物質を組織形態学的に検討した結果、これらがいずれも中・大型哺乳類の緻密質であることを明らかにした。なかでもSK 8-1・3から出土した骨片は、人骨の可能性が高いと考えられた。SK 8-2から出土した骨片は保存状態が悪く、人獣鑑別に至らなかった。(澤田純明・佐伯史子・奈良貴史)

### 引用・参考文献

- Currey J.D. (1960) Differences in the blood-supply of bone of different histological types. *Quart J Microscopic Sci.* 101: 351-370.
- Greenlee D.M. and Dunnell R.C. (2010) Identification of fragmentary bone from the Pacific. *J. Archaeol. Sci.* 37: 957-970.
- Harsányi L. (1993) Differential diagnosis of human and animal bone. In: Grupe G. and Garland A.N. (eds.) *Histology of Ancient Human Bone: Methods and*

Diagnosis, Springer, Berlin, pp. 79-94.

Hillier M. and Bell L.S. (2007) Differentiating human bone from animal bone: a review of histological method. *J Forensic Sci.* 52: 249-263.

Kerley E.R. (1965) The microscopic determination of age in human bone. *Am J Phys Anthropol.* 23: 149-164.

Mulhern D.M. and Ubelaker D.H. (2012) Differentiating human from nonhuman bone microstructure. In: Crowder C.M. and Stout S.D. (eds.), *Bone Histology*, CRC Press, Boca Raton, pp. 109-134.

Nelson R. (1992) A microscopic comparison of fresh and burned bone. *J Forensic Sci.* 37: 1055-1060.

Pfeiffer S. (2000) Palaeohistology: health and disease. In: Katzenberg M.A. and Saunders S.R. (eds.), *Biological Anthropology of the Human Skeleton*, Wiley-Liss, New York, pp. 287-302.

Sawada J., Kondo O., Nara T., Dodo Y., Akazawa T. (2004) Bone histomorphology of Dederiyeh Neanderthal child. *Anthropol Sci.* 112: 247-256.

Sawada J., Nara T., Fukui J., Dodo Y., Hirata K. (2014) Histomorphological species identification of tiny bone fragments from a Paleolithic site in the Northern Japanese Archipelago. *J Archaeol Sci.* 46: 270-280.

池田次郎 (1981) 出土火葬骨について. 奈良県立標原考古学研究所編, 太安呂偶墓, 奈良県教育委員会, 標原市, pp. 79-88.

澤田純明・奈良貴史・中嶋友文・斉藤慶史・百々幸雄・平田和明 (2010) 骨組織形態学的方法による骨小片の人類鑑別: 東北北部の平安時代遺跡から出土した焼骨の分析. *Anthropol Sci (J Ser)*, 118: 23-36.

澤田純明・奈良貴史 (2015) 大沢谷内遺跡出土焼骨の肉眼観察および骨組織形態学的所見. 新潟市文化財センター編, 大沢谷内遺跡IV第19・20・21次調査. 新潟市教育委員会, 新潟, pp. 154-158.

附表 比較動物標本の骨組織形態計測値

分類群	資料標本番号	n	Ox.Ar (µm <sup>2</sup> )		H.Ar (µm <sup>2</sup> )		Ox.Ar/Ox.Ar	
			Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD
<b>霊長類</b>								
ヒト	Homo03Ba	29	31403.8	10540.6	29409	8947	69	3.2
ヒト	Homo02Fa	54	14846.8	25999.6	25245	13999	64	3.1
ヒト	Homo02Fa	15	28016	12258.2	17343	9913	54	3.0
ヒト	Homo04Fa	46	35742.1	113153	22362	9205	69	3.0
ヒト	Homo02Fa	22	36661	126667	17467	9851	54	3.5
ヒト	Homo04Fa	26	49397	206939	23345	13277	54	3.6
ニホンザル	Macaca01Fa	12	36354.1	109448	13173	6653	64	1.3
<b>霊物類</b>								
ウツ	Eq01P	55	45422.9	22784	13711	6028	39	2.4
<b>偶蹄類</b>								
イノシシ	Sua01B	26	22945	110433	6027	1668	20	0.7
イノシシ	Sua01P	11	249229	107584	6807	3868	30	1.7
イノシシ	Sua02F	67	296732	71550	6460	2871	35	1.6
イノシシ	Sua02F	29	257611	75792	6272	3087	32	1.0
ニホンジカ	Cervus02Ba	51	29056	62212	604	1284	26	0.9
ニホンジカ	Cervus03Ba	30	206166	70462	5035	1729	26	0.8
ニホンジカ	Cervus04Ba	49	121442	63445	-	-	-	-
ニホンジカ	Cervus02Fa	28	179652	86214	5068	2268	32	1.4
ニホンジカ	Cervus03Fa	46	225229	91678	7222	3176	34	1.4
オオカミ	Can01P	32	261611	82803	4658	2060	20	1.0
ウシ	Bos04Ba	71	432987	146623	5914	2419	15	0.7
ウシ	Bos02Fa	25	31524	100016	6966	2832	23	0.8
ウシ	Bos03Fa	16	286613	108820	7148	3381	26	1.0
<b>食肉類</b>								
キツネ	Vulpes01M	21	229173	107483	2946	1423	19	0.5
キツネ	Vulpes02M01P	13	226223	114509	4801	1928	25	1.1
イヌ	Can01B	26	127892	10379	2862	1633	37	2.1
イヌ	Can01Fa	46	152914	49540	2733	1310	28	0.8
クマ	Ursus01Ba	114	263561	112864	7193	2964	31	1.6
クマ	Ursus01Ba	109	296149	113614	9421	4961	34	1.2
クマ	Ursus01Fa	121	222232	62758	6373	3381	30	1.4
クマ	Ursus01Fa	138	228966	61266	7159	3361	33	1.3

n: 分析の二次オステオンの数, Ox.Ar: 分析の二次オステオンの面積, H.Ar: 分析の二次オステオンの内にあるハバース管の面積, H.Ar/Ox.Ar: n/100, ユー・P (Sawada et al. (2014) と著者前・奈良 (2015) に基づく).

## 引用・参考文献

- 相田泰臣 2009 「古墳時代の舟田山麓と阿賀北における土器の一種相」『新潟県の考古学』Ⅱ 新潟県考古学会
- 相田泰臣 2015 「Ⅴ 研究活動-資料報告-研究ノート等- 3 新潟市秋葉区舟戸遺跡出土土物」『新潟市文化財センター年報-平成25(2013)年度版-』第2号 新潟市文化財センター
- 相田泰臣ほか 2015a 「大沢谷内遺跡Ⅱ 第19・20・21次調査-一般国道403号小須戸田バイパス整備工事に伴う大沢谷内遺跡第12・13・14次調査-」新潟市教育委員会
- 相田泰臣ほか 2015b 「国史跡 吉津八幡山遺跡 保存整備事業報告書2-1600年の時を越え よみがえる雄麗の王墓-」新潟市教育委員会
- 朝岡政彦ほか 2009 「千代山北遺跡 第2・3次調査-市道亀田南線建設事業に伴う千代山北遺跡第2・3次発掘調査報告書-」新潟市教育委員会
- 安立 聡 2001 「第5章 まとめ 第3節 祭祀について」『末清東遺跡-築道建設に伴う発掘調査報告書』 福沢町教育委員会
- 阿部明彦ほか 1988 「難岡西部地区遺跡群 矢籠A遺跡 矢籠B遺跡 清水新田遺跡発掘調査報告書」山形県教育委員会
- 甘船 暁ほか 1986 「六地山遺跡-1982年発掘調査を中心に-」新潟市教育委員会
- 鎌山よりほか 2004 「新潟市山本戸遺跡 マンション等建設予定地内発掘調査報告書」新潟市教育委員会
- 石原正敏・木村祐治 1996 「新潟県新潟市原遺跡出土の瓦形土製品」『縄文時代』第7号 縄文時代文化研究会
- 大塚真良 1986 「越後国中津原郡程島村字赤生々原石器時代に遺跡発見に付きて」『東京人類学雑誌』11巻119号 東京人類学会
- 今井さやか 2014 「Ⅳ 文化財センター事業 8 保存処理」『新潟市文化財センター年報-平成23(2011)年度-平成24(2012)年度版』第1号 新潟市文化財センター
- 今井さやか 2015 「Ⅴ 研究活動-資料報告-研究ノート等- 7 アスファルト舗装実験について」『新潟市文化財センター年報-平成25(2013)年度版-』第2号 新潟市文化財センター
- 渡藤恭雄・青木 誠ほか 2015 「湖池寺道上遺跡Ⅳ 第43次調査-市道大安守第5号大岡線改良工事に伴う湖池寺道上遺跡第3次発掘調査報告書-」新潟市教育委員会
- 渡藤恭雄・澤野慶子ほか 2014 「沖ノ羽遺跡Ⅳ 第18・19次調査-県営は場整備事業(相い手成型)満日地区に伴う沖ノ羽遺跡第11・12次発掘調査報告書-」新潟市教育委員会
- 春日真実 1999 「第4章 古第2節 土器編年と地域性」『新潟県の考古学』高志書院
- 春日真実 2000 「考古編 第5章 まとめ」『吉田町史』資料編1 考古・古代・中世 吉田町
- 春日真実 2013 「越後の越6・7世紀を中心に」『研究紀要』第7号 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 春日真実ほか 2002 「奈良崎遺跡 国道116号和島バイパス二級河川那本川川改修工事関係発掘調査報告書」新潟県教育委員会
- 春日真実ほか 2014 「大沢谷遺跡Ⅱ(古代-縄文時代編)-一般国道116号和島バイパス関係発掘調査報告書Ⅱ」新潟県教育委員会
- 金田哲也 2015 「東北における石製機織品の展開」『阿武隈川流域における古墳時代の成長の動向把握のための基礎的研究』福島大学行政政策学類
- 藤本幸彦・安井 賢 2004 「古地理図でたどる越後平野の生い立ち」『土と基礎』第52巻 第11号 社団法人地盤工学会
- 横根 勇 1985 「越後平野の一、〇〇〇年」新潟日報事業社
- 川上貞雄 1989a 「第二編 考古」『新潟市史』資料編第一巻 原始・古代・中世 新潟市
- 川上貞雄 1989b 「大沢谷内遺跡発掘調査報告書」小須戸町教育委員会
- 川上貞雄 1995 「舟戸遺跡 発掘調査報告書」新潟市教育委員会
- 川上貞雄 2002 「熊澤遺跡」熊神村教育委員会
- 黒坂雅人・伊藤純子 2012 「矢籠A遺跡第2~4次発掘調査報告書」財団法人山形県埋蔵文化財センター
- 黒坂雅人ほか 1990 「助作遺跡第1次発掘調査報告書」財団法人山形県埋蔵文化財センター
- 坂井秀弥 1988 「越後・佐渡における古代土器の生産と流通-8~10世紀を中心に-」『シンポジウム 北陸の古代土器研究の現状と課題』報古編
- 古編 石川考古学研究会・北陸古代土器研究会
- 坂井秀弥 1990 「新潟県三島郡舟坂町の製鉄遺跡」『新潟考古』第1号 新潟県考古学会
- 坂井秀弥 2000 「原始・古代・中世 第一章 越後平野のあけぼの 第二節 黒城のはじまり 第一項 諾立遺跡の発見」『黒崎町史』通史編 黒崎町
- 坂井秀弥ほか 1989 「新新バイパス関係発掘調査報告書 山三賀遺跡」新潟県教育委員会・建設省新潟国道工事事務所
- 坂井隆一 1991 「1 地学 第1章 地質」『新潟市史』資料編12 自然 新潟市
- 澤野慶子 2014a 「第Ⅴ章第1節A 古墳時代の土器」『沖ノ羽遺跡Ⅳ 第18・19次調査-県営は場整備事業(相い手成型)満日地区に伴う沖ノ羽遺跡第11・12次発掘調査報告書-』新潟市教育委員会
- 澤野慶子 2014b 「第Ⅴ章第2節A 古墳時代の土器について」『沖ノ羽遺跡Ⅳ 第18・19次調査-県営は場整備事業(相い手成型)満日地区に伴う沖ノ羽遺跡第11・12次発掘調査報告書-』新潟市教育委員会
- 園田 雅之 1980 「高尾遺跡Ⅰ-新潟県豊栄市・磯文地区土坑群の発掘調査報告-」新潟県豊栄市教育委員会
- 園田 雅之ほか 2015 「下新田遺跡 第6・8・9次調査 県営は場整備事業(経営体育成基盤整備型)土地区に伴う第3・5・6次発掘調査報告書」新潟市教育委員会
- 立本宏明 2015 「Ⅳ 文化財センターの事業 2 平成25年度の本発掘調査 (4)湖池寺道上遺跡第41次調査(2013004)」『新潟市文化財センター年報-平成25(2013)年度版-』第2号 新潟市文化財センター
- 土本 匡ほか 2008 「西部遺跡Ⅳ」新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 鶴巻志志ほか 2008 「熊取遺跡・神明遺跡 発掘調査報告書」新潟市教育委員会
- 寺村光晴 1960 「越後六地山遺跡」『上代文化』第30輯 國學院大學考古学会
- 寺村光晴 1972 「神道考古学講義」第二巻 雄山閣
- 中村五郎 1988 「強生文化の曙光 縄文・弥生文化の接点」未栄社
- 新潟市教育委員会 2015 「平成26年度 新潟市文化財調査概要」新潟市教育委員会
- 新潟市文化財センター 2014 「新潟市文化財センター年報-平成23(2011)年度-平成24(2012)年度版」第1号 新潟市文化財センター
- 新潟市史編さん原始古代中世史部会 1994 「新潟市史」資料編1 原始古代中世 新潟市
- 前山高伯ほか 2012 「大沢谷内遺跡Ⅱ 第7・9・11・12・14次調査-一般国道403号小須戸田バイパス整備工事に伴う大沢谷内遺跡第2・4・6・7・9次発掘調査報告書-」新潟市教育委員会
- 前山高明・相田泰臣 2004 「舟戸遺跡Ⅱ-2003年度確認調査の概要-」新潟市教育委員会
- 前山高明ほか 2012 「大沢谷内遺跡Ⅱ 第18次調査-市道鎌倉川線改良工事に伴う大沢谷内遺跡第2次発掘調査報告書-」新潟市教育委員会
- 水澤幸一・寺村光晴 2004 「原倉遺跡Ⅱ」中奥町教育委員会
- 吉井雅秀 2006 「追分遺跡」夏川町教育委員会
- 渡辺朝樹 2014 「Ⅴ 史跡吉津八幡山遺跡歴史の広場 1 史跡吉津八幡山遺跡保存活用事業の概況」『新潟市文化財センター年報-平成23(2011)年度-平成24(2012)年度版』第1号 新潟市文化財センター
- 渡藤朝樹 2015 「Ⅴ 研究活動-資料報告-研究ノート等- 2 海堀がりの須原遺跡2点」『新潟市文化財センター年報-平成25(2013)年度版-』第2号 新潟市文化財センター

平成26年度刊行発刊調査・整備事業報告書一覧

書名	副書名	発行年月日	執筆者
観音寺道ノ道跡Ⅱ 第26次調査	船宮は境整備事業（掘い・字存成程）西新地区に伴う 第12次発掘調査報告書	平成26年 7月25日	立木安明ほか
国史跡 古津八幡山道跡 保存整備事業報告書2 →1800年の時を越え よみがえる道跡Ⅱ上巻→		平成27年 3月25日	相田幸臣ほか
観音寺道ノ道跡Ⅳ 第43次調査	市道大安寺第5号大規模改良工事に伴う 観音寺道ノ道跡第3次発掘調査報告書	平成27年 3月31日	遠藤忠雄ほか
大沢谷内道跡Ⅱ 第19・20・21次調査	一般国道403号小坂戸田上バイパス整備工事に伴う 大沢谷内道跡第12・13・14次調査	平成27年 3月31日	相田幸臣ほか

平成26年度文化財センター・歴史文化課埋蔵文化財担当職員名簿

文化財センター		
所長	中野俊一	統 長
所長補佐	福地麻郎	事 務
主任（学芸員）	清藤朋和	埋蔵文化財
主任（学芸員）	遠藤忠雄	埋蔵文化財
主任	本間敏則	事 務
副主任（学芸員）	前山精明	埋蔵文化財
主査（学芸員）	立木安明	埋蔵文化財
主査	上田徳茂	事 務
主査（文化財専門員）	今井さやか	埋蔵文化財
主査（学芸員）	相田幸臣	埋蔵文化財
主査（学芸員）	潮田善幸（宮城町へ派遣）	埋蔵文化財
主査（文化財専門員）	龜田健子	埋蔵文化財
副主任（文化財専門員）	相澤祐子	埋蔵文化財
委員（文化財専門員）	金田裕也	埋蔵文化財
非常勤職員	酒井和男	民俗文化財
非常勤職員	八藤俊智人	埋蔵文化財
非常勤職員	浮野優子	埋蔵文化財
非常勤職員	寺崎祐助	埋蔵文化財
非常勤職員	宮下真貴子	埋蔵文化財
非常勤職員	土佐夕美子	事 務
非常勤職員	牧野耕作	埋蔵文化財
歴史文化課埋蔵文化財担当		
主幹（文化財専門員）	廣野裕造	埋蔵文化財
主査（文化財専門員）	鎌山よりか	埋蔵文化財
主査（文化財専門員）	朝岡政康	埋蔵文化財
非常勤職員	真田 敦	事 務



平成26年度文化遺産部の組織機構図

新潟市文化財センター年報 第3号  
—平成26（2014）年度版—

2016年3月28日印刷・発行

編集・発行 新潟市文化財センター  
 〒950-1122 新潟市西区木場2748番地1  
 電話 025-378-0480

印刷 株式会社ウィザップ  
 〒950-0963 新潟市中央区南出来島2丁目1-25